博士（人間科学）学位論文

ナッブートの民族誌

－エジプト・アラブ共和国クルナ村の事例から－

Ethnography on *al-nabbut*

2007 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

瀬戸　邦弘

Seto, Kunihiro

指導教員：　寒川　恒夫　教授

目次
図版目次

序章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1　ナッブートとは
2　研究の問題の所在
3　先行研究検討

第1章　調査地の社会と聖者信仰・・・・・・・・・・・・・・・・・9
1.1　調査地の概要・調査対象
1.1.1　エジプト・アラブ共和国
1.1.2　上エジプト地方　―地域社会とそのアイデンティティー
1.1.3　観光空間としての調査地
1.2　ルクソール西岸における聖者信仰
1.2.1　聖者
1.2.2　語り（ナラティブ）としての奇蹟
1.2.2.1　空中浮遊
1.2.2.2　瞬間移動
1.2.2.3　壁・戸開け
1.2.2.4　動物変身
1.2.2.5　語り（ナラティブ）による過去の再構成
－アイデンティティ構築と演劇性の生成－
1.3　聖者生誕祭（マウリド）
1.3.1　A廟の聖者および聖者生誕祭
1.3.2　A氏の聖者生誕祭の云われ
1.3.3　A氏の生誕祭の主催者
1.3.4　聖者生誕祭の準備
1.3.4.1　1ヶ月～10日前まで
1.3.4.2　10日ほど前
1.3.4.3　3日ほど前
1.3.4.4　シャーバーン月24日
1.3.5　聖者生誕祭の構成要素
1.3.5.1　行進「ザッファ」初日のみ―16時頃―
1.3.5.2　1.3.5.2 馬の競演「マルマーハ」　3日間とも
－16時半頃から―

1.3.5.3　ナッブートの競技会
3日間―17時頃～夜半まで開催―
1.3.5.4　ズィクル　夜半～
1.3.5.5　歌手の招待
1.3.5.6　生誕祭での出店

第2章　ナッブートの文化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
2.1　祝祭（マウリド）で実修されるナッブート
2.2　A廟の聖者生誕祭におけるナッブート
2.2.1　ナッブート競技会の運営について
2.2.2　競技について
2.2.3　競技所作
2.2.3.1　競技前の作法　―ラアサ―
2.2.3.2　競技開始時の作法　―サラーム―
2.2.3.3　競技開始時の作法　－ラーシュ―
2.2.3.4　サラームとラーシュの関係
2.2.3.5　競技開始時の作法　－ムサーラファ―
2.2.3.6　試合の流れ
2.2.3.7　競技場　―刹那的に生起され、そして消える空間―
2.2.3.7.1　常設的な競技空間の登場
2.2.3.8　競技の行われる時間帯
2.2.3.9　伴奏の音楽
2.3　身体文化の見地から見るナッブート
2.3.1　攻撃箇所
2.3.2　攻撃・防御の型・技について
2.3.3.　ナッブートの握り方・構え
2.3.4.　攻撃と防御の基準
2.3.4.1　頭部に対する防御法
2.3.4.2　立位での攻撃・防御
2.3.4.3　しゃがみ位での攻撃・防御
2.3.4.4　実践での攻撃方法例
2.3.4.4.1　上段への攻撃例　回転上段打ち
2.3.4.4.2　下肢への攻撃例　地面をたたいて、腰への攻撃
2.3.5　勝負の駆け引き
2.3.6　流派・スタイルについて

2.3.6.1　名人達の存在
2.4　女性の参加
2.5　ナッブートの実施状況
2.5.1　2006年A氏の聖者生誕祭におけるナッブートの実施状況
2.5.2　上エジプト地方の聖者生誕祭におけるナッブート比較例(1)
2.5.3　上エジプト地方の聖者生誕祭におけるナッブート比較例(2)
2.6　子供のナッブート教育
2.7　練習会
2.8　ナッブートの入手法　－ナッブートの種類－
2.9　文化変容したナッブート　―下エジプトのナッブート―
2.10　非日常の世界としてのナッブート
2.11ナッブート離れ　－暴力性とその現状―
2.11.1 生活スタイルの変化
－西岸の人々の多くがナッブートを行なわない理由－
2.11.2 若者たちの意見
2.11.3 ナッブートの持つ暴力性

第3章　ナッブートの持つ機能・・・・・・・・・・・・・・・・・133
3.1　ナッブートの文化的機能
3.1.1　イーミックな技の伝承のあり方
3.2　ナッブートの社会的機能
3.2.1　コミュニティ間のネットワーク強化
3.2.2　内在化されながら周辺的存在として
あり続けるナッブート
3.2.3　アイデンティティの中心としての聖者
―聖者を中心とした個々のアイデンティティの創出―
3.2.4　非日常の空間を利用したナッブートの
正当化システムの構築とナッブートを中心とした
広範なアイデンティティの創出
3.3　聖者生誕祭を支える要素としてのナッブート
3.3.1　祝祭前後の集団
3.3.2　周辺地域の有力者との親交の場
3.3.2.1　(1)ホスト⇔ゲスト間の可視的互酬性の発生

3.3.2.2　(2)ホスト⇔聖者から神へという不可視的互酬性の
3.3.2.3　(1)(2)のまとめ
3.4　観光化変容　ルールの提案と近代スポーツ化への道
－ナッブートを巡る伝統と変容－
3.4.1　ポイント制の導入
3.4.2　試合時間の導入
3.4.3　トーナメント制の導入
3.4.4　審判制の導入
3.4.5　競技会場の明確化
3.4.6　諸ルールの導入
3.4.7　順位確定と表彰の導入

第４章　文化文脈の中でのナッブート
－イーミックな捉え方として―・・・・・・・・・・148
4.1.　実修者の言説
―ナッブートの語られる、位置する文化文脈－
4.1.1　村々におけるナッブートの捉え方の違い
4.1.2　言い伝えにみるナッブートの社会的な地位
4.1.3　紳士的な振る舞いの前提の存在
4.1.4　状況に応じて緩やかに変更される予定
4.1.5　人間関係の中でのナッブート

第５章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
5.1　伝統的スポーツ、国際スポーツとしてのナッブート
5.1.1　伝統的スポーツとしての文脈
5.1.2　近代・国際的スポーツとしての文脈
5.1.3　近代・国際スポーツの文脈から捉えられる
伝統的スポーツナッブート
5.2　二重のアイデンティティと
上エジプト人化の構築システム

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
文末註・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169

図版目次

図 001　ナッブート
図 002　ナッブート携行風景
図 003　エジプト全図
図 004　上エジプト地方
図 005　クルナ村風景
図 006　L 市市域および周辺概念図
図 007　市場風景
図 008　ファーストフード店
図 009　みやげ物作成風景 1
図 010　みやげ物作成風景 2
図 011　渡しフェリー風景
図 012　A 氏聖者廟
図 013　B 氏自宅
図 014　電灯設置風景 1
図 015　電灯設置風景 2
図 016　夕食準備風景
図 017　夕食用牛肉
図 018　B 氏宅ザーウィヤ内
図 019　ザッファ風景 1
図 020　ザッファ風景 2
図 021　ザッファ風景 3
図 022　馬の競演風景 1
図 023　馬の競演風景 2
図 024　馬の早駆け
図 025　ナッブート会場
図 026　ズィクル会場
図 027　ズィクル風景
図 028　上エジプトの歌手（右側）
図 029　聖者生誕祭会場図
図 030　聖者生誕祭
図 031　船型ブランコ
図 032　幼児用電気自動車
図 033　射的(鉄砲)
図 034　賭け

図 035　電気自動車
図 036　回転ブランコ
図 037　輪投げ
図 038　力比べ
図 039　装飾品の出店
図 040　子供用玩具店 1
図 041　子供用玩具店 2
図 042　豆類を売る店
図 043　お菓子の出店
図 044　クシャリ販売店
図 045　飲料品販売店
図 046　お菓子販売店
図 047　N 氏宅ザーウィヤ内
図 048　ラアサ 1
図 049　ラアサ 2
図 050　サラーム 1
図 051　サラーム 2
図 052　片手によるラーシュ 1
図 053　片手によるラーシュ 2
図 054　両手によるラーシュ 1
図 055　両手によるラーシュ 2
図 056　ムサーラファ 1
図 057　ムサーラファ 2
図 058　ムサーラファに至る動作(1/2)
図 059　ムサーラファに至る動作(2/2)
図 060　ナッブート会場（実施中）
図 061　ナッブート会場（実施前）
図 062　N 氏の用意した会場
図 063　ナッブートの伴奏音楽（テーマ）
図 064　ナッブートの伴奏音楽（実例）
図 065　攻撃箇所図
図 066　しゃがみ位での攻防

図 067　ナッブートの握り方
図 068　両手による防御の握り方
図 069　両手による防御の姿勢
図 070　立位での頭部に対する攻撃、防御
図 071　立位での頭頂部、頚部、肩に対する攻撃、防御
図 072　立位での肩部、肘部に対する攻撃、防御
図 073　立位での肩部、肘部、腋窩、腰部へ攻撃、防御 1
図 074　立位での肩部、肘部、腋窩、腰部へ攻撃、防御 2
図 075　立位での腰部、大腿部、膝、
つま先への攻撃、防御 1
図 076　立位での腰部、大腿部、膝、
つま先への攻撃、防御 2
図 077　立位での顔（頬部、目、鼻、口）、胸部、
急所への攻撃、防御
図 078　実戦での防御（立位）
図 079　立位での肩越しからの背面への攻撃、防御
図 080　立位での背面への攻撃、防御
図 081　実戦での防御（後背部）
図 082　立位でのつま先への攻撃、防御
図 083　しゃがみ位での正面への攻撃
図 084　立位での肩部、肘部に対する攻撃、防御
図 085　しゃがみ位での肩部、肘部、腋窩、
腰部へ攻撃、防御
図 086　しゃがみ位での顔（頬部、目、鼻、口）、胸部、
急所への攻撃、防御
図 087　実戦での防御（しゃがみ位）
図 088　背面部への攻撃防御
図 089　しゃがみ位での背面部への攻撃、防御
図 090　回転上段打ち(1/4)
図 091　回転上段打ち(2/4)
図 092　回転上段打ち(3/4)
図 093　回転上段打ち(4/4)
図 094　地面をたたいて、腰への攻撃(1/2)
図 095　地面をたたいて、腰への攻撃(2/2)
図 096　女性の見物者

図 097　ナッブート実修風景 1
図 098　ナッブート実修風景 2
図 099　人垣
図 100　競技会での再会風景
図 101　楽団の演奏風景 1
図 102　食事風景
図 103　ザーウィヤ内
図 104　ザーウィヤ外歓談風景
図 105　ナッブート競技会風景 1
図 106　ナッブート競技会風景 2
図 107　ナッブート競技会風景 3
図 108　ナッブート競技会風景 4
図 109　楽団の演奏風景 2
図 110　モスク前広場
図 111　ナッブート実修風景 3
図 112　ナッブート実修風景 4
図 113　子供のナッブート風景
図 114　食事風景 2
図 115　ナッブート実修風景 5
図 116　子供の見学
図 117　親子の見学
図 118　子供の遊び
図 119　競技用ナッブート
図 120　3 色の鋲
図 121　装飾されたナッブート
図 122　ナッブート加工風景 1
図 123　ナッブート加工風景 2
図 124　ナッブート加工風景 3
図 125　揉め事
図 126　再会

表目次

表 1　伝統的競技形態と観光化によって変容した形態との比較

序　章

はじめに

1 ナッブートとは

本論においてナッブートと呼称するものは上エジプト地方で見られる杖を指し、アラビア語で *al-nabbut*（ナッブート）（もしくは *'asaya*（アサーヤ））[1]と呼ばれているものである。上エジプト地方の農村部において男性は、日常しばしばこのナッブートを携帯する。この杖は約１ｍ～1.5ｍほどである（図 001-002）。

図 001 ナッブート

上エジプト地方の農村部では、祝祭などの折にナッブートを用いて競技や演舞を行なう。この地方の男性の多くは自分用のナッブートを持つ。握りを牛の尾の革で巻き、色とりどりの鋲でとめ、ナッブートを装飾する。彼らが身に纏う民族衣装ガラベーヤの色がさまざまであるように、多様に装飾されたナッブートもまた、何か持主のオリジナリティーを主張しているようにさえ見受けられる。

この杖を使った競技・演舞は、杖自体の呼称と同じくナッブートと呼ばれる。本論で考察の対象とするエスニック・スポーツの名称は、実修者によるこの呼称に由来する。

図 002 ナッブート携行風景

考察に先立ち、現在のナッブートの競技・演舞の歴史的背景を考察する必要があろう。ナッブートに類似するものはすでに古代エジプト時代に見ることができる（瀬戸 2000a: 103-110）。歴史を遡ること 3300 年以上、本研究の調査地である上エジプト地方のクルナ村は古代エジプトの新王国時代に大いに栄えた都市であった。この地に造営された当時の建造物に、その競技を確認する事ができる。たとえば、ラメセスⅢ世王 [2]の記念神殿第 2 中庭に位置する浮き彫り、アメンヘテプⅢ世 [3]王妃ティイの家令ケルエフの墓（TT192）の墓内の浮き彫り、また、当時のオストラカ [4]に、祝祭の場において棒（杖）を使った競技・演舞が活き活きと描き出されている。

Vandier d'Abbadie は古代競技の考察・分析にあたり、現代のナッブートとの比較を試みている（Vandier d'Abbadie 1940: 467-488）。彼の考察は、古代と現代の事例の具体的なつながりを論証するものではなく、客観的な類似点の比較に留まっている。したがって、その論証のあり方は、いささか短絡的であるとの誹りは否めず、文化事象の比較研究方法としては安易といわざるを得ない点があるかもしれない。しかしながら、時代を違えて同地域に類似の競技が存在する点に注目した事は評価に値し、またその事象の比較検討を試みた事も、研究資料の提供という点からも注目する価値はあるだろう。

実は、同地域のナッブート実修者達の言説として、「古代エジプトの時代から、当該地域にはナッブートが存在し、遺跡にその姿を確認できる。したがってここが、上エジプト地方の中で歴史的に一番古くからナッブートが行われている場所であり、一番由緒正しき場所である」というものがある。先述したように、実際に古代から現代に及ぶ文化的なつながりは確認できない。しかし、この遺跡群に残る考古資料を、当該地域の実修者たちが、自らのアイデンティティの強化のためのひとつの歴史的権威として、利用している点は、非常に興味深いことといえよう。

2 問題の所在

本研究は、エジプト・アラブ共和国における上エジプト地方の農村部で伝統的な生活を送る人達を対象とする。エジプトでは多くの人々がイスラームの宗教的な文脈の中で生活を送っている。本研究においては、その宗教アイデンティティをベースにしながら、育まれる地域アイデンティティについて考察を試みる。そこでは、上エジプト人としての地域アイデンティティを創出し、それを維持・再生産する“文化装置”として伝統的スポーツが、いかなる役割を期待され、またいかなる機能を果たしているのかを考察する事が目的となる。

具体的に考察のポイントを述べるならば、上エジプト地方（特にケナーより南）においてナッブートと呼ばれる伝統的スポーツが聖者信仰[5]、特に聖者生誕祭（マウリド）[6]の中でどのような役割、機能を果たすのかを考察する。そこでは、特にナッブートというスポーツに付帯するさまざまな文化的要素の考察を通して、当該社会における個々人のアイデンティティ形成、および周辺地域コミュニティ間のネットワークの構築・強化という側面の理解がなされる。周知のように、エジプト・アラブ共和国はムスリムが大半を占める国であり、本稿で考察の対象となる事象もムスリム達の生活の中におけるスポーツである。イスラームの文化研究は、近年に至るまでその中心を文献資料の考察においていた。そこでは正統なイスラーム教義の世界を探る事にその主眼が置かれ、聖職者や宗教エリート達の書いた神学・教学書や説教録などの分析が中心的に行なわれ、換言すれば、「教理研究」にその一義的な価値を求めるものであったように思われる。したがって、一般信徒の日々の暮らしにおける日

常的な実践に関しては、口頭伝承など文字化されていない情報などを含めてあまり注目されてこなかったと言える。本研究は当該地域のハビトゥスとして習得され、コミュニティ、およびコミュニティ間の共通コードとして共有化されたスポーツの実修状況を観察し、それをひとつの身体文化として捉え、一文化装置としての役割・機能を通して当該地域の社会や文化の考察を試みるものである。またナッブートを伝統的スポーツとして位置づけ、文化装置として捉え、文化の問題を解くツールとして用い、論じるのは研究史上本論文が初めてのことであろう。

当該地域の日常に深く根ざしたこのスポーツの考察は、当該社会の本質を理解する上で非常に重要な意味を持つと考える。この競技は、日常生活の中で語られ、実践されているひとつの民衆の文化であり、参与考察を中心にそれを考察する事によって、エティックな視点からの研究と同時にイーミックな視点、つまり人々の日常的な実践の世界を、実修者の目線から考察する事をもその目的とする。尚、その研究方法は文化人類学的方法が用いられた。また文中に特に注記のない場合は筆者のフィールドワーク情報によっている[7]。

3 先行研究検討

Vandier d'Abbadie は古代競技の考察・分析にあたり、現代のナッブートとの比較を試みている（Vandier d'Abbadie 1940: 467-488）。d'Abbadie の考察は、現代と古代文化の具体的なつながりを論証するものではなく、客観的な類似点の指摘がその論の中心である。彼が研究対象としたのはあくまで古代のスティック・ファイティングであり、その理解を助けるために比較事例として現代のナッブートが引き合いに出されている。したがって、彼の事例研究がいささか短絡的に感じられてもそれは仕方がない事かもしれない。しかし彼が同地域に類似の競技が存在した事に注目した点は評価に値し、それらの比較検討を試みた点は注目する価値があると考える。

ギリシアの歴史家ヘロドトスも、ナッブートに類似する競技を記録している。彼によれば、ナイル川下流デルタ地方のパプレミスの祝祭の折に棒を用いた競技が祝祭の中心的儀礼として行われていたという（ヘロドトス 松平訳 1972: 201-202）。この祝祭はラーなどの古代の神に奉るものとされている。祝祭の中の儀礼においては一対一ではなく集団での競技が展開されていたが、後に d'Abbadie は、

この競技を新王国時代からの流れを組むものと位置づけている（Vandier d'Abbadie 1940: 467-488)。ヘロドトスの記述した事例は下エジプトのものであるが、古代から現代への棒を用いた格闘技を考察するに当たっては、非常に興味深い事例といえるであろう。

その後 18 世紀にも、棒を用いた格闘技の姿を確認できる。Niebuhr は 18 世紀のエジプトの農民の間で行われた棒を用いた競技を紹介している。その競技は競技者が挨拶し、双方棒を重ねるところから始まるとされるが、この競技についても d'Abbadie が古代事例との比較の中で言及している（Vandier d'Abbadie 1940: 467-488)。また 19 世紀の事例に関しては、当時の農民が娯楽のために *naboot* と呼ばれる棒で競技を行っていた様子が Lane によって紹介されている。その棒は 5 ～ 6 フィートほどの長さを有し、この棒は単なる競技の武器ではなく、旅や夜間外出する場合に自衛のため武器として携行されたとされる(Lane 1836:350)。

興味深い事に、18 世紀の事例は現代のナッブートと同様に挨拶から始まり、棒を重ね合わせるような所作が競技開始時に見られ、その関係性は注目される。また 19 世紀の事例に関しても、現在のナッブートの競技、およびそれを取り巻く環境とその記述内容がほぼ一致しており、両者の間に密接な関係性が推察できる。

20 世紀初頭から中盤にかけてのナッブートに関して報告がほとんど見受けられない中、W.S.Blackman の *The Fellahin of Upper Egypt* の中で紹介されている記事は特筆に価する。彼女は、古代エジプトから現代社会にまで残る“残存（survival)”の文化要素を抽出する事に関心を払いながら、当時の社会・経済・宗教生活・民俗事例を事細かに論じているが、その中に 20 世紀初頭の上エジプト農村のエスノグラフィのひとつとしてナッブートが登場している。ここでのナッブートは、娯楽ないし競技として登場しているのではない。Blackman は、当時ナッブートが喧嘩等、個々人の問題解決の手段として、また村同士の抗争解決の武器手段として用いられていた事を報告している。武器としてナッブートが利用された場合、当事者のどちらかが大きな怪我を負う場合もあったという（Blackman 1927:129-134)。彼女は特に村同士の抗争におけるナッブートの使用を言及し、日常は決して戦闘的でないエジプトの農民たちのときに見せる獰猛な振る舞いにも注目している。彼らは、基本的に自らの住む村を世界の中心として捉え、そこへの訪問者を手

厚く、友好的に迎える。しかしながら、彼らの世界に危害を加える可能性が訪問者に見られ、もしくは問題ありとみなされる場合には、暴力による問題解決が発生するという。平素は市が立ち、日住生活に不可欠な物資を供給し、また情報交換のターミナルとして有効に活用される村の広場は、時に村と村の武力による問題解決の場（戦場）としても利用されていたとの事である（Blackman 1927:129)。その際には、鉄製の銛や斧などが用いられたが、それら武器の中で最もも多く利用されていたものとして、Blackman はナッブート *nabbut* をあげている。彼女はこの *nabbut* を評してとても頑丈な棒であると述べ、これらの武器による農民たちの血なまぐさい激しい戦いをたびたび目撃した旨を記述している。

彼女は聖者の生誕祭においても敵対する村同士のナッブートによる戦いを目にしており、それを紹介している。この場合打ち込みを伴うナッブートが行われていたようにも捉えられ、現在の聖者生誕祭でのナッブートの歴史的な流れやルールの変遷などを考察する場合に非常に興味深い事例といえるであろう。また彼女は古代文化との比較研究の立場から、彼らの行う暴力による問題解決の方法は、エジプト固有のものでないと位置づけ、アラブ人のエジプト統治以後に流入した文化と考えている。

このような武器を用いた戦闘において死傷者がでた場合、その遺族は殺された家族に使用されたのと同じ武器で、またできれば同じ場所において、殺人者に復讐を試みるのが通例であった。Blackman はある男が復讐によって絞殺される様や、復讐のためナッブートによってひどく打ちつけられた人間の例を紹介している。彼女はこの慣習がそう長く続かないであろうとの予測を提示しながらも、当時すでに確立されていた法や警察があったにもかかわらず、この伝統的な農民たちの持つ自治的解決方法は、取り締まる事が困難であった事も同時に述べている（Blackman 1927:129-134)。

20 世紀後半のナッブートの事例としては、赤堀雅幸が『民族遊戯大事典』の中において伝統的スポーツ・演舞としてナッブートを紹介している。彼によれば、ナッブートとは杖を指し、家畜を追う道具や、自衛のための道具としてさまざま用途に用いられるという。それらの用途のひとつとして競技や演舞がある。男たちは農作業の合間や祝祭時に競技を行う。この競技には特段の流派や試合の形式はない。競技を行なう男たちの周りを丁度垣根を造るように多くの

男たちが取り囲んで行われる。合図で互いに打ち合い、一方がナッブートを落としたり、地面に倒れたりしたところで勝負ありとされる。競技は真剣な勝負から、模擬戦闘のような遊戯、さらには剣舞にいたるまで、じつに多様であるともいう（赤堀 1998: 565）。赤堀の記述は特にナッブートの研究を試みたものではなく、伝統的スポーツのひとつとしてナッブートを紹介する事を目的としたものであったために、特に踏み込んだ考察はされておらず、現状の概要紹介にとどまっている。

このように、ナッブートに関する先行研究を考察した場合、古代社会における類似の競技研究のための補足的な役割としての研究や、あるいは民族誌の中の一部分として扱うといった内容にとどまり、ナッブートに焦点を当てた研究は皆無に等しく、それだけに、本稿および筆者が今後引き受けるべき役割には大なるものがあると思われる。

第１章

調査地の社会と聖者信仰

1.1 調査地の概要・調査対象

1.1.1 エジプト・アラブ共和国

エジプト・アラブ共和国は、北アフリカの東側に位置し、首都はカイロ（Cairo）である。国土は西側にリビア、南にスーダン、北東にイスラエル、北には地中海、東は紅海に囲まれており、面積が100万1,500㎢である。国土の一部のシナイ半島はアジア大陸に属しており、アフリカ大陸とアジア大陸、また地中海と紅海を結ぶ地理的に非常に重要な場所に位置している。国土は南北に流れるナイル川の河谷によって二分された形で形成される。ナイルの河口域にあたるデルタ地帯の緑地帯以外の大部分は砂漠地帯である（図003）。ナイルはアフリカ内陸部の肥沃な土をエジプトにもたらし、農耕を生業の中心に据えるエジプトを常に支えてきた。エジプトは古来農業の盛んな国であるが、昨今は石油の輸出、観光客からの収入、スエズ運河の航行料などが国の主な収入となっている。

エジプトは大統領制をひく共和制の国家である。地方行政単位は県であり、その数は26を数える。行政府の長である県知事は、中央政府から派遣される官選知事であり、内務省の管轄下におかれ中央集権体制をとっている。また、近代的な司法制度が導入されたのは実質的なイギリス支配[8)]以降、つまり1883年以降になる。行政区分は極端な偏りを呈しており、ナイル川流域やナイル下流にあたる下エジプト地方は非常に細分化されているにもかかわらず、国土の南側に位置する上エジプト地方は非常に大まかにしか分けられていない。国の総人口は約7050万である（山口2006:342）[9)]。

エジプ国民はイスラーム教徒とキリスト教徒からなるアラブ系のエジプト人が主であり、その他にベドウィン（アラブ遊牧民）やベルベル人、ヌビア人、トルコ人、ギリシア人などで構成される。言語はアラビア語が公用語である。英語や、フランス語、ヌビア語も使用されている。宗教は約92%がアラビア語を話すスンナ派のムスリムであり、続いてキリスト教のコプト教の信徒が多い[10)]。また言語的な少数集団としては、ヌビア語を話すヌビア人達が南部の都市アスワンを中心に生活している。エジプトには民族的・宗教的に寛容の伝統があり、これらの異宗教・異文化間でも比較的良好な関係を保っている。人口の18%が農業に従事し、約57%の人々が、観光業などサービス業について観光立国エジプトを支えている。また農業ではナイルの緑地帯を利用した農業が盛んであり、伝統的な農

法による農業従事者も非常に多く見られる。その多くが小作農であり、平均 2.1 ヘクタールの土地を所有している。生産物としては綿、小麦、サトウキビ、とうもろこしなどが中心である（図 003）。

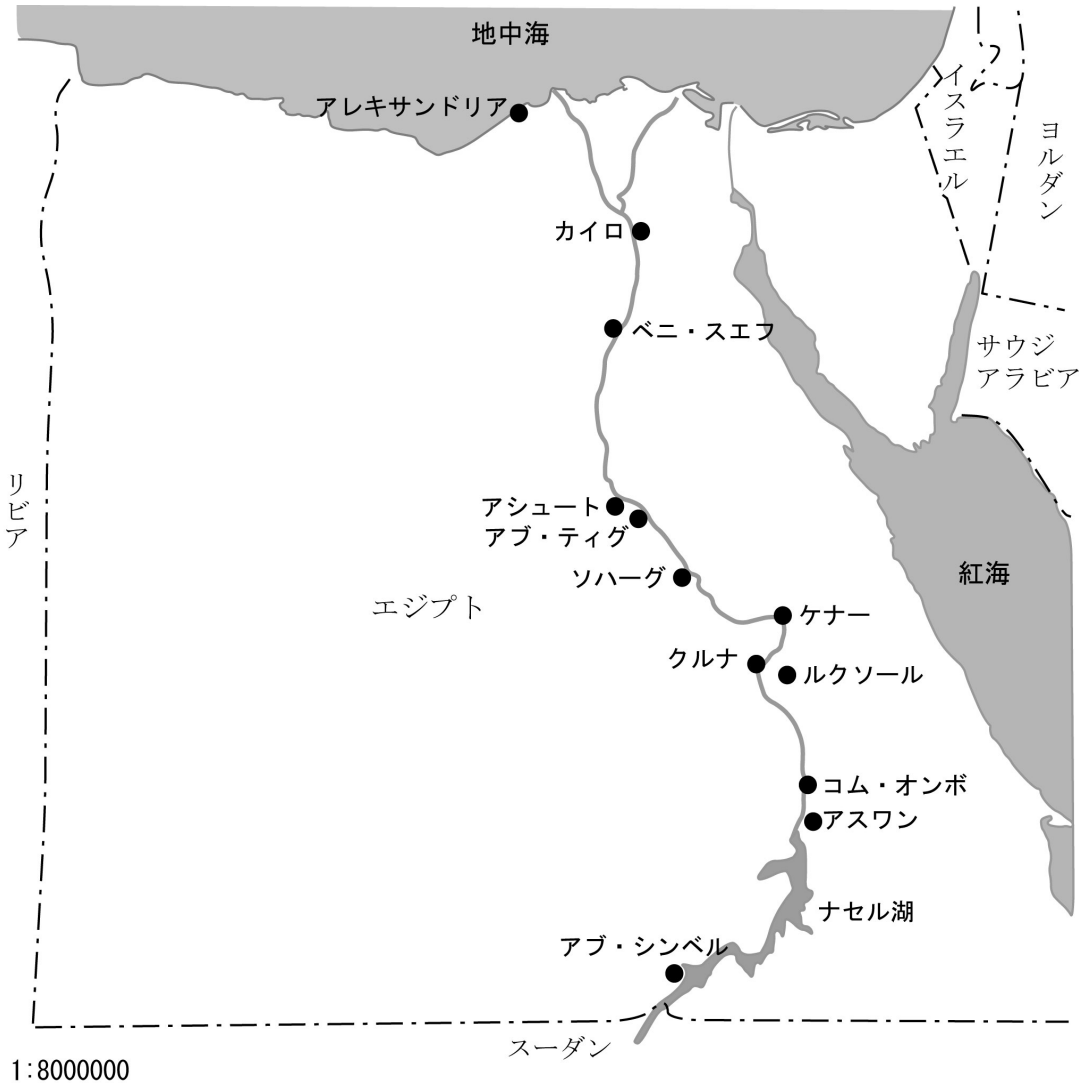
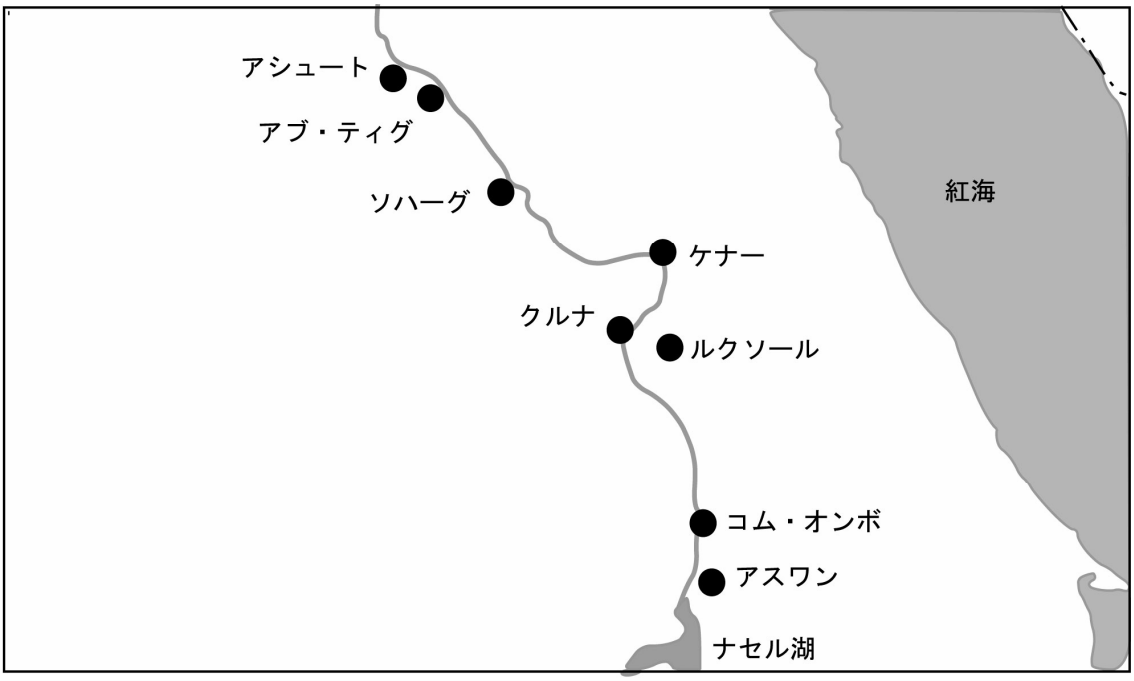


図 003 エジプト全図

1.1.2 上エジプト地方　－地域社会とそのアイデンティティー

上エジプト地方とは、カイロの南側からアスワンまでの地域を指す。エジプトには古代エジプトの時代からナイル川を基準に行政区域を上下で二つに分ける概念が存在し、現代に至るまでその考え方は残存し、カイロより北のデルタ地方を下エジプト地方、カイロ[11]よりも南を上エジプト地方と呼ぶ。上エジプトに住む人々はサイー

ディー（*Sa ‘idi*）と呼ばれ、独特の上エジプト方言を話す事で知られる。また、特に上エジプト地方も二つのエリアに分かれ、南側を *Sa`id al-juwwai*`Deep Sa`id”と、北側を *Sa`id al-barrani*`Near Sa`id”と呼称する（図 004）。前者は、ソハーグから、ケナー、そしてアスワンまでの地域を指し、後者はカイロから中部エジプトまでを指す（Hopkins 2003: 9-12）。



1:5000000

図 004 上エジプト地方

上エジプト地方の生活圏は、概してナイル川を中心とした 20ｋｍ程の緑地帯から形成される土地に集約される。下エジプト地方では季節により降雨が見られるが、この地域において年間降水量はほとんどなく、日常生活に必要な水はナイル川から調達されている。まさに上エジプトはナイルの賜物といえる。

基本的にエジプトの農民は自らの生活する土地に密着した生涯を送る場合が多く、その中でも上エジプト人は特に自分の生まれ育った土地に密着する人々と言われている（店田 1999:190-191）。
また元来エジプトの農民は「伝統的」な存在として語られる事が多く、都市での生活者に比べて、農業のスタイルのみならず、生活様式や、社会組織、価値観などを墨守する傾向が挙げられている（大塚 2002b:169-184, Ayrout 1963：1-6）。

自らの生まれ育った土地で生活を送る性質を持つ一方で、特に上エジプトの農民は、上エジプト地域の知人等を頻繁に訪問するなど、非常に活動的な側面をも持ち合わせる人々としても知られている。元来このような活動的な傾向を持つ彼らに、19 世紀の末にイギリスの影響によって発達した鉄道網は、農村部からのカイロやアレキサンドリアなどの主要大都市への短時間の長距離移動を容易にし、彼らの活動的な側面をさらに刺激したと考えられる。また 20 世紀の後半に入るとサウジアラビアや、クウェートといったアラブ諸国に外貨獲得のための出稼ぎに行く人々がいた事を付け加えておく（Hopkins 2004: 2-6）。このように頻繁な地域内移動や出稼ぎによる移動はしばしば確認できたとしても、基本的には同地域の人々は、生まれ育った地域に密着しその生涯を送ると考えて良い。

生まれ育った土地に定着的な傾向を持つ上エジプトの人々であるが、本研究の調査地クルナ村の場合、その定着性を促進するもうひとつの要素がある。それはこの村が古代都市の中に位置し、彼らの生活空間が、観光地である点に関係する。彼らの生活空間には古代からの遺跡が点在し、それらは観光の目玉として観光客を大いにひきつけ、地域経済を潤しているのである。したがってクルナ村では農業を中心とする伝統的な生業をその生活の中心に据えながらも、観光業を副業とするケースが多く見られ、出稼ぎなどに出かけずとも現金収入を手に入れる事が可能であり、生まれ育った土地を離れなくとも済むのである。インフォーマントの語りでも「クルナ村の人々は、以前は出稼ぎに行く人間もいたが、現在ではあまり行かなくなった。観光客が多く、たくさんの仕事があるからここに皆残っているんだ。アラバスターやその他の彫刻、おみやげ物を作製し、それをここで売って生活する。また、それらをハルガダ、カイロ、アレキサンドリアなどの都市に売りに行く事もあるがすぐにまたこの村に帰ってくる。」と、現在は観光業の発展に伴って出稼ぎに出る必要性がない事を語っている。また、この村は観光資源でもある考古学の遺跡に恵まれており、学術発掘調査が盛んに行われており、外国の調査隊がほぼ年間を通して村のいずれかで発掘調査を行っている。これらの発掘調査では、この村の人々が貴重な労働力として期待され活躍し、彼らの収入源にもなっているのである。

上エジプトの人口はエジプトの総人口の約 3 分の 1、約 2000 万である。経済的に見ると下エジプトと比較して上エジプト地方の方が

厳しい状態にあり、二倍ほどの収入の格差が認められる。この様な経済的な困窮は、一般的に彼らに出稼ぎという選択肢を作らせる要因かもしれない。15 歳以上の就学率を見ると、上エジプト地方の 23.9%に比べて下エジプト地方は 28%と高く、その影響であろうか読み書き能力も上エジプト地方は 56.4%とエジプト全体の 65.6%を大きく下回る結果となっている[12)]。また男性は女性よりも読み書き能力が高く、女性でも都市部の女性の 78.5%という比率に対し 20.3%となっている（Hopkins 2004: 2-6）。上エジプト地方は下エジプト地方に比べ開発が遅れており、そのおかげで昔ながらの村落共同体が多く点在する形で残り、各地域が形成されている。エジプトにおいてはカイロを中心とした下エジプトが、政治、経済、医療、教育等すべてにおいての中心として存在しており、上エジプト地方はいわばそれに従属する地域といえる。上エジプトだけを見る場合、アシュートが政治等の中枢として機能しており、いわゆる一つの地域の核となっている。

上エジプトの人々の地域的な特徴を挙げる場合、地縁的・血縁的な集団意識が強い事が挙げられる。そのおかげで地域に対する意識、愛着心は非常に強固なものがある。その意識は、自らの住む都市、村だけではなく、上エジプト全体に対しても存在し、上エジプト人としての意識も強いように思われる。地域へのアイデンティティが強い事は、肯定的な要素であるのと同時に、否定的な要素としても存在する。その顕著な例として伝統的な集団的抗争が挙げられる（Blackman 1927:129, Hopkins 2003: 11-13）。この種の抗争は徐々に少なくなってきたとも言われるが、近年までは同地域で頻繁に見られたものである。これは政治的・経済的な問題によって引き起こされる場合が多い。彼らはアーイラと呼ばれる親族の繋がりを重視し、一族の名誉が損なわれた時や、喧嘩等の闘争が発生した場合はこの繋がりが一層強化されるのである（大塚 2002b: 169-180）。自らの属するアーイラの成員が傷つけられた場合は、個人の問題ではなく、アーイラ間の問題として捉えられ、地縁的・血縁的集団同士の対立、抗争が頻発していたのである。

地縁的・血縁的な関係性の深さを考える場合それは婚姻にも強くみられる。上エジプト地方では父系の出自集団の地縁的・血縁的な結合が広く一般的に見られる。そのため婚姻の相手探しは、上エジプトの、しかも血縁者の中から決められる場合が一般的であり、他

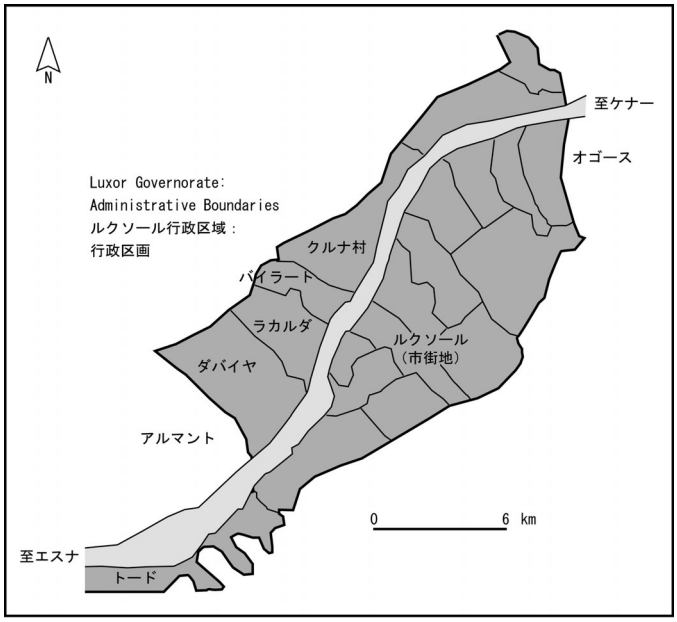
の地域から結婚相手を探す事は稀である。その結果として、濃い血縁関係が、限定された形で再生産されこの地域に拡がって行くのである（Hopkins 2004: 5)。また女性に関して付言するならば、上エジプトの場合、結婚後の女性はイスラームの教えに対して厳格な立場から、公の場所（農場、金曜の礼拝、葬式など）をはじめ、さまざまな場所に姿を見せない傾向が強い。ちなみに上エジプトにおいての女性の平均結婚年齢は 22.5 歳であり、下エジプトなどの都市部に比べると非常に若年と言える。就学率を見た場合、女性は男性に比べて低く、また女性の就職率も 11.8%に留まっている（Hopkins 2004：7)。これは、女性は家の中にいるものであり、家の中での役割に寄せられる社会的な傾向が反映されたものとも言える。

下エジプト地方に住む人々と、上エジプト地方の人々は各々をよく比較の対象として取り上げる。その中では、しばしば上エジプト人は、「時代遅れ、頑固もの」などと評される。

本研究はこうした上エジプト地方のナイル川西岸に位置するL市クルナ村にて行なわれた。

調査地のクルナ村はL市の中に属する位置づけである。L市は東岸、西岸に点在する村を包含する形で形成されている[13)]。調査地であるクルナ村の 2006 年の人口は男性 1 万 2552、女性 1 万 1823、合計 2 万 4375 である。クルナ村内部は 25 の地区に分かれている。村内には小学校、中学校、高校、高等職業専門校、警察署、消防・救急の本部、大・小の病院などが点在する[14)]。村では古来より農業が生業の中心を占めている。生産物としてはサトウキビ、小麦、とうもろこしなどがその中心である。サトウキビは収穫後、近隣のアルマントや、ケナーなどの製糖工場に列車や大型トラックにて輸送される。小麦、とうもろこしの多くは、当地および近郊にて消費されるとの事である。L市の市域はちょうどナイル川を挟んで展開されている事は先述したが、ナイル川の東岸にあたる場所がL市の中心部となり、行政・商業等の中心となる。生活物資なども東岸の方が豊富で充実しているため、日用品の範疇を越えるものや、特別な購入品がある場合、西岸の人々は東岸へ買出しに出かける。

図 005 クルナ村風景



注：ルクソール行政区域には，トードの南に2つの村が存在するがこの地図には含まれていない．
出典：*Observatoire Urbain du Caire Contemporain*, 2003

図 006 L 市市域および周辺概念図

1.1.3 観光空間としての調査地

東岸に位置する L 市の中心部もそうだが、西岸のクルナ村は古代都市が位置した場所であり、現在も数多くの遺跡が点在している。それらはユネスコの指定する世界遺産にも登録され、世界的に有名な観光地となっている（図 006）。それにより観光業やそれに付随する副次的な産業が地域の大きな財源になっているのである。

多くの観光客を受け入れるこの村であるが、観光客のほとんどは

東岸に宿泊する。ヨーロッパ資本の高級ホテルは交通の便良い東岸に集中して立ち並び、欧米からの観光客は基本的に東岸に宿泊する。東岸にはL駅付近を中心とする昔ながらの市街地があるが、たとえばその中の市場（スーク）は、2006年に昔ながらの佇まいから大改築がなされ、外国人観光客が買い物をしやすいように、アーケード型の近代的なスタイルに変貌した（図 007）。

図 007 市場風景

市場だけでなく、東岸の中心地域全体をモダンな町並みにしようと試みる動きが活発で、2006年夏からは町全体の大工事が展開されており、東岸に残っていた 19, 20 世紀の庶民の生活空間としてのイスラーム家屋は次々にその姿を消している。また、2000年頃には東岸を代表する古代遺跡の真横にファーストフード店が出店し、観光客には好評な反面、景観を損ねるとの意見も噴出し、観光客招致と伝統的町並み保護の両立の難しさが露呈した形になっている（図 008）。

図 008 ファーストフード店

東岸がホテルなどの収入の恩恵に預かり、また観光客の居住空間としての役割を期待されるがゆえに、町並みや人々が欧米化されていくのに対して、西岸地域は伝統的な生活スタイルを踏襲しながら観光業に携わっている。そこでは同様に観光業を生業としているが、求められる役割の違いによって、その生活スタイルにも相違がみられると考えられる。

先述したように観光客は、東岸のホテルに宿泊し、短期間ではあるがその生活の基盤を形成する。したがって東岸の地域には、住みやすい生活空間を欧米人は求めていく事になろう。そこでは当然日頃生活を送る欧米の生活圏文化が求められ、それが達成されるために、東岸の地域は観光客の必要性に応じて欧米化を遂げていく必要があるのである。それによって初めて人々は、リラックスした時間を送る事ができるのである。その一方、西岸地域には、もうひとつの役割が求められる。観光客たちはエジプトという国を訪れるに際して、古代世界への憧れと小さな秘境への冒険とを求めて来る。平素、特にエジプトの研究などを行っていない彼らは、テレビや雑誌などで紹介される不思議な古代世界が広がる未知の国を求めて、1週間足らずの大冒険にやってくるのである。したがって多くの古代遺跡が点在する西岸地域は、彼らにとってはあくまで古代世界に直結する伝統的なエリアでなければならない。17～20 世紀初頭には多

くの冒険家が訪れ、未知の魅惑の国として紹介され、20世紀の初頭にハワード・カーターによって世紀の大発見が行われたその空気が味わえる場所でなくてはならないのである。極言するならば、観光客にとって点在する遺跡群を含むクルナ村は一大テーマパークなのかも知れない。

観光客の大半は東岸のホテルから西岸の遺跡まで大型バスによる移動を行い、いわゆる「ドア to ドア」で観光を行なっている。したがって西岸地域には多くの観光客が訪れるが、その場所は非常に限定されており、遺跡や旅行社が契約したみやげ物店等だけなのである。つまり、西岸において観光客が立ち入る場所は局所的であり、ここは伝統的な歴史的な雰囲気を味わえる場所でなくてはならないのである。しかも観光客の訪れる時間が終わってしまう夕刻以降は地元の人間のみの世界に帰し、それもまた西岸地域が伝統的な佇まいを残す理由となろう。

クルナ村からは、東岸のホテルやみやげ物店などで観光業による現金収入を得るため多くの人間が、毎日渡しフェリーにて通勤している。早朝に東岸に渡り午前中は東岸で仕事を行い、午後は西岸に戻り、実家で農業、または商いを行うという人間も少なくない。たとえばインフォーマントのＮ氏は、勤続 10 年以上の高校の教員であるが、それだけでは家族 7 人の生活を支えるのは厳しく副業を持つ。彼は古代遺物のレプリカの彫刻品を村の友人から購入し、カイロのみやげ物店に転売して収入を得ている。また小学校でコンピュータを教えている教員のＳ氏は、自宅でインターネットサービス店を開業。またその合間にみやげ物の石製品を製作し、村のみやげ物店で販売し生計を立てている。彼らのように公務員であってもその収入のみでなく、観光業から得られる収入で生計を立てている場合が非常に多いのである（図 009-010）。

図 009 みやげ物作製風景 1

図 010 みやげ物作製風景 2

上エジプトの他の地域同様に、この地域もナイルには橋が架かっていなかったため、渡し船としてのフェリーによる往来が伝統的に行なわれている。それらは、橋による物資や情報流通を考えた場合、非常に限られたものといわざるを得ない（図 011）。しかしながら、近年は町の南 10km のところに東岸と西岸を結ぶ橋が完成し、状況は徐々に変化を見せている。架橋により、大型バスで観光客を一括で東岸、西岸へ移動させる観光が可能になったのである。それに伴い、それまで比較的不便であった東岸の南側（橋より）地域にホテル建設が進み、またディスコやナイトクラブが次々に出店し、東岸では町が橋に向かって南側へ膨張し始め、市街地の中心的な存在になりつつあるのである。さらに、架橋はそれまでは運搬不可能であ

った大型の、そして大量の物資の運搬を可能とし、少しずつではあるが、東岸と西岸の物質文化の均質が進行してきているのも事実であろう。

図 011 渡しフェリー風景

1.2 ルクソール西岸における聖者信仰

1.2.1 聖者

イスラームにおいては、理想的な人格を具現し人々に恩恵を与える事が可能な人物が存在し、研究者はこの特別な能力を有する人物を「聖者」と呼称する[15]。イスラームの聖者はモロッコやエジプトというアラブ地域、イラン、トルコ、中央アジア、中国、アフリカなど世界中にその存在を確認できる（私市 1996:13-26）。聖者という呼称の適応に関しては研究者の中で議論がある。しかし本論においては現段階で研究者の中で最も一般的に利用されるこの語を用いる事とする[16]。さまざまな議論の中にあり、曖昧な存在であるが、イスラームの聖者を定義するならば、赤堀が述べるように、「日常と非日常領域の境界域に立つ両義的存在の一種」と理解されるのが適切であると考える（赤堀 1996:118）。聖者は、歴史的にみても常人には制御しづらい、異類（動物等）世界と交流する特殊な能力を兼ね備えており、聖者は長い歴史の中で醸成されてきた存在といえるであろう（大稔 1993:32-33）。聖者は神に愛されている証拠として

祝福、つまり *baraka*(バラカ)[17]を与えられ、その結果として、空中浮遊、未来予知、読心術、瞬間移動、治病、子授けなどの常人には不可能な超自然的能力、すなわち奇蹟 *karamat*（カラーマ）を起こす能力を獲得し、それを通して彼を慕う民衆をさまざまな形で救済してくれると信じられている（西尾 2006:146-151）。聖者はその聖者信仰の実践される場所の出身の事もあれば、他の地からの来訪者の場合もある。一般的に自文化に属さないいわゆる“外”の存在には、不安定や混沌などの否定的な概念が当てはめられる場合も多い（山口 1988:243-246）。しかしその一方で、自文化の枠組みの中では想定できないような大きな力を有し、もしくは大きな権威の代行者として理解され、逆に自分たちに大きな利益を生み出す存在として捉えられる場合も多くある。他の地からの来訪者、つまり「異人」としての聖者はまさに後者に当てはまる。

現世利益（事業、学業、病気治療、子授け）などを求めて、民衆は聖者を訪ね、また聖者は死後も祝福を授ける力を持っていると考えられるため、民衆は聖者の死後はその廟を参詣し、各々の願いを祈願するのである。聖者への、またその廟への参詣は平素でも行われるが、生誕祭の時にピークに達する。人々の聖者への思いや行動は研究者の間で「信仰」、もしくは「崇敬」などという形で言い表されるが、本論文においては、「信仰」という呼称を使用する。聖者信仰は 12 世紀頃から起こり、その後民衆レベルに徐々に浸透していったと考えられている（西尾 2001: 513）。

ところで、イスラームの教えでは、当然の事ながら本来神以外のあらゆるものは崇拝の対象として認められていない。しかし聖者の存在はその教義から逸脱するものではなく、公に認められるものである。ところが、一部厳格主義的なウラマー[18]などイスラーム知識人の中には聖者信仰を非イスラーム的な添加物 *bid'a*（ビドア）[19]としてとらえる人々もあり、現在に至るまで聖者の存在については、宗教上常に重要かつ微妙な問題として、そのあり方を巡る論争は絶えない事も事実である（古林 1986:88-96）。聖者信仰の実践の場として最も重要なのが、聖者生誕祭といえよう。聖者生誕祭は、詳しくは後述するが、宗教的要素だけでなく、世俗的な要素も祭りの多くの部分を占めている。廟や、周辺の華美な装飾、また出店などを中心とする世俗的要素が祭の構成要素として存在する事は、純粋なイスラームの見地からは問題視されても無理はなく、聖者生誕祭の

あり方だけに留まらず、聖者信仰自体への疑問につながっているのである。

ここでイスラームにおける聖者をもう少し具体的に説明しておきたい。イスラームの聖者はアラビア語でワリー（*wali*：クルアーンの邦訳では「友」や「伴侶」と訳される）と呼ばれる存在である。イスラームの聖者は神に愛されている証拠として、神から祝福の力を与えられ、その結果、物質変質、物質創出、雨乞い、空中浮遊、水上歩行、未来予知、透視、読心術、瞬間移動、壁・戸開け、難病治病、子授け、自分や他人の姿を異類（動物）にかえる事などをなし得る常人には不可能な超自然的能力、すなわち奇蹟を起こす能力を獲得し、それを通して彼を慕う民衆をさまざまな形で救済してくれると信じられている（大塚 1992:92-108）[20]。つまり、敬虔なるがゆえに、神に特別な恩寵を授けられ、それによってさまざまな奇蹟を行使することができる人間を、イスラームでは聖者というのである。大稔は歴史研究の立場から聖者のあり方についてアプローチしているが、12-15 世紀ごろには、すでに聖者を聖者たらしめる根拠として、聖者の起こす奇蹟および彼らの美徳・美質が挙げられている事を指摘している（大稔 1993:32-34）。

では、聖者信仰の始まりは、どのようなものであろうか。イスラームの聖者の根源は 8 世紀にイラクで始まったスーフィズム[21]といわれる。イスラーム的信仰を求めて禁欲修行を積み、神との合一を果たす神秘体験を目指す人々*sufi*（スーフィー）は本来一部の宗教エリートであったが、それがやがて世俗化・民衆化を経て、偉大なスーフィーとなり、彼らがイスラーム以前の習俗や土着信仰と混じり合いながら、聖者になったといわれる[22]。

聖者に関する観念の背景にはスーフィズムの民衆化とともに、教団機構 *tariqa*（タリーカ）[23]が発達し、読み書き能力を持たない民衆にイスラームの教えが広まった事も大きな要因として挙げられる。民衆に口頭伝承によって広まった聖者の存在は、新たな民間信仰としての聖者信仰を担っていったのである（佐藤 1986: 205）。

先述したように、聖者は日常と非日常の境界に立ち、両者を媒介する存在である（赤堀 2005: 240-244）。彼らは、非日常の力を日常に導入する事ができる可視化された存在といえる。そして聖者の超自然的な力は死後も維持・継続されると考えられるが故に、その廟への参詣が行なわれると一般的語られるが、しかしそのプロセスに

はむしろ逆の場合も見られるかもしれない。なぜならば、聖者は生前よりも、死後にその存在が大きくクローズアップされる場合が多いと思われるからである。聖者は、死後にいわゆる“神格化”がなされ、当該地域の人々のナラティブの中で、ゴッフマンの言うところの劇的具象化、理想化、神秘化の対象となっていく（ゴッフマン 1974:19-84）。特にこれらの中では「神秘化」がなされると思われる。ゴッフマンが指摘するように、知覚を接触と交わりの一形式とみなすならば、知覚への統制は、接触を統制する事を意味する。接触に制約、すなわち彼が言うところの「社会的距離」が課せられる場合、オーディエンスには畏怖の感覚が醸成される場合がある。そしてそのような中でオーディエンスはパフォーマーに対する神秘性を感じるようになっていくのである。社会的距離の発生はオーディエンス自身のパフォーマーへの敬意や、パフォーマーの持つ聖なる無謬性（sacred integrity）への畏怖などを育み、その意味でパフォーマーの行為に対してオーディエンスは協力的な態度を示すと考えられる（ゴッフマン 1974:77-81, 瀬戸 2000b: 2000 29-53）。本論文でその研究対象となる聖者のＡ氏の場合はどうであろう。Ａ氏は当該地域の人々にとって「聖者」という存在であり、聖者は絶対的な存在の神より力を与えられた特別な存在である。彼が行う行為は、前提として人々の中で全て特別なものとなっており、また特別なものとして常に期待されるものである。また、Ａ氏の場合、彼がすでに亡くなった人物であり、彼のパフォーマンスは人々が直接接触のできないパフォーマンスである事に注目したい。それと同時に、Ａ氏の奇蹟譚のオーディエンスであり、その語り中心人物が、また当該地域における聖者である事も注目に値するであろう。

Ａ氏の行動は彼が聖者であるという前提においてすでに無謬性を兼ね備えており、神秘性の文脈の中で人々の期待を受けている。詳しくは後述するが、Ａ氏に纏わる多くの奇蹟が人々に語り継がれている。それらの全てが事実であったか否かは、過去の出来事である以上、今から検証する事は不可能である。しかしながら、そのような実証性とは関係なく、当該地域の人々の“真実”として、Ａ氏はさまざまな奇蹟をおこし、またおこし得る存在なのである。その場合、先述したが彼の奇蹟を多く目撃し、それらを語った人物が聖者であった事は非常に重要なポイントとなろう。なぜならこの場合、聖者であるＡ氏の持つ無謬性のみならず、それを語る人物も無謬性

を兼ね備える聖者であるが故に、A氏に対する言説は二重の無謬性が付加されている事になるからである。

したがって、二重の無謬性を持つ彼に対する言説は当該社会のムスリムにとって、これ以上ない絶対的な事実であり、それは真実以外のなにものでもないといえるであろう。そしてそれは語り継がれる中で、ゴッフマンの言うところの劇的具象化や、理想化などが繰り返し行われる事は容易に理解でき、ますます無謬性を帯びていくのである。

しかしながら、A氏とともに生きた人々（A氏は 1979 年に他界している）は彼の行動を自らの目で見ていた。そこにはゴッフマンのいう接触の制限は存在し、A氏は聖者としての無謬性の中に存在していた事に間違いはないだろうが、個々人として自らの経験した事を自分の考えに沿って語る事は当然できたであろう。ところが、時間の経過は、全てを誰も直接知りえない過去の出来事にしていってしまう。当然の事ながらA氏とともに生きた人々以外は、二度とA氏の起こした奇蹟に対して直接的な接触の機会を持つ事はできず、奇蹟は語りの中だけのものとなっていく。しかしながら、時間の経過と反比例するように語りの中での聖者の聖性は強化されていき続けるのである。なぜならば、先ほど述べたように、接触の距離が存在すればするほど劇的な具象化や理想化などが起こりやすく、また聖者に対する無謬性がそれを促進していくのである。

聖者への語りが時間の経過とともに固定化され、尚且つ伝承・伝説などが加味され強化されて行くプロセスは、今松の指摘するところである（今松 1996:1-16）。

1.2.2 語り（ナラティブ）としての奇蹟

聖者としてのA氏にまつわる奇蹟譚が現在でも、クルナ村にて語り継がれている。以下にその奇蹟譚をいくつか紹介する。

1.2.2.1 空中浮遊

彼の起こした奇蹟の有名なものに空中浮遊があげられる。

「ある日の晩、ナイル川の東岸で祭があり、西岸からも人々が挙って出かける事になった。当時も現在と同様に渡し舟を利用しナイル川を渡っていたのだが、その日の舟は小さくあいにく混み合っていた。またその日のA氏の着衣は少し汚れていたため、彼は自ら舟に乗ることを拒否し、やおら所持していた布（ちょうど座れるくらいの大きさ）を拡げ、その上に腰かけ、ちょうど魔法のじゅうたん

で空を飛ぶように布ごと浮かび上がり、川を渡った。」
との事である。

また、同じ話であるが、少々伝わり方が異なる事例もある。
「ある日、A 氏の親友の H 氏は東岸で行なわれる聖者生誕祭に出かける時に A 氏は西岸に残るように話した。A 氏も祭に行きたかったが西岸に残る事を承諾した。H 氏達は小舟を仕立てた。小舟は非常に小さく 4 人ほど乗るといっぱいになってしまう大きさのものだった。彼らが小舟でナイル川を渡り、東岸に到着すると、すっと下船に手を貸そうとする人物がいた。なんと A 氏であった。「どうやってきたのか？」H 氏はあわてて聞いた。なぜならば、自分が乗ってきた以外に舟はなく、彼らよりも早く東岸に渡る手段など存在しなかったからである。A 氏は言った。「小さな布を用意し、それに乗って飛んできました。」と。」

1.2.2.2 瞬間移動

クルナ村から、近隣の B 村にシェイク・タイーブ達と出かける事になったが、車の大きさ対して人数が多く、A 氏のみが歩いて現地に向かう事になった。B 村までは車で一時間程の行程であったが、現地に車が到着すると、A 氏は目的地に一番早く辿り着いていた。そこに至るには車以外の移動手段もなく、B 村までは一本道であり、他の車で追い越していった形跡もなく、彼の奇蹟による瞬間移動と言われている。

1.2.2.3 壁・戸開け

ある日 A 氏は無実の罪で拘置所に入れられた。牢は施錠され、獄中にあるはずの A 氏であったが、次の瞬間には、街中におり、素知らぬ顔で道を歩いていたといわれる。

1.2.2.4 動物変身

A 氏の死に際して行われた葬儀の際、彼の死に対して民衆はあまりに大きな人間的な損失と悲しみを抑えきれず、悲嘆にくれていた。イスラームにおいては、死とはそもそも神が定めたものであり、悲しむ事は、イスラームの教えに抵触するとさえ考えられる。

そのような中、一匹の蛇が現れ、皆の目の前で火を噴いた。そのとたんに、悲しみは皆の心から消え去り、その場にいる人々は楽しい雰囲気に包まれたとの事である。その後蛇はすぐにその場からいなくなった。そこに居合わせた人間達は、この蛇は A 氏が遣わしたもの、もしくは A 氏の仮の姿だと信じ、A 氏が人々の心から「悲し

み」を消し去ったと語り継いでいる。

こちらの話にも別の伝わり方のものがあり、その場合一匹の大きな蛇が埋葬地に到着すると彼を納めたお棺の中から現れた。その蛇を見たそのとたんに、皆の心から悲しみは消え去り、人々は楽しい雰囲気に包まれたとの事である。その後蛇はすぐにまたお棺の中に戻っていったとの事である。

1.2.2.5 語り（ナラティブ）による過去の再構成

－アイデンティティ構築と演劇性の生成－

このように、空中浮遊・瞬間移動・動物への変身といった聖者伝に多く見出される奇蹟譚が、地域の住民の語り（ナラティブ）として語り継がれていることは注目に値する。一般に聖者の奇蹟譚はすでに歴史上の、もしくは伝説上の人物として、ある意味物語の主人公的な役割を果たす聖者たちを取り巻くひとつの要素と考えられる。

ここで注目したいのは、A 氏が亡くなったのは 1979 年 3 月であり、彼を知るものがまだ多く当該地域に生活している点である。つまり彼の起こした奇蹟に関しては、伝説ではなく、未だに目撃者が生存しているという点である。たとえば本研究のインフォーマントの一人の N 氏は 12 歳の時に、A 氏の空中浮遊を目撃したという。現在 36 歳の N 氏が 1979 年、つまり 27 年前に亡くなっている聖者の奇蹟を目撃したという事は、実際時間的には誤差があり、その点の信憑性は考慮せねばならない。しかし、ここで重要なのは、奇蹟の目撃という語り（ナラティブ）が生成されて、人々の間で共有されいわば事実となっていく過程が確認できる点である。

個人体験談（personal experience narrative）が単なる過去の体験の報告ではなく、「過去」の記憶や、語り手のアイデンティティの意味を可変的な「現在」において、絶えず「構築」し続ける場であるという視点は近年定着しつつあるが、この事例はまさにこれに当たるであろう。橋本が祝宴と観光の局面に見るホストとゲストの関係の中で述べているが、「語り」は単なる連続時間の秩序による時系列的記憶の再生ではなく、話者にとって過去の再構成の場となる。年代は正確に思い出されない場合もあり、また出来事（event）は前後する事すらよくある。つまり語られる「事実」とは、語る者の、その時点の価値観を反映するものであり、そこでの語りは、繰り返されるたびに再構築され、その様相は変化するのである（橋本 1999: 99-100）。

聖者への語りに照らし合わせて見る場合はどうだろうか。聖者への信仰が成立する過程においては、ゴッフマンの言うところのいわゆる理想化が積極的になされ、それによって聖者の卓越性や、超人的な側面が強調されひとつの「超人」として語られることになっている。超人的な存在となった聖者に関する語りは、常に卓越した存在として再生産がなされ、聖性が際限なく強化されていくのは先ほど述べたとおりである。聖性に包まれた人物の卓越性や超人的な側面が歴史上強化されていくプロセスは、古代社会の例でもすでに論証されている（瀬戸 2000b: 29-53）。実際にはＡ氏に纏わる奇蹟譚が客観的な事実として存在したのか否かを、証明する事は難しい事である。しかし、語りの中で、生成される聖者としてのＡ氏が行なった奇蹟は、先述したようにそれが事実か、否かと言う事は決して重要なことではなく、当該地域の人々の記憶に如何に留まり、また語り継がれているのかが重要という事になるのである。

1.3 聖者生誕祭（マウリド）

偉大なスーフィーに対する尊敬が、さまざまな民間信仰と重なり合って、聖者信仰へと変わっていったといわれる事は前述したが（佐藤 1986: 205）、その後、聖者への尊敬は彼らの廟へ、また聖者の遺物へ信仰、聖者の誕生祭の開催などで表現されるようになった。特に聖者の誕生日は聖者生誕祭と呼ばれるようになり盛大に祝われるようになった。本来、聖者生誕祭とは、ファーティマ朝[24]の後期にあたる12世紀頃から、ヒジュラ暦3月12日の預言者ムハンマドの誕生祭が行われ、これをさしていた[25]。しかし、その後15～16世紀頃になると、有名・無名の別なく、イスラームの聖者たちを記念する祭りが行われるようになり、エジプトにおいてはこれらを聖者生誕祭 *mawlid*（マウリド）と呼ぶようになった（大塚 2000: 146-147, 古林 1975:67-76）。有名で規模の大きなものから、無名で規模の小さなものまで、エジプト各地の都市や村の一角にある無数の廟で聖者生誕祭が行われている。上エジプトにおいても多くの聖者生誕祭が行われており、Ayrout は、一般的に聖者生誕祭が、年に一度の歓喜の時であり、村人は聖者の墓を修復し、ダンスに興じ、儀礼を行なう事を報告している（Ayrout 1963:94）。彼は事例の紹介としてアシュート近くの Abu Tig において行なわれる聖者生誕祭について、北から南から、近隣の村や町からバスや電車を利用して多くの人々が祭りに訪れ、数マイルに渡って群集が道をふさいでい

る様子を述べている（Ayrout 1963:104-106）。また、19世紀には聖者生誕祭が通過儀礼と結びつき、重要な社会的性格を帯びていた事も報告されている（古林 1977:15-36）

聖者生誕祭の期日の設定方法や祭りの規模、催し物、参加人数などは、各祭により相違が見られるが、聖者生誕祭に共有される構成要素としては一般的に次の(1)～(5)があげられ、ほとんどの聖者生誕祭で確認できるだろう。(1)祝われる聖者の廟に大勢の参詣者が訪れる。(2)廟の周辺に臨時の遊戯施設（ブランコ、射的、力比べ、賭け事など）が設けられる。(3)飲食物（お菓子、豆、ジュースなど）、玩具類など出店が軒を並べ、サーカスや見世物小屋などがたつ。(4)聖者と関係深いスーフィー教団による行列が町を練り歩き、神名を唱えるズィクル儀礼[26]が夜通し行われる。(5)専門のクルアーン誦みや宗教物語の語り手の公演が行われる。(1)の聖者廟への参詣が聖者生誕祭の中心と考えられるが、この参詣はズィヤーラと呼ばれる。本来ズィヤーラという言葉は「訪ねる事」を意味するが、聖者生誕祭におけるズィヤーラは死者（聖者）への挨拶、現世利益の祈願などを含む一連の行為の総体を指す語として用いられる（大稔 1993:8）。また現在(2)(3)のように一種の行楽的要素も含む聖者生誕祭であるが、すでに12世紀には砂糖菓子・飲食物を携えて、女性や子供も夜間に出かけ、語らう姿が見受けられており、参詣は当時からかなり自由な空間として機能していたと考えられる（大稔 1993:11）[27]。先述したように、ムスリムの、特に上エジプトの女性達は結婚後、公の場所に姿を見せない場合が多いが、聖者生誕祭は上エジプトの女性にとっても例外的な場であり、みな挙って参加するのである。

このように、一般に広く浸透し、多くの地域で大小さまざまな規模で営まれている聖者生誕祭であるが、一方では、前述したように初期イスラームの時代になかった非イスラーム的添加物と考えられ、祭に対する批判も存在するのである。イスラームの教義においては、尊敬に値する預言者ムハンマドでさえ、「崇拝」の対象にはならない。したがってイスラームの原則的考え方からすれば、聖者信仰への否定的な考えを持つ人間が存在していたとしてもそれは当然といえるかもしれない。しかしながら、聖者信仰、さらにはスーフィズムを逸脱と捉える事を逆に問題とする見方もある。したがって聖者に関する問題はイスラーム全般に通ずる積年の問題であり、非常に難解

なものといえるであろう。

ただ事実としていえるのは、批判的な捉え方が存在する事は事実としても、聖者信仰は聖者生誕祭などのように、エジプトの人々の生活の中に溶け込み、重要な存在として生き続けているのである。

1.3.1 A 廟の聖者および聖者生誕祭

この廟において信仰される聖者 A 氏は、クルナ村に生まれクルナ村で亡くなっている(図 012)。没年は 1979 年 3 月で、享年は 65 才ぐらいであったと考えられているがはっきりしていない。イスラームの聖者には良くある事であるが、彼は生まれつき特別な存在だったわけではない。生前の修行などの成果で特別な能力を手にし、いわゆる聖者として認められるようになるため、生年月日などがはっきりしない場合が多々見受けられるのである。

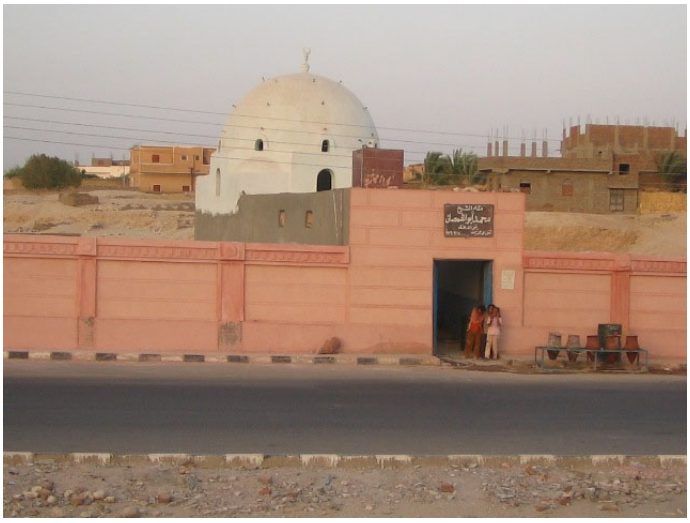


図 012 A 氏聖者廟

A 氏は生前生業として農業を営んでいた[28]。生前彼は誰からも愛され、揉め事などが起きた場合彼の仲裁があればどのような場合でも解決がなされたと言われているほど地域の人間から信望・信頼を得ていた。ゆえに彼への尊敬の念は死後も厚く、彼を直接知る世代、また知らない世代の人々も彼への尊敬の念を持ち、彼の廟へ参詣が絶えない。聖者としての重要な要素として「人間的な美質」が必要な事は大稔も述べている（大稔 1993:30-34)。A 氏は地域の人々からの信望・信頼等、人間としての美質を備えて、聖者としてのひとつの重要な要素を兼ね備えていた。またもうひとつ聖者になるための重要な要素に「奇蹟」を起こす能力が上げられるが、先述したように A 氏はまた奇蹟を起こす事が出来た。それにより、彼の死後も

彼の奇蹟を求めて多くの人々が彼の廟を参詣するのである。A 廟の聖者生誕祭は彼の死後すぐ行われるようになった。A 氏の聖者生誕祭は、彼の亡くなった日に行なわれているわけではなく、毎年断食月（ラマダーン）[29]の直前にあたるシャーバーン月の最終週に 3 日間行われ、24 日が最も重要な日であるライラ・カビーラ（大きな夜）に当てられている。本聖者生誕祭において祭りが三日間開催される事になった背景に関して、主催者は多くの人間がこの祭りに訪れ廟を参詣し、その折に A 氏の自宅を訪れる事を挙げ、たとえば一日ではとても来訪者を受け入れる事ができないことを挙げている。祭り開催の期日はヒジュラ暦によるため毎年変動する。ちなみに 2004 年の場合は太陽暦で言うところの 10 月 6 日～8 日の 3 日間に、2005 年は 9 月 27 日～29 日にそれぞれ行われ、また 2006 年は 9 月 15 日～17 日の間に開催された[30]。

本生誕祭の場合は聖者 A 氏が亡くなってまだ 27 年ほどしか経っていないため、そして A 氏がスーフィー教団に属した人間でなかった事から、彼の家族を中心とした親族が主催者となって生誕祭は執り行われている。祭は廟を中心として、廟に面した大きな広場をも含むエリアを利用して行なわれる。この広場に遊戯施設や出店が展開され、またその際にナッブートの競技等も行われるのである。

1.3.2 A 氏の聖者生誕祭の云われ

A 氏が亡くなったのは 1979 年 3 月 7 日である。彼の死後ひとつの事件が起こる。A 氏の親友である H 氏の夢の中に亡くなった A 氏が現れたといわれる。夢の中で A 氏は H 氏に自らのための廟の建設と聖者生誕祭の開催を望んだ。またその願いが達成されない場合は西岸を離れ、東岸に移動する旨を伝えたという。H 氏は、その夢の話を A 氏の長男である B 氏をはじめ A 氏の親族に伝えた。また一方でその夢の話を伝え聞いたこの村の人々は、A 氏の強い願いを受け入れる事を B 氏たち親族懇願した。村の人々の意向も手伝って、A 氏の埋葬場所に聖者廟が建設される事が、また聖者生誕祭が開催される事が決定したそうである。生誕祭は H 氏の枕元に A 氏が現れた時期に因んで、シャーバーン月に行われる事になった。ちなみに枕元で A 氏の話を聞いた H 氏も 1988 年になくなり、預言者ムハンマドの生誕祭のある 3 月の 30 日に彼のための聖者生誕祭が挙行されている。

夢の中に預言者や聖者が現れ、ある場所を聖地と宣言する事[31]、

もしくは人物自身の聖地とされモスクや聖者廟の建設につながる例は、特異なものではない。実際架空の人物の廟が建設された事すらあると言う。大稔は 12-15 世紀における「夢」の存在を現代のそれよりも重要な存在であった事を示唆している。当時は夢が事実に準じて理解され、夢に起因した行動が目立ち、また夢で見られた事柄が他の人々に伝えられ共有化し、社会化されることを指摘しているが（大稔 1993:25)、本事例はまさにこれに当たるものであり、現在のムスリム社会における夢の存在、影響力を考える上で重要な事例となるのではなかろうか。

生誕祭に合わせて上エジプト地方を中心として、エジプト各地から多くの人が参詣に訪れる。この生誕祭においても観覧車や、回転ブランコ、射的、電気自動車などのいわゆる臨時の遊戯施設が、また飲食物の出店などが広場に所狭しと立ち並ぶ。廟だけでなく広場を含めた広範な地域で祭りが行なわれるため、毎年主催者側は祭りの期日を警察、消防、病院と調整し、警備等の依頼を行なうのである。以下に本祭りの詳細を記す。

1.3.3 A 氏の聖者生誕祭の主催者

A 氏の親族がこの祭りの主催者として祭りの準備や運営を行なっている。準備に関する全ての取り仕切りは聖者 A 氏の長男である B 氏（50）が行ない、A 氏の血縁のクルナ村在住、および上エジプトに住む親類の男性を中心に 20 名ほどで、さまざまな準備が行なわれる。この祭りの運営は合議制で行なわれるのではない。したがって会議などが行なわれることはない。全てを取り仕切る B 氏が必要各項目に対して、細かな指示を出し各々が準備し、結果を B 氏に報告する形で準備は進められる。A 氏の親族を中心に準備や運営は行なわれるが、“この地区の全ての人間にとっての聖者生誕祭”という意識が強く、末端まで含めると 1000 人規模の人間が参画して運営が行なわれるとの事である。A 氏には 5 人の子供がおり、長男の B 氏を始めとして、ハッジャージ（故人)、ユーセフ、ザイナブ、オンム・ユーセフという男 3 人女 2 人の兄弟構成であり、現在この祭りを取り仕切っている B 氏には 4 人の子供がおり、ムハンマド、サイード、モナ、ザイナブの 2 男 2 女となっており、長男のムハンマドは後継者として B 氏より、準備、運営のノウハウを学んでいる（**図 013**)。

図 013 B 氏自宅

1.3.4 聖者生誕祭の準備

1.3.4.1 1ヶ月前頃～10 日前まで

先述したように祭りに際して特に会議などは行なわれない。毎年おおよそ 10 日～一週間くらい前になると準備が本格化するが、まず 2 週間ほど前にB氏が聖者生誕祭の開催申請書を東岸にある警察、消防などの行政当局に提出する。祭りの行われる 3 日間はエジプトの各地域から非常に多くの参詣者が訪れるため、トラブルを未然に防ぐ事を目的としている。依頼を受けた行政側（警察、消防、病院など）は、有事の際に迅速に対応するために警備、ならびに救護の体制を整えるのである。

1.3.4.2 10 日ほど前

A氏の聖者生誕祭の 10 日ほど前に東岸のアブ・アル＝ハッジャージモスクにおいて、聖者生誕祭が行なわれる。この祭りはエジプト全土でも有名な非常に規模の大きなものであり、世界的にも知られるものである。この祭りにもエジプト全土から多くの人々が参詣に訪れ多くの出店も参加する。そしてこの祭りに出店していた出店の多くがA氏の生誕祭のために西岸に渡ってくる。したがって、おおよそ祭りの 10 日ほど前になると、A氏の廟前の広場に出店が出現しだし、徐々に営業を始めだすのである。またその頃時を合わせるかのように、A氏の廟に聖者生誕祭開催の旨の告知が貼り出される。

1.3.4.3 3 日ほど前

上エジプトの各都市にいる人々に対して、主催者としてB氏は開

催の旨を告知する。告知は各地域在住のＢ氏の知人に依頼して行われる。各地域では車が仕立てられ、その車に拡声器を設置し、各都市内を巡回するようにＡ氏の聖者生誕祭の開催を知らせる仕組みである。毎年Ａ氏の聖者生誕祭は決まってシャーバーン月の 22～24 日に行なわれ、最終日の 24 日にクライマックスを迎える。日時の変動がないため､特定の個人宛の招待状などを出す事はないという。逆に招待状を出す事はきわめて効率的でないとの事である。ちなみに開催告知は祭りの 3 日ほど前に行なわれる。その理由として、それ以上前に告知を行っても、人々が忘れてしまう可能性が高く、これも効率的でないからとの事である。

また、この頃Ａ氏の廟では祭りを彩るデコレーション用のランプの設置が行なわれる。廟にはＢ氏ほか親族が集まり、夕刻から準備は始められる。村の電気技師によって、赤、青、黄色の三色の電球が廟に設置され、鮮やかなイルミネーションとなる（図 014-015）。

図 014 電灯設置風景 1

図 015 電灯設置風景 2

1.3.4.4 シャーバーン月 24 日

祭りの最終日に当たり、もっとも重要なこの日は午前中からＢ氏の自宅にて、訪問者へ振舞う夕食の準備が始まる（図 016-017）。準備にはＢ氏の家族、親戚が参加し、この日のために大鍋を借りて来る。ちなみに 2006 年は、たまねぎ 20 キロ、トマト 30 キロ、そして牛肉 30 キロを夕食のために購入している。夕刻 17 時過ぎになるとＢ氏宅のザーウィヤにて参詣者に無料でパン、スープ、肉などが振舞われるのである（図 018）。

図 016 夕食準備風景

図 017 夕食用牛肉

図 018 B 氏宅ザーウィヤ内

1.3.5 聖者生誕祭の構成要素

毎年 A 氏の聖者生誕祭は決まってラマダーン月の前月のシャーバーン月の 22～24 日に行なわれ 24 日にクライマックスを迎える。祭りは三日間通して行なわれるが、各日とも祭りは夕刻から始まり、夜半から明け方にかけて一日の日程を終える。第一日目と二日目は、夕刻 16 時から始まり、未明の 2、3 時くらいに終了し、最終日にあたる三日目はやはり 16 時くらいに始まり午前零時まで行なわれる。以下に各日の行事内容について紹介する。

1.3.5.1 行進「ザッファ」　初日のみ―16 時頃―

初日のみザッファが行なわれる。ザッファとは生誕祭の開始を告げるものであり、生誕祭や祝祭など、各種の人生の儀礼などで行なわれる行列・行進を指す。たとえば、タンターのアハマド・バダウィーの生誕祭では、騎士や楽隊、各教団の構成員が旗を掲げて行進し、その後にバダウィーの生きた後継者のハリーファが登場するなどしてザッファが行なわれる。A 氏の生誕祭の場合、ザッファには馬が 20 頭ほど参加し行進する（図 019-021）。ザッファの所要時間は 30 分くらいである。この聖者生誕祭の場合は後述のマルマーハや、ナッブートに先立ち必ずザッファが行なわれる。マルマーハやナッブートの参加者の多くは廟の前に集まり、ザッファを見届け、もしくは参加した後、その後各エリアに散っていくのである。

図 019 ザッファ風景 1

図 020 ザッファ風景 2

図 021 ザッファ風景 3

1.3.5.2 馬の競演「マルマーハ」　3日間とも－16時半頃から－

マルマーハは毎年A氏の廟の北側の墓地に面した広場にて行なわれる。マルマーハとは馬に乗って音楽に合わせたダンスを行ったり、早駆けを行ったり、2頭の馬で息を合わせて走ったりと、聖者A氏を祝い、A氏に奉納するために行なわれる馬の競演である（図022-024）。

図 022 馬の競演風景 1

図 023 馬の競演風景 2

参加する馬はザッファに参加していた馬であり、時には近隣の村々から来る場合もあるが、基本的にクルナ村で用意されるとの事である。

参加の条件などは特になく、馬を所有する者ならば問題なく参加できる。参加する馬には特別な訓練や、調教はなされていないとの話であるが、音楽に合わせて軽妙にステップを踏む馬の姿を見る限り多少の訓練・調教がなされている事は間違いない。この競演の責任者にはこの村の人間が就く。彼がこの行事のリーダーシップをとるのはもちろんであるが、彼だけでなく現場に居合わせるこの村の人達は、たとえば馬が疲弊していないか、乗り手が馬をうまく扱えているのか、観客に危険はないかなどに常に目を光らせて、この行事が滞りなく進むように協力している。競演に関しては、後述するナッブートの競技会と同様に、特に祭全体を司るB氏から指示を受けて行事が進行するものではない。村の皆で協力して作り上げられるものである。

図 024 馬の早駆け

1.3.5.3 ナッブートの競技会

3日間―17時頃～夜半まで開催―

ナッブートは馬の競演と同様にザッファの後に行なわれる。毎年夕刻に廟の前の広場の南端のエリアで、また夜には、別の場所で開催される。広場には決まった競技場などは設けられないが、人々が

徐々に集まり、人垣が形成され、その人垣が競技スペースを創出し競技が開催される。17 時頃から始まる競技は一旦 19 時頃に必ず解散となる。そしてまた夜半に道路上であったり、道辻であったり、N 氏の自宅付近などで競技が開催されるのである。競技の詳細については次章の第 2 章にて論ずる（図 025）。

図 025 ナッブート会場

1.3.5.4 ズィクル　夜半～

この聖者生誕祭においてもズィクルが行なわれる。ズィクルは 2 日目、3 日目の日が暮れた 8 時以降に開始され夜半まで行なわれる。朗唱する人間の声にあわせてスピーカーの大音量が鳴り響く。参加者は 30 分もしないうちにトランスの状態に入る。ズィクルのためのスペースは生誕祭の初日に設営される。またズィクルの行われるスペースはそれ以外の時間は無料で食事が振舞われる場所としても利用される（図 026-027）。

図 026 ズィクル会場

図 027 ズィクル風景

1.3.5.5 歌手の招待

聖者生誕祭に際して、上エジプトの人気歌手などを呼びコンサートなどの催しを行なう場合も多々ある。これはＢ氏が中心となって企画・運営されるものではなく、クルナ村の人々が自主的に聖者生誕祭に際して企画するものである。上エジプト地方に限った人気とは言っても、歌手の招致やコンサート会場の設営・撤営等には、多額の予算が必要となるために、地元の富裕層が中心となって運営がなされる。コンサート開催には、個人が単独で費用を負担するのではなく、何人かの人間が資金を持ち寄り、負担することもあるそう

である。ちなみに 2005 年度はエドフ出身のムハンマド・アジューズという人気歌手を呼び、24 日の夜に 300 人ほどの聴衆を集めて盛大なコンサートが行われた。また以前にはヤシン・トハーニーという人気歌手が毎年聖者生誕祭を賑わせていた[32)]。

図 028 上エジプトの歌手（右側）

1.3.5.6 生誕祭での出店

Ａ氏の生誕祭の場合、廟前の広場が出店や遊戯施設で埋め尽くされ、ちょっとしたアミューズメントパークになる。Ａ氏の生誕祭では、250ｍ×150ｍほどの広場に子供向けの遊戯施設、飲食物の出店などが立ち並ぶ（図 029）。

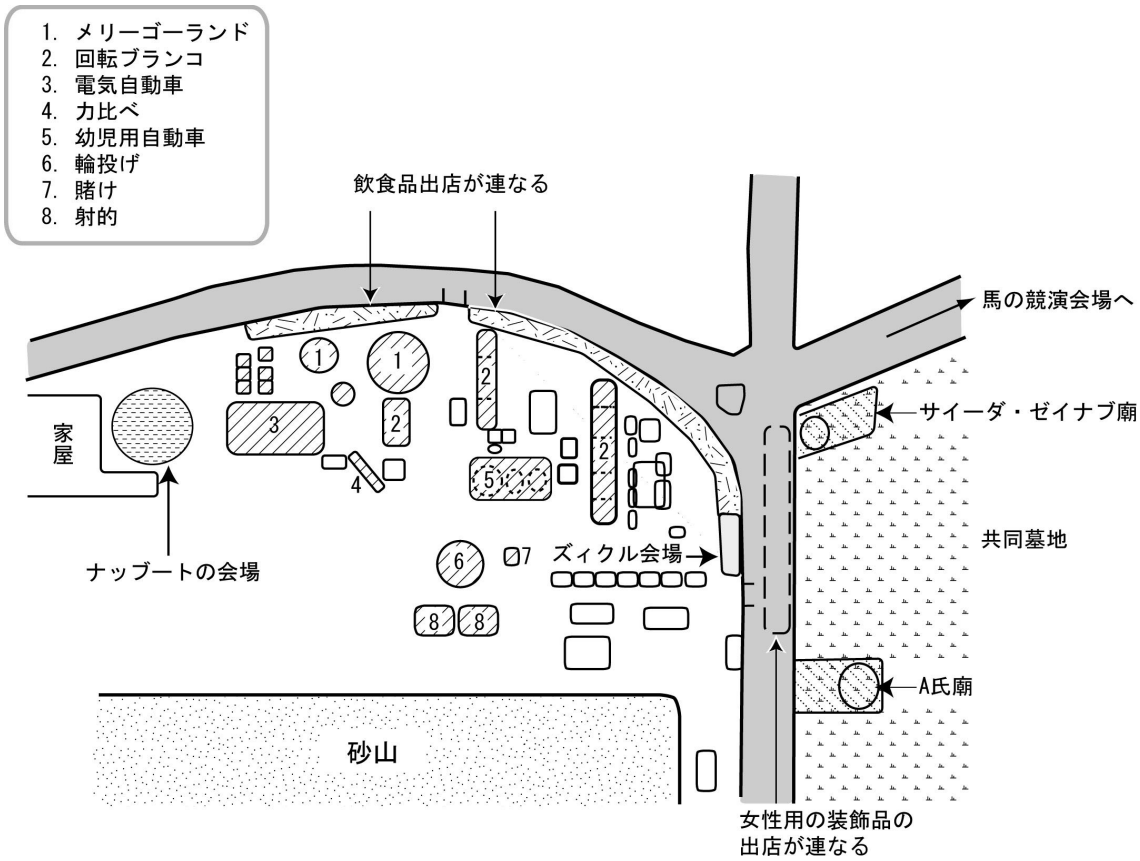


図 029 聖者生誕祭会場図

これらを出店する人々はエジプト全土のさまざまな場所から集まってきており、数十に及ぶ遊戯施設や出店が並び、さながら日本の縁日を髣髴とさせる。生誕祭の 10 日ほど前になると最初の出店が現れ、その後徐々に参集してくる。営業に対する厳しい決まり等はなく、出店準備ができた出店・施設から営業を開始する。これら出店・遊戯施設は、その出店のために、Ａ氏の親族にお金を納めたりする事はない[33]。彼らはもちろん営業目的にここに集うわけであるが、彼らもまた聖者故人のために祭りを盛り上げる事をその心の中心に位置させているのである。以下に遊戯施設・出店の概要を記す（図 030）。

図 030 聖者生誕祭

＜船型のブランコ＞

船の乗り物でマルキハーと呼ばれる。大小２種類があり、年齢によって使い分けられる。この生誕祭で一番多く見かけられた遊戯施設である。遊戯料は一回一人 50ｐである（図 031）。

図 031 船型のブランコ

＜幼児用電気自動車＞

直径約２ｍの軌道内を回転するだけの単純な仕組みの電気自動車で幼児用の遊具である。遊戯料は一回 50p～１ポンドである（**図 032**）。

図 032 幼児用電気自動車

＜射的（鉄砲）＞

一回１ポンドで６発の玉が支給される。約 1m 先にある紙の丸めたものを標的にライフルを撃つもの。射撃の結果いかんで商品等がもらえるわけではない（**図 033**）。

図 033 射的（鉄砲）

＜賭けゲーム＞

8つのカテゴリーに一枚 50p で購入したチップをかける。ランプが点滅しながらカテゴリーを巡り、ランプの止まった所に賭けていると商品をもらえるルーレット形式である。商品は清涼飲料水 350 m 缶などである（図 034）。

図 034 賭け

＜電動自動車＞

一回 2 ポンドで 5 分ほど遊ぶことができ、非常に人気がある。この施設はイタリアから輸入されたものである。またこの業者はアスワンから毎年この生誕祭を訪れる（図 035）。

図 035 電気自動車

＜回転ブランコ＞

電気仕掛け回転するブランコである。子供に大人気で、一回約 5 分遊べて 50ｐ～１ポンドである（図 036）。

図 036 回転ブランコ

＜輪投げ＞

日本の輪投げと全く同じで、エリア内の景品にうまく輪が通るとそれを手に入れる事ができる。この場合景品を支える台まで輪が完全に通らないと商品を手に入れる事はできない。一回（3つの輪）1ポンドである。**（図 037）**。

図 037 輪投げ

＜力比べ＞

傾斜のついた線路に乗った重しを力いっぱい押し、突端についているボタンまで到達できれば成功である。特に景品等はない（図038）。

図 038 力比べ

＜装飾品＞

女性のための装飾品を専門に売る店が登場する。この類の店は廟に接する通りに集まって出店される（図 039）。

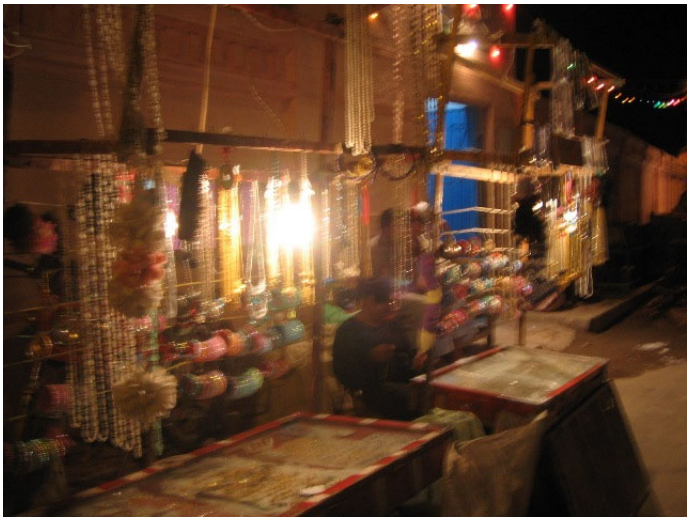


図 039 装飾品の出店

＜玩具の店＞

子供向けのおもちゃ専門店が現れる。さまざまな種類のおもちゃが売られ、子供でも購入できるように廉価である（図 040-041）。

図 040 子供用玩具店 1

図 041 子供用玩具店 2

＜食べ物＞

ピーナッツなどの豆類、また生誕祭に合わせて伝統的な菓子を売る店も現れる（図 042-043）。

図 042 豆類を売る店

図 043 お菓子の出店

＜飲食店＞

聖者・生誕祭への参詣者のために飲食店も軒を並べる。クシャリ、フール（豆）の店が人々の食欲を満たしている（図 044-046）。

図 044 クシャリ販売店

図 045 飲料品販売店

図 046 お菓子販売店

第 2 章

ナッブートの文化

2.1 祝祭（マウリド）で実修されるナッブート

エジプトで行われる聖者生誕祭は前述したように聖俗さまざまな要素から成り立っているが、上エジプト地方の重要な構成要素のひとつとして、ナッブートの競技会が挙げられる。聖者生誕祭はシャーバーン月に多く行なわれるが、同月に上エジプト地方で多く行われる結婚式などの祝祭の折にもナッブートは行なわれる事がある。この場合は、宴に参加する家族・親族や友人達など祝宴集う限られた人間達によって行われるものであり、余興的な意味合いの濃いものといえる。他方で聖者生誕祭で行なわれるナッブートは、それとは対照的に真剣勝負の色合いが強いものであり、スポーツの競技会としての側面が強調される。実際に、実修者の言説においても「結婚式などのナッブートは友人・知人など少数の人間で行なわれるもの、しかし聖者生誕祭のナッブートは規模が大きくナッブートの専門家が集まる。」とあり、この語りからも競技の質の違いが伺える。

上エジプトの多くの聖者生誕祭でナッブートの競技会が確認されるが、実修者の言説として、聖者生誕祭におけるナッブートの競技会の重要性が語られる事が多く、彼らの言説からはナッブートを上エジプト人の特有の文化として位置づけ、それは自己の帰属意識（アイデンティティ）と非常に密接に関係しているように感じている。

調査地の概要の項でも述べたが、上エジプト地方は二つのエリアに分かれ、南側は *Sa`id al-juwwai* `Deep *Sa`id*” と呼ばれ、北側を *Sa`id al-barrani* `Near *Sa`id*” と呼ばれる。大まかに前者はソハーグから、ケナー、そしてアスワンまでの地域を指し、後者はカイロ南側付近からからソハーグ付近の中部エジプトを指す。本論では特に *Sa`id al-juwwai*`Deep *Sa`id*” と呼ばれる地域において実修されるナッブートについて論じられる事になる。

その中でもケナー州 L 市に位置するクルナ村 A 廟の聖者生誕祭にて行なわれるナッブートについてのその事例研究を行う。聞き取り調査からも明らかであるが、ナッブートの競技はソハーグ以南、アスワン以北の地域を中心に盛んに行なわれている。したがって、地理的には *Sa`id al-juwwai*`Deep *Sa`id*” の文化として、その地域と非常に密接に関係していると考えられる[34)]。

ナッブートの競技会においては、通常主催者が用意したナッブートを用いて競技が行われる。現在は竹に似たカラザーンと呼ばれる材料を用いて競技が行われる事が一般的である。過去には、また地

域によっては、硬質の木材であるシューバ材を使っての競技も見受けられるようであるが、一般的とはいえない[35]。本調査地においても、以前はシューバ材のナッブートを使うことがあったが、極稀であった[36]。シューバを使用した場合、硬質で重い性質が災いし、怪我や死者が出る場合があり、非常に危険性が高くなる。そのため本地域では 30、40 年ほど前より、現在のようなスタイルで競技が行われるようになったとの事である。竹材に近いカラザーンは、非常に軽量で、また、もしも対戦者を打ち付けてしまった場合でも、相手に与えるダメージは小さく、競技会の運営を考えた場合、非常に有益なものと思われる。

2.2 A 廟の聖者生誕祭におけるナッブート

A 廟の聖者生誕祭の場合、競技会への参加者は当該地域であるクルナ村、東岸の L 市中心部はもちろんの事、近隣のオゴース、バイラート、ケナー、ナカダ、アルマント、50ｋｍ以上離れたエスナ、エドフ、コム・オンボ、アスワンなど上エジプト地方全域の各地から参加者が集まる。A 氏の聖者生誕祭が開催される同時期には、A 廟の近隣の廟をはじめ、多くの地域の聖者廟で祭りが催され、それらの多くでナッブートの競技会が確認できた。以下に A 氏の聖者生誕祭におけるナッブートの競技会についての詳細を記述する。

2.2.1 ナッブート競技会の運営について

競技会の運営はクルナ村在住の N 氏を中心に行なわれている。N 氏はクルナ村の出身の 39 歳の男性である。地元の高校を卒業後、カイロの名門アズハル大学[37]に進学、イスラームの歴史などを修めて、修士号まで取得している。この間 10 年に渡ってカイロでの生活を経験している。博士号の取得は金銭的な問題などを理由に断念、地元クルナ村に帰り、女子の高等学校（16-18 歳）の教師となり、それを 15 年間勤めている。彼の父親もそうであったが、彼はクルナ村だけではなく、上エジプト地方のナッブート界で一目を置かれる存在であり、競技者の誰しもが知っている名手である。ナッブート競技会の主催者の役割は、半ば伝説の名手ムハンマッド・マンスール氏から、彼の父アハマッド・アッディーヤへ受け継がれ、その後彼へと現在まで 3 代に渡って引き継がれている。親方の役割は A 氏の血筋や家系で受け継がれているわけではない。またその職には定年による引退などが決まっているわけではない。もし体力が続くなどの条件が許すならばいつまでもその役割を存続できるのである。

たとえば現在のＮ氏に前職の父親から親方の役目が譲られた経緯は、父親が仕事上非常に忙しくなった事や、Ｎ氏が親方として十分に育ってきていた事などの諸条件があげられている。

Ａ氏の聖者生誕祭のナッブートはＮ氏ほかアリ・アッディーヤ（33）、ラージャ・アッタイーブ（38）という 2 名の中心人物がおり、合計 3 名で運営がなされている。3 名の中では役割分担がなされており、Ｎ氏はナッブートの競技会の運営全般を担当し、他の 2 名はナッブート競技会の参加者への接待の一切を取り仕切っている。

Ｎ氏以外の 2 名は、さまざまな地域から集まる参加者への食事、お茶、水タバコ、宿泊場所等の手配の一切を任される。つまりナッブートの競技以外の一切のマネイジメントをする事になる。競技会に参加する全てのゲストがクルナ村に宿泊するわけではないが [38]、食事やお茶、水タバコなどは多くの人間に対する用意が必要であり、本競技会においては延約 200～500 名ほどの人々を受け入れる用意が必要であると思われる。そしてこの競技会運営の中心人物の 3 名をクルナ村の競技会の参加者がサポートする形が取られている。たとえばもしもクルナ村への宿泊希望者が多かった場合、当然一箇所において全てのゲストの宿泊の受け入れを行うことは不可能である。その場合クルナ村のナッブート実修者の家にゲストを割り振る形で宿泊させる事になるが、そういった場合にはクルナ村のナッブート実修者達が協力してこれを受け入れる。宿泊者の規模は受け入れ側のキャパシティに寄るが一箇所大体 20 名～100 名程度との事である。クルナ村の家々にはザーウィヤと呼ばれるいわゆる集会施設が併設されており、そこを利用して食事、宿泊等のもてなしが行われるのである。もてなしを受ける側のインフォーマントの語りによれば聖者生誕祭におけるザーウィヤは「ナイトクラブと一緒。」との事である。彼らの語りでいうナイトクラブとは、「好きなだけ食べて、飲んで、タバコを用意してもらい、ナッブートして…」と至れりつくせりと言う事のようである。ちなみにＮ氏は一人の受け入れ側の人間としても 200 名ほどの人間を受け入れ準備を行うとの事である（図 047）。

図 047 N 氏宅ザーウィヤ内

自らの家でゲストを受け入れない場合でも、クルナ村のナッブート実修者達は競技会の運営に協力を惜しまない。彼らは上エジプトの各地方から来るさまざまな人間たちが、食事をし、お茶を飲み、ナッブートをする場合のサポートをする。また見知らぬ者同士が同宿する際にさまざまなトラブルが起きぬように、祭りの間中いわゆる自警的な形で活動を行なうのである。

ナッブートの競技会は聖者生誕祭のひとつの構成要素であるが、実はその運営に関しては独立した形がとられていると考えられる。これは馬の競演やコンサートの開催などと同じ事がいえるのであるが、この行事は A 氏の家族によって直接的に指示、手配がなされるものではないのである。祭りを取り仕切る聖者 A 氏の親族は、A 氏の廟を参詣し、A 氏の家を訪問する人々を手厚くもてなす事、それが滞りなく進むように手配する事をその主眼に置く。実際はこの部分が聖者生誕祭の本質であり、極言すればこの部分が聖者生誕祭といえるのかも知れない。

ナッブートや、馬の競演、出店やコンサートといったその他の構成要素は、クルナ村の人間達が、またその他の地域から来た人々によって自治的に運営されているものといえる。たとえばナッブートに関して言えば N 氏は A 氏の一族の人間ではなく、当然血縁関係などはない。また馬の競演を取り仕切る人間も然りである。誰が親方であり、どのように運営がなされているかなどという事に関して、祭り全体を取り仕切る B 氏は特に口を挟まない、というか任せきりなのである。彼は祭りの総責任者である以上、祭りで行われる全て

の事を知る必要性があり、何がどこで行われているのか、と言う事については把握している。しかしながら個別の事象に直接的に関与する事はないのである。極言すれば、必ずしもナッブートを取り仕切る親方はN氏でなければならないという事ではないし、ナッブートの競技会が必ず行われなければならない、という事にもならないのである。たとえばナッブートの親方は地域の人々から人望がある人間で、適切に指示を出し、ナッブートの競技会が滞りなく運営できる人間であればそれでいいと言う事になろう。

ナッブート競技会の開催にあたっては特別に招待の連絡等は行なわれない場合もある。それは聖者生誕祭の場合と同様、ナッブートの競技会も固定日時に毎年開催されているために、改めて周知、招待を行なう必要はないという考えからである。したがって競技会参加者は、廟への参詣と合わせて自ら都合を合わせてクルナ村にやってくるのである。しかし、他の地域のナッブートの競技会の開催に際しては個々人に招待がなされる場合もある。そういった場合は、招待状が送付される場合と、電話での連絡される場合の二通りの手段が用いられる[39]。しかしながら主催者から、直接招待がされなくとも、競技会へ参加者は招待客として手厚くもてなされるのである。運営に関して最も重要なポイントは、他の地域から来るゲストへの心遣いだとN氏は言う。たとえば2006年の競技会にはエスナ、エドフ、コム・オンボ、ソハーグ、ケナーなどからその町のオムダが訪れていた。いずれもその土地の名士達であり、失礼があってはならない。そして彼らにこの競技会を楽しんでいってほしいと彼は言う。彼らへの対応、接待に関しては非常に気を使うとの事である。また、ナッブートの競技運営の特徴として、ゲストに対しての金銭的な負担は親方であるN氏が費用全てを負担する事が原則であり、それによって運営は成り立っている事が挙げられる。多くのゲストを受け入れる事を考えるとN氏の出費は相当な額になる。ちなみに彼は2006年はゲストへの食事のために一頭の牛を用意した。彼はいう「食事等用意するのは当然である。それが良い人間関係を作るし、皆競技会を楽しみとしており、私は皆の事が好きだから。」という。彼はもてなしが作り出す人間関係の重要性を認識しているようである。

一方、馬の競演では競演参加者のみんなでお金を負担している。親方が一括してナッブートのようにお金を負担する事はない。

2.2.2 競技について

ナッブートの競技は常に一対一で行われる。ナッブートをちょうど刀のように用い、剣道やフェンシングのようにお互いの体をめがけて打ち合うスタイルでこの競技は行なわれる。瀬戸による聞き取り調査、ならびに先行研究（赤堀 1998: 565）では、競技では体を打ち合う真剣勝負が展開されるという話もあった。しかし実際のところ聖者生誕祭における競技会では相手の体に強く打ち込むところまでは及ぶことはない。実際の競技では、対戦相手の体に隙を見つけ、もしそこを打ち込んだ場合相手の戦闘能力を奪える箇所にナッブートを運んだ場合に勝負は決する。ナッブートでの真剣な打ち合いは、実際に対戦相手にダメージ（怪我をさせる事）を与える事を意味する。また怪我や死亡に至った場合、それは競技後の遺恨などにも発展する事を意味する。よってあくまでスポーツ競技会を楽しく行う事が前提であり、社会的な関係性に配慮がなされた結果このような勝負の決し方が決定されたという事である。実際に打ち合う形式の競技が行なわれていないことに関して、インフォーマントのＳ氏は「たとえばサッカーだってゴールにボールを入れるのが重要で、ネットを破る必要はないだろ？」との意見を述べている。これは勝負を決する事が重要であり、相手を倒す事を目的としているのではないという事を意味している。したがってナッブートを相手の隙に運んだ時点で、その勝負は決しており、その先の攻撃は不要なのである。あくまで技量を競う事がこの競技の目的なのである。

スポーツを行う時間・空間は、一時的に日常の役割や決まりから離れた、いわば“非日常”の世界になるともいえる。しかし、スポーツの特性として、そこで生産される関係性の形成・確認・再生産などの“正”の成果は、そのまま日常の世界に持ち込まれる事が多く、また、そのような機能を期待されている事も事実であろう。しかし一方で、喧嘩・負傷・反目などその場で発生したいわゆる“負”の結果に関しては日常に持ち込まないようにするのが、暗黙のルールとなろう。特に当該地域のように、密接な人間関係が保持されているイスラーム社会においてはこの原則が重要な意味を持つであろう。これらに合わせてナッブートの持つ殺傷性の高さなどを考慮すると、打ち込みを伴う競技は非常に成立しづらい環境にあるといえるであろう。

本来ナッブートは格闘技であり、元来は打ち込みを行い相手の戦

闘能力を失わせる事がひとつの目的であった。現在ナッブートの競技では繰り返し述べているように、実際に打ち込みは行われないが競技者の攻撃は、実際の打ち込みでの攻撃の原則に則って行われている。競技者は人体において最も危険な箇所への攻撃を基本にその攻防を繰り広げるのである。彼らは頭部、頸部などへの最も効果のある攻撃部位への攻撃の可能性を探りながら、対戦相手との攻防を行う。したがってこれが勝負の駆け引きの中心に位置する原則となるのである。実際に相手の身体に打ち込みを行わないため、一見緊張感に欠けるように思われるが、相手の身体の隙を狙い、その急所を巡り行われる攻防は、思いの外緊張感がある。

インフォーマントのN氏はナッブートの達人の条件として、ナッブートのコントロール能力を挙げている。競技においては実際にナッブートを打ち込めるところまで素早く運ぶも、それを寸止めにすることが重要であり、如何にトップスピードでナッブートを操りながらも、うまくコントロールできるかという事がナッブート競技において非常に重要であると語っている。

ナッブートは一本先取の競技と言える。つまり、試合は対戦相手の体に一度うまく攻撃できたら（できる場所にナッブートを運んだ場合）その勝負は決着をみる。ある実修者はこの競技のあり方を評して「ちょうどボクシングのKOみたいなもの」という。

攻撃を与える箇所によって与えられる点数が違う競技や、攻撃の決まり方によって得られる点数が異なる競技、柔道のような格闘技とは異なるものといえよう。またサッカーなどのように時間制で行われ時間内に得た点数の合計によって勝敗を決める競技とも異なるのである。

競技参加者は見物人を含め、競技者を取り囲むように人垣を造り競技を見守る。この人垣によって囲まれ、形成される空間（エリア）が競技の行われるスペースとなる[40]。したがって、競技が行なわれる都度、参加人数や見物人の多寡によって競技スペースの規模は変化する事になる。しかしながら、参与観察から得た知見においては平均して10mほどの直径の円が作られ、その中で競技が展開される。

この競技には特段審判が用意されない。勝敗は、競技者をとりまく競技参加者、観客など周囲の人々によって判断される。審判ではないが、競技者の他に一人ないし二人の人物が、人垣の中央の競技

スペースに位置し競技を見守る。彼らの役目は競技の勝敗を決める事ではなく、競技のコーディネーターといえる。この競技は先述したように、お互いの体を打ちつけるものではないが、たとえば競技中にナッブートが対戦者の体に間違って強く触れてしまう場合や、競技の興奮から競技者がその行動を自制のできない状況に至る、もしくは至りそうになる場合が多々生ずる。そのような場合、このコーディネーターがすばやくその状況を回避するのである。コーディネーターの役回りは、競技会全体の統括を行う人間と、彼を補佐する地元の人間から成り立っている。彼らは競技の親方という意味のアラビア語でライースと呼ばれる。親方は、競技をコントロールする事はもちろんの事、競技会がうまく進行するように、適切に次の競技者を選定し、ゲストが満足して競技を楽しめるように塩梅するのである。また平素は勝敗の判断は行わないが、勝敗についての明確な答えを競技者が求めた場合は彼らの判断に委ねられるのである。したがって、彼らは審判というよりも多くの権限を持つ存在といえるであろう。近代・国際スポーツの競技会に準えて、彼らの役割を論ずるならば、いわば「競技会大会本部」のような権威をもった存在といえるであろう。

親方は競技会が開催される当該地域の人間で、地域の人達の信望が厚い事もさることながら、ナッブートの実力が伴う事が必須の条件と言われる。競技会の開催場所なども彼が決定するが、同時に彼も一競技者として競技に参加する事が許されている。彼らは公正な勝負を運営するという意味では、競技者の外にある中立な人間である。しかし一方で競技参加者としての側面をも持つ、いわば「境界」に存在する人物といえるであろう。

ナッブートの競技の所要時間は、特に決まっておらず試合によって異なるが、平均すると３～５分程度であろうか。上級者と初心者が対戦すれば、瞬時に勝負が決するが、熟練者同士が対戦した場合、試合が決せずに主催者によって試合を止められる場合（ドローようなもの）もよく見かけられる。試合が途中で止められる場合のもうひとつのケースとしては、競技者同士が試合に熱くなり、競技に対して自制できなくなった場合、もしくは自制できなくなりそうになった場合、親方もしくは他の競技参加者によって止められるのである。

競技会は、国際スポーツのようにリーグ戦やトーナメント形式な

どで行われるわけではない。一試合終わると次に競技に参加する意思のある人間がナッブートを持ち中央へ進み、試合を開始する。勝ち負けに関係なく、競技には何度でも参加できる。本聖者生誕祭の場合は一試合が終わると　勝ち負けに関わらずに、両者とも一旦試合を終える。もし参加者が少数である場合、勝った方が残る場合もあるが通常の場合多くのゲストをさまざまな地域から受け入れる本競技会においては、基本的に入れ替わり制にて競技が進められる。またゲストに楽しんでもらうという観点から、ホストであるクルナ村の人々は参加を控え訪問者達に多く競技を行ってもらうように心がけている。上エジプト地方においても、各聖者生誕祭により構成要素は全て同じではない。しかし多くの場合、ナッブート競技会が確認できるとの事である。

A 廟の場合に聖者生誕祭でナッブートが行なわれる理由を、主催者ならびに参加者達の多くは聖者を祝福するための行為と位置づけている。したがって、このナッブート競技会において賞金が設定されるような事はない。なぜなら、本競技はその本来的な目的を A 氏の奉納と位置づけて行われるものだからである。

2.2.3 競技所作

2.2.3.1 競技前の作法　－ラアサ－

競技はまずナッブートの先端を地面につけ、その後先端を頭上にかざし、競技者がお互いが円を描くように回転しながら、舞を行なうところから始まる。この舞いはラアサと呼ばれる所作である。ラアサとは「舞い」の意味を指す言葉である。ナッブートの競技を行う前に行われるこの所作は対戦相手に対する尊敬の念・敬意を伝える競技前の所作といわれる。ナッブートの競技においては特に年長者、ゲスト、熟練者に敬意が払われる。その敬意の表わし方として、このラアサが利用される。ラアサでは、対戦相手に自分よりも先にナッブートを掲げさせる。これは、相手への敬意の念を表す事を意味し、それにより対戦相手はもちろんの事、周囲の参加者、観客にも、競技者達の関係性、また敬意の所在が明瞭に伝わるのである。このラアサの所作は上エジプト地方のどこでも共通のものである。ラアサは、円を描くように、回転しながら行われるがその方向は決まっていない。たとえば一方が右に移動しながらラアサを行う場合、対戦相手は常に対角線上を動きダンスする。ラアサでは片手でナッブートを掲げるのと同時に、片足の膝を上げ、自分の体を回転させ

るなどの所作も行われる。これは自分が如何に自由自在に自らの体をコントロールできるか、ナッブートに熟達しているのかをアピールする所作である（図 048）。

ナッブートの競技会は必ず楽団の伴奏と共に行われる。競技者は試合に先立つラアサの際に伴奏を担当する楽団にお金を払う場合がある。これは労いのお金でいわゆるチップに相当する。この場合おおよそ 3～5 ポンドの現金が手渡される。ちなみにこのチップはその日の最初の試合の時のみに支払われ、その後試合に登場する場合は発生するものではない。

図 048 ラアサ 1

図 049 ラアサ 2

2.2.3.2 競技開始時の作法　－サラーム－

ラアサが終わると勝負が始まる。勝負はお互いのナッブートを交互に体の正中の延長線上で二度重ね合わせる事から始まる。この所作をサラームと呼ぶ。この時まだ間合いは８～10mの距離がある(図 050-051)。

図 050 サラーム１

図 051 サラーム２

2.2.3.3 競技開始時の作法　－ラーシュ－

基本的にラーシュとはサラームと同様に試合開始前の所作のひとつである。ラーシュとは「回転」を意味し、競技者がナッブートを頭上で回転させる所作の事を指す。ラーシュには (1)片手で行われるもの (図 052-053)、(2)両手を使って行われるものの二種類が確認できる (図 054-055)。

図 052 片手によるラーシュ 1

図 053 片手によるラーシュ 2

競技開始時のラーシュは片手で行われる。ラーシュはサラームのような単なる礼のひとつではない。いわば礼から競技への過渡期、導入部といった意味合いを持つのである。ラーシュはただ頭上でナッブートを回転させているだけではない。相手のナッブートからの攻撃を想定し、相手のナッブートの動きにシンクロさせるように、回転させるのである。その際は、防御の最重要部である頭部や体の正中線の前面部、後背部の守りをしっかり意識するのである。つまり、相手のナッブートの動きを常に把握し、攻撃による致命的なダメージを受けない事がその動きの大前提になる。したがってラーシュの動きのコツとしては、相手のナッブートの動きに合わせる事が求められる。自分のペースでナッブートを動かすという事はないの

である。ラーシュは相手との間合いをうまく図り、自分の頭や重要な場所を守るのと同時に、相手の隙をうかがい、攻撃のタイミング、箇所を見つける動作ともいえ、いわゆる“様子見”の動作といえるであろう。この所作はサラームの後に連続して行なわれるのが通常であり、競技者は回転を続けながら、ラーシュを行い、徐々に対戦者との距離を徐々に詰め攻防ができる間合いまで接近するのである[41]。また試合がサラーム、ラーシュに続き行われた競技が、小康状態、もしくは閉塞状況に至ったりした場合、ラーシュによって仕切りなおしが行なわれる場合が多い。この場合のラーシュは、回転運動を伴わず、対戦相手を正面に見ながら両手で行われる。

図 054 両手によるラーシュ 1

図 055 両手によるラーシュ 2

このラーシュも競技開始時のラーシュと同じ意味があり、防御と

攻撃の両義的なものである。ナッブートの勝負は攻守に分かれて行われる。攻守の交代について、また攻撃権の回数などは競技開始時から決定されているわけではない。一方が攻撃した場合、他方は防御せねばならない。攻撃権がどちらにあるかは当初決まっておらず、選手の経験などによって相手の隙を見つけた場合にどちらになるか決まる。たとえるならば、サッカーのキックオフのような形ではなく、ちょうどアイスホッケーのフェイスオフのようなものようである。このラーシュの攻防の後に攻撃権をどちらかが持つ事になる。したがってこの所作は、競技の導入部として重要な意味合いを持つのである。

2.2.3.4 サラームとラーシュの関係

基本的にはラアサが行われた後、サラームが行われ、対戦相手への礼がなされる。その後ラーシュによって試合の導入部が形成されていくと考えられる。しかしながら、時にはいきなりラーシュが行われる場合もある。所作の順序に基本的な考え方は存在する。しかし実際のところは、対戦を行う 2 人にその所作のあり方は委ねられるとも言える。したがって、対戦者のどちらか一方がラーシュを始めれば、対戦相手はそれに従うといったように、非常に緩やかな決まり事の下に競技は成り立っているともいえるのである。

2.2.3.5 競技開始時の作法　―ムサーラファ―

ナッブートは、ラアサ、サラーム、ラーシュといった礼や、導入部を経て競技が始まるが、競技中に行われる所作があり、この所作をムサーラファと呼ぶ。ムサーラファとは、接近した間合いを解除し、競技開始時と同じくらいまでお互いに間合いを取った競技者が、ナッブートを両手で持ち、対戦相手に近づきながら強く交互にナッブートを合わせる動作の事である。この言葉は「試合を始める」という意味を持つ。このムサーラファは、対戦中に接近しすぎて、対戦相手の攻撃箇所や距離を失ったり、またお互いの間合いがうまく合わなかったりなど、試合が小康状態になった場合に行われる。競技者はお互いのタイミングを計り一旦試合を中断する。試合を中断する方法としては、相手が頭上に揚げた防御体制のナッブートを 2 回強く打ち込む場合や、どちらか一方がナッブートの先端を強く地面にたたきつけるなどの所作がある。これらの動作を行う事によって試合は一旦休止の状態になる。その後試合を再開する場合にこのムサーラファが行われるのである（図 056-057）。

図 056 ムサーラファ 1

図 057 ムサーラファ 2

一時休止をもたらすための所作にはそれぞれ意味がある。対戦相手の頭上に広げられたナッブートを強く打ち込むことによって、相手の防御の隙の無さに敬意を評し、現在の小康状態の確認が図られるのである（図 058-059）。

図 058 ムサーラファに至る動作（1/2）

図 059 ムサーラファに至る動作(2/2)

また地面にナッブートの先端を強くたたきつける動作には、「お前気をつけろよ。これから俺は本気で倒しに行くから。」という意味がこめられているそうである。つまり、その所作には相手への挑発、宣戦布告、脅迫的な意味がこめられているという。

したがってムサーラファを経てからの競技はそれまで以上に真剣

に行われるものとも言えるだろう。そう考えると「試合を始める」という意味も理解しやすい。サラーム、ラーシュを経て試合は開始するが、その際、最初にどちらが先に攻撃権を手に入れるのかについて、競技者はあまり重要視していない。ムサーラファ以降の勝負を真剣勝負とみなすならば、ムサーラファ以前の段階は相手の様子見の意味合いとも考えられ、攻撃権が重要視されていない点も理解できる。

2.2.3.6 試合の流れ

試合はラアサに始まり、円を描くように、回転しながらのラーシュが行われながら徐々に間合いをつめられてゆく。その後攻防が行われ、小康状態などの理由による中断を経て、両手によるラーシュやムサーラファが行われ試合が再開される。特にムサーラファの後の競技に真剣勝負の色合いが濃く、それまでは相手の出方を見たり、また緊迫感を楽しんだりする要素が大きかった競技が俄然白熱する。

競技に際しては、攻撃権の移動はその時々の試合状況による。それは実修者の言葉をかりれば、「ナッブートは丁度サッカーのようなもの」という事である。つまりサッカーやラグビーなどのスポーツのように、一方が攻め続ける事もあれば、攻守がめまぐるしく変わる事もあるという事である。また、実力差のある試合を評してインフォーマントのS氏はこのように述べる「ちょうどサッカーのビッグクラブと小さなクラブが対戦する場合を考えたらいい。つまり、ビッグクラブはタレントがそろっていて、戦い方を知っている。小さなクラブはタレントも不在で不利だから、なるべく失点をしないように防御中心で戦う。」と。つまり実力差のある対戦では一方が防戦一方になってしまう事もありえるのである。

また一方で相手が攻撃しているときは無理矢理反撃に転ずる事はなく、じっくり防御を行なうのが、ナッブートの流儀である。攻撃が成功する事がもちろん勝負の決め手になるのだが、相手の攻撃を、その動きを予想して何事もなかったかのように、素早く、また神業的に防御する事もナッブート実修者の中では重要ないわゆる“見せ場”であり、その人物の習熟度、などの評価に繋がる重要なポイントである。

通常はムサーラファ以前、ムサーラファ以後という二つの段階が一つの勝負の中に見られるようである。ムサーラファ以降が真剣勝負という暗黙の共通認識は存在するが、大きなカテゴリーとしては

サラームの後が試合となろう。サラームはちょうど日本の相撲の仕切りと一緒といえる。導入部の動作でありながら、また一方で試合をいつ開始してもよい状況である。ナッブートもサラーム以降はいつ相手が真剣に攻撃してくるかはわからない。したがって競技者は緊迫した状況である事には間違いない。競技者は、常に防御を念頭において、相手の動きに注意し、さまざまな所作を行わねばならないといえる。これは上エジプト共有の認識である。

先述したが試合開始前、または試合中に、競技者が地面をナッブートでたたく場合がある。試合開始前に関しては、腰を落としてナッブート全体で地面を強くたたく。この場合相手も同様の動作を行い試合が始まる。試合中の場合は、立位のままナッブートの先で片方が強く地面をたたく。これらの行動は対戦相手に対する一種のプレゼンテーションである。この動作は「これから、あなたを本気で倒しに行く。覚悟しろ」という一種の宣戦布告を意味し、その所作には相手への挑発、脅迫的な意味がこめられているのである。試合前にこの仕草が行われる場合は、双方のボルテージが非常に高まった状態で試合が開始される。また試合中の場合は、先述したようにその後ムサーラファに移り、真剣勝負が展開されるのである。

2.2.3.7 競技場　―刹那的に生起され、そして消える空間―

ナッブートの競技は、基本的に広場や道路といった公共の空間を利用して行われる。ナッブートの行われる広場は所有者がいる場合もあるが、村の人々の共有の空間であり、定期的な市場などに利用される。公共の広場を利用してさまざまな催しが行われるのは、中世以降のヨーロッパと一緒であろう。ヨーロッパの都市空間は教会や役所などを中心に成立・発展し、その中心にはいつも広場が存在した。広場は、単なるスペースではなく政治や経済の議論が行われる公共の会議場であり、市が立つ見本市会場であり、また曲芸、武術の試合や、ボールゲーム、石合戦、射撃などスポーツも行われる多目的空間であり、いわば一大総合文化センターとしての機能を果たしてきた。上エジプトの村はヨーロッパの都市と同様の発展を遂げてきたわけではないが、広場という空間が村の中で重要な役割を果たしている事は同様である。たとえば詳しく後述するアブ・アル＝ハッジャージの聖者生誕祭では、ナッブートの競技会にモスク前の空間、そして道路が利用される。またシェイク・ターヤの生誕祭、およびＡ氏の生誕祭ではやはり廟に隣接する広場、そして道路がそ

のフィールドとなる。道路は当然人間や車の往来がある場所であって、競技に際して、それらは一時的に封鎖され、一時的な広場が創出される事になる。エドワード・ホールは、人間の空間と距離の感覚は不変のものではない事を指摘しながら、人間が社会環境の中で創出し、必要とする距離を密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離の四つに定義した。また彼はアラブ人の空間認識についても言及しており、彼らの公共の場における個人の権利に言及している。ホールによればアラブ人の感覚では公共の場においての個人のプライバシーの保護がなされない事が指摘される。公共の場ではむしろ占有権などは存在せずに、後から来たものも自分の権利として主張し、奪う事さえあると指摘する（ホール 1970:160-181,213-217）。またそこには彼の述べる公衆距離が誕生し、さらに共有領域とそのプライバシーが創出されるとも考えられる。集団の領域である共有領域は直接的に集団の共有するプライバシーと対応する事は小林秀樹によって指摘がなされている（小林 1992:99-137）。彼はこの空間の創出に重要な要素として、よそ者の排除を挙げる。なにか共有の要素に結び付けられた集団は、その共有要素に基づく集団としてのプライバシーを得ると指摘しているのである。ホールの指摘からすれば、道路上という公共の場を占拠して、しかも我が物顔で競技が行われるこのナッブートの特殊性が浮き彫りとなり、如何にナッブートの競技会が当該地域の文脈の中で重要視されている事が理解できるであろう。また一方で小林の指摘からは、ナッブートという共通項によって結びついた成員達による空間創出が、非常に効果的に社会に対してその存在を主張できる事を裏付けるであろう。

また、競技が行われる空間である広場を考察する場合、たとえばシェイク・ターヤの生誕祭のナッブートの行われる広場には定期的に市が立ち、村の人々にとって、なくてはならない公共の空間となっている。中世ヨーロッパ農村の「ヴィレッジ・グリーン」（村の緑地）や「コモン」（共有地）が農民にとって重要なスポーツ施設であったように、また、都市の広場につながる道路も、実は近代スポーツの原型を生み出す重要な空間だったことはすでに稲垣が指摘しているが、そのような歴史的な考察を踏まえてもナッブートが行われる空間の創出は注目に値するであろう（稲垣 1991: 73-75）（図 060）。

図 060 ナッブート会場（実施中）

競技場が創出されるまでには段階が踏まれる。道路上に人々が集まりだしても、はじめは競技空間を車やオートバイ、そして人々も往来していく。まだ人々にとってそこは「道路」なのである。しかしながら楽団による伴奏が始まり、さらに人々が参集し、競技が白熱しだすと状況は一変する。単なる人々が囲うだけの競技空間に優先権が与えられるようになるのである。その競技場は何十年も昔からそこにあるように威厳を持ち始め、まるで必然的であったかのように何からも優先される空間が形成されていく。車や人間はもはやその空間を通過する事はなくなるのである（図 061）。

図 061 ナッブート会場（実施前）

基本的にこの空間に、日常の社会的な立場などは持ち込まれない。

たとえば各村や町の重要な人間が現れた場合でも、競技会を取り巻く人垣の中で特別な場所が設けられる事などはない。ナッブートの競技スペースでは階層化などは存在しないのである。

2.2.3.7.1 常設的な競技空間の登場

A氏の生誕祭の場合、夜半に競技が行なわれる場所は 2006 年からN氏の自宅近くの袋小路を利用した場所になった。この空間は 30 m四方ほどの四角い空間である。競技が行われる場所にはきめの細かい砂がひかれている。また競技空間を取り囲むように、長いすが置かれ、また絨毯がひかれる。ここはN氏がナッブート用に用意した場所である。平素はここで彼の友人や親戚などのトレーニングも行われるとの事である（**図 062**）。常設とまでは言われないが、ナッブートの競技会を意識した空間の出現といえるであろう。

図 062 N氏の用意した会場

2.2.3.8 競技の行われる時間帯

A氏の聖者生誕祭におけるナッブートの競技会は、祭りの開催される 3 日間ともに行われ、通常 17 時～19 時頃までと 21 時以降の二度に分けて競技会が行われる。19 時頃に一度解散になると、その後多くの実修者達は、N氏の自宅にて、夕食を振舞われ、またお茶やタバコで接待を受けるのである[42)]。

夕食を振舞った後親方 N氏は自宅の裏で、夜更けまでナッブートを行なう。この競技会は、もちろんA氏の聖者生誕祭の一部であり、A氏への奉納の意味があるだろう。しかしながら一方で夕刻の競技に比べて真剣勝負を行う場という意味合いが非常に強いと思われる。実修者の言説では、夕刻ではなく、夜半に行なわれるナッブートに

より多くの名手たちが集まるといわれる。

つまり、夕刻に行なわれる競技会は、ある意味社交の意味合いが強いと思われる。多くの参詣者に競技を楽しんでもらうために、先述したように競技時間にある程度の制約を設けて行なわれる。しかし夜半に行なわれる競技会は時間的な余裕があり、心ゆくまで競技が行えるということである。したがって、実際に心から競技ができるのは 21 時以降と言う事となるため、この時間帯には腕に覚えのある人間達が集まってくるのである。

2.2.3.9 伴奏の音楽

ナッブートの競技は楽団の生演奏に合わせて行なわれる。楽団は太鼓と管楽器の構成からなり通常 4 人ないし 5 人である。彼らはナッブートの競技の場のみに登場するのではない。結婚式やその他の祝い事に呼ばれる伴奏の専門家として生計を立てており、上エジプト地方にはこの手の楽団が多く存在する。A 氏の聖者生誕祭の場合にはナッブートの競技のためにN氏が楽団を招聘する。依頼は祭りの約一週間前に電話で行なわれ、楽団への謝金は 400～500 ポンドで、一括してリーダーに払われる。クルナ村にこの種の専門家がいないため、近隣のケナーのオゴースや上エジプトの村々の専門家に演奏を依頼をする。以下に参与観察において楽団が演奏していた伴奏の一部を楽譜において表現する（**図 063-064**）。**図 063** はナッブート中に用いられる音楽の中でも、代表的な 4 つのテーマの主旋律である。これらの主旋律を基本型にして演奏者達の即興演奏が繰り返される。実際には，副旋律や、打楽器、手拍子なども含まれ、複雑な音楽となる。また**図 064** はそのテーマを用いて実際にどのように演奏されていたのかの実例を抜粋して示す。尚、図に示すように、基本となる主旋律が繰り返されながらテーマが移行していく。本楽譜作成過程においては、原曲からできるだけ多くの音を取り出したが、打楽器等は含まれていない。本譜の作成には橋口敬子氏にご尽力いただいた。

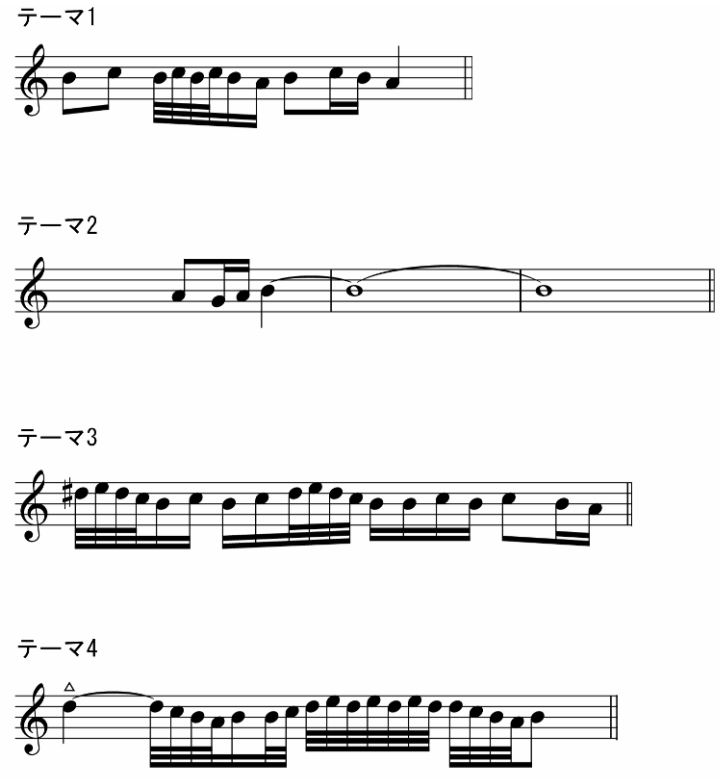


図 063 ナッブートの伴奏音楽（テーマ）

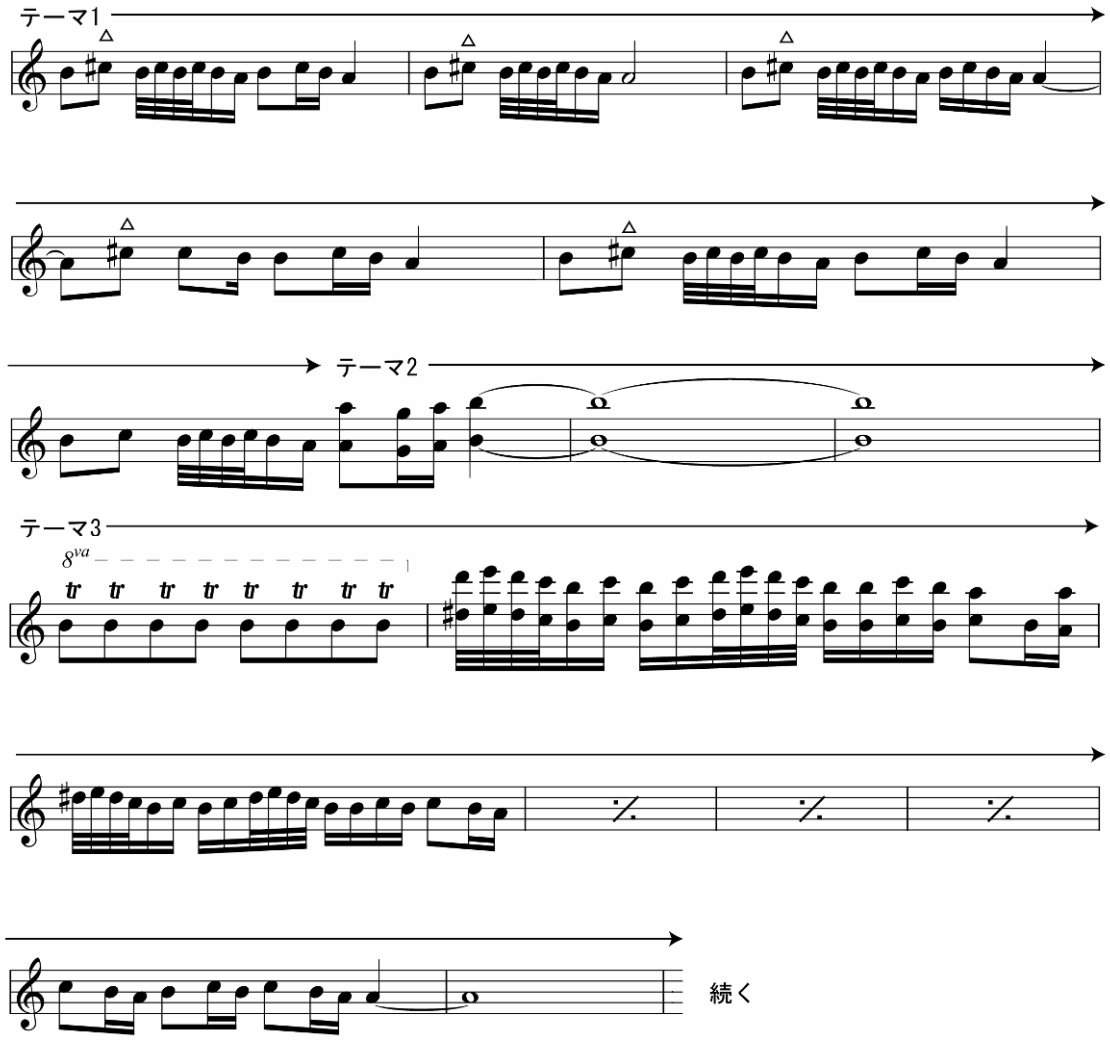


図 064 ナッブートの伴奏音楽（実例）

2.3 身体文化の見地から見るナッブート

2.3.1 攻撃箇所

ナッブートには相手にダメージを与えるための基本攻撃部位が想定されている。これは頭部からつま先まで全身に 32 箇所の人体の弱点を見つけ出し、この 32 箇所をめぐり、攻撃、および防御が展開するのである。これら 32 箇所の攻撃ポイントは全て“バーブ”(アラビア語で「門」の意味）と呼ばれる。個々の攻撃箇所はバーブ１、バーブ２、バーブ３、バーブ４…という名称で呼ばれており、その部位の特徴から名称が与えられたりはしていない。この身体部位をバーブと呼ぶのはナッブートの競技に特有の言葉使いとなる。インフォーマント曰く「たとえば誰かの家に来た時、どこから入れるか。

バーブとはその言葉の示すとおり、内側に入れる場所を意味し、体の内側に進入できる箇所、つまり急所を意味している。」との事である。具体的にはバーブは正面から見た箇所と後ろから見た場合の箇所に点在している。またナッブートの攻撃は「打」のみで「突」は存在しない。したがって対戦相手の「打」の攻撃に対しての特有の効果的な防御姿勢や技の形が要求され、実修されるなかで形成されてきている。したがって、ナッブートとはバーブを巡る「打」の攻防戦と言えるのである。以下に全身のバーブ箇所を紹介する。

正面からの攻撃箇所(1)～(22)

(1)頭頂部(2)右頬(3)左頬(4)両目(5)鼻(6)口（歯）(7)右肘(8)左肘(9)右肩(10)左肩(11)胸部(12)右腋窩(13 左腋窩(14)右腰部(15)左腰部(16)急所(17)右大腿部(18)左大腿部(19)右膝(20)左膝(21)右つま先(22)左つま先

後背部の攻撃箇所(23)～(32)

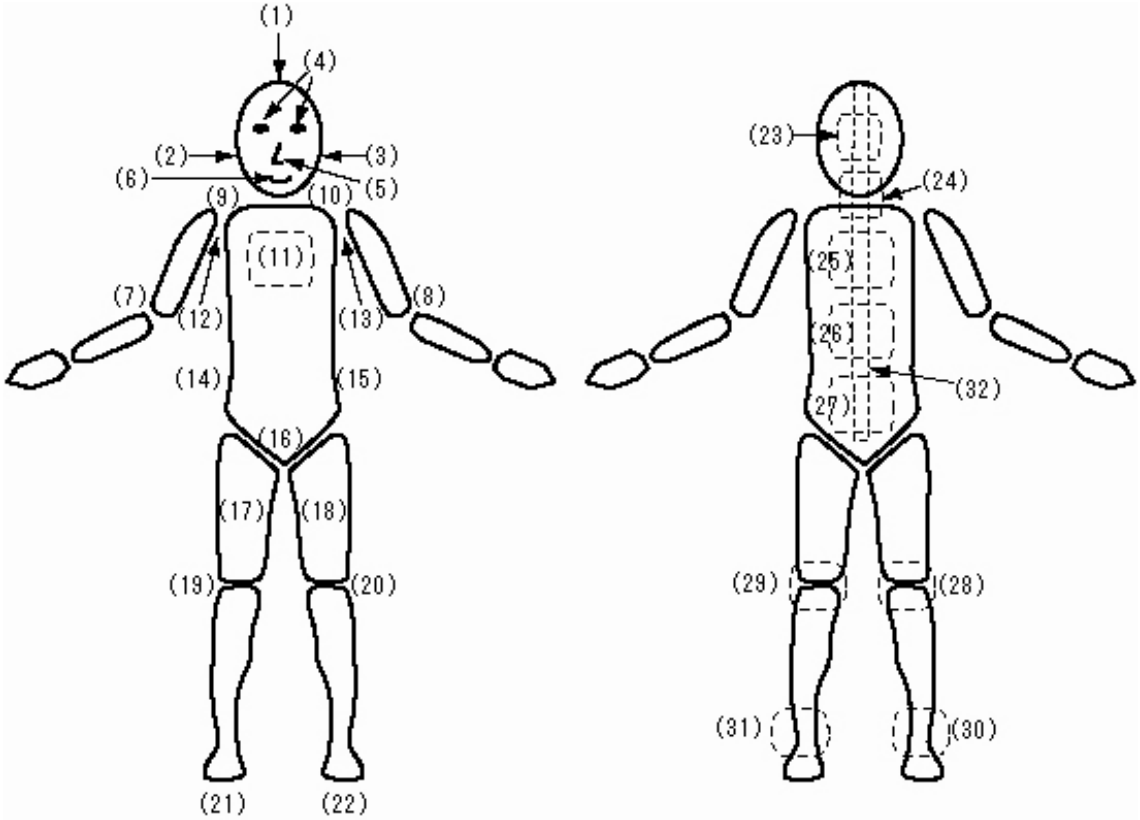
(23)後頭部(24)頸部(25)背部(26)腰部(27)臀部(28)右膝窩(29)左膝窩(30)右踝からアキレス腱にかけて(31)左踝からアキレス腱にかけて(32)背面の頭頂部から腰にかけて

以上正面からの攻撃箇所 22 箇所、後背部の攻撃箇所 10 箇所、合計 32 箇所の部位がナッブートにおける攻撃・防御ポイント（バーブ）である。競技者は常にこの部位の意識をしながら、攻撃、および防御を行うのである（**図 065**）。

ナッブートの競技の長い歴史の中で育まれた知識であるがゆえに、バーブの概念を生み出したバックグラウンド等詳細についてはいまだわからないところが多く、このバーブが当該地域の伝統的な医学の知識等に基づいているかどうかなどは不明である。

ナッブートという競技はバーブの攻撃・防御が基本となり、競技が展開されるが、競技者は常に特に相手への最も大きなダメージを与えられるバーブを意識しながら攻撃・防御を行う。したがって致命傷を与えられる頭部付近への攻撃・防御が最も意識され、その次に、体の正中線を中心とした箇所（背中（特に腰））が重要視されており、これらの部位が最優先箇所となる。インフォーマントの語りでも「下肢などは打ち込まれた場合、もちろん痛いが、致命傷となる場所ではない。したがって我々は下肢などよりも致命傷を与えられる箇所への攻撃を常に意識し攻撃し、また防御を行っているのだ。」という発言がある。

またインフォーマントの語りでは 32 箇所のバーブに関する知識はナッブートを実修している上エジプト地方の、特にナッブート競技者のみに共有される知識との事である。当然下エジプトの人々はこの知識を持っていないという。インフォーマントN氏は「だから彼ら（下エジプトの人々）は、上エジプトからナッブートが伝わっても、ナッブートをうまく理解できず、競技がうまくないのだ。」と語る。バーブという明確な攻撃・防御ポイントが存在し、それを巡る攻防が、暗黙の了解の下に展開されるからこそ、ナッブートの競技は成立しているということになろう。



(1) 頭頂部
(2) 右頬
(3) 左頬
(4) 両目
(5) 鼻
(6) 口(歯)
(7) 右肘
(8) 左肘
(9) 右肩
(10) 左肩
(11) 胸部
(12) 右腋窩
(13) 左腋窩
(14) 右腰部
(15) 左腰部
(16) 急所
(17) 右太腿部
(18) 左太腿部
(19) 右膝
(20) 左膝
(21) 右つま先
(22) 左つま先
(23) 後頭部
(24) 頸部
(25) 背部
(26) 腰部
(27) 臀部
(28) 右膝窩
(29) 左膝窩
(30) 右踝からアキレス腱にかけて
(31) 左踝からアキレス腱にかけて
(32) 背面の頭頂部から腰にかけて

図 065 攻撃箇所図

2.3.2 攻撃・防御の型・技について

ナッブートの攻防は基本的に32箇所のバーブを巡るものである。ナッブートの攻撃は大きく分けて、次の3つの箇所に分けられよう。

(1)肩よりも上の部分への攻撃（バーブ1～6,23,24）

(2)肩より下腰より上への攻撃（バーブ7～16,25～27）

(3)下肢への攻撃（17～22,28～32）

また、攻防のスタイルは、

(1)立ったままのもの（立位）

(2)座ったままのもの（しゃがみ位）**（図 066）**

の2種類に分かれる。立ったままの人間がしゃがみ位の姿勢の競技者を攻撃するのは、稀である。

図 066 しゃがみ位での攻防

以下に筆者がナッブートの競技会の中で採取した技法の詳細を紹介する。

2.3.3 ナッブートの握り方・構え

ナッブートには片手で扱う場合と、両手で扱う場合の二通りの握り方が存在する。片手で握る場合は実修者の利き腕で、両手で握る場合は、利き腕を上方に、添え手を下方に位置させる。片手で扱う場合握りの位置は、いわゆるグリップエンドに小指がかかる程度の場所を握る**（図 067）**。両手の場合は、利き手をグリップエンドから30センチ程度の場所、添え手をグリップエンドに位置させる。両手で扱う場合はちょうど日本の剣道の握りに近い形がとられる。握り方は五本の全ての指に力を均等に入れる事を基本とする。剣道のよ

うに人差し指や親指を軽く添える程度にはしない。なぜなら、そこを打ち込まれた場合骨折等が起こりやすい弱点となってしまうからである。ナッブートの攻防は、ラーシュ、ムサーラファという導入部を経て開始されるため、開始時には剣道で言うところの上段（肘が肩部よりも上に上がっている状態）に位置する場合が多い。したがって、これらの所作の基本姿勢は上段の構えといえるのかも知れない。

剣先の高さは、ラーシュに関しては回転動作であるため一定しない。ムサーラファに関しては両手を伸ばした箇所でナッブートが 45 度ほどの角度にあるようになる。

図 067 ナッブートの握り方

2.3.4 攻撃と防御の基準

ナッブートの攻防は先述したように全てバーブを巡って行われる。バーブはナッブートにおける人体の弱点箇所であり、防御に関してはこの箇所を守る事が基準になる。ナッブートにおいて防御の事を、“ゲファルトバーブ”と呼ぶ。これは「バーブ（門）を閉める」という意味の言葉であり、片手、両手の所作に関わらず、対戦相手からの攻撃に対する所作の事をさす。防御時には相手の体の動きを見ていてはいけない。これは対戦者が必ずしも予測どおりの動きをし

ない事が多い場合、また攻防がすばやく展開する事による。競技者は常に対戦者のナッブートの剣先に常に集中し、剣先の動きから、相手が次にどのような攻撃を仕掛けてくるのかを予測し、行動する事が重要なのである。

実修者への聞き取り、および参与観察において確認すると、基本的に防御法には 14 の種類ある事が確認された。

2.3.4.1 頭部に対する防御法

競技者が両手でナッブートを持ち、相手からのちょうど剣道における上段の構えからの正面打ちに対応するような所作である。頭部は最も致命傷を負う可能性のある箇所であるため、両手によってナッブートの両端に近い場所をしっかりと持ち、相手の強打に備えるのである。もっとも、現在競技会で体への打ち合いが行われないため、これほどの備えが必要かといえば、実際のところ必要ではないかもしれない。しかし寸止めではあるが、常にバーブを巡る緊迫した駆け引きの中に展開するナッブートにおいては頭部の防御は最重要課題のひとつであり、ここをうまく防御できないことはその競技者の技量のないことを証明することに繋がる。この防御の場合は利き腕も、**図 068** のように、小指が体の内側に向くように位置され、強い衝撃にも耐えられるようにするのである。

図 068 両手による防御の握り方

またその場合は、**図 069** のように、肘を伸ばす。実修者の話では、肘の伸展は非常に重要であり、もし肘が曲がっていると、対戦相手の強い、そして突然の攻撃に耐えられず、相手の剣先が頭部に到達

してしまうとの事である。

図 069 両手による防御の姿勢

2.3.4.2 立位での攻撃・防御

図 070 立位での頭部に対する攻撃、防御

肘を伸ばし、もし予想以上のスピードや力で相手の剣先が振り下ろされても、頭頂部を防御できるようにする。

図 071 立位での頭頂部、頚部肩に対する攻撃、防御

頭頂部と同様に、顔部や頚部などは、攻撃された場合致命傷を負う可能性が高い箇所であるために、両腕の伸展が防御は非常に重要で、効果的である。

図 072 立位での肩部、肘部に対する攻撃、防御

肩へのダメージは、致命傷にならずとも、自らの攻撃能力を失う事を意味するため非常に重要な意味を持つ。したがって、この部位を巡る攻防も非常に重要となる。

図 073 立位での肩部、肘部、腋窩、腰部へ攻撃、防御 1

自らがナッブートのグリップエンドを持ち攻撃態勢にある場合、もしくはラーシュなどの動作中に攻撃を受けた場合は、両手を広げずにそのままの形で防御を行う。その場合は状況に応じて、両手を密着させたスタイルや少し握りの間隔を広げたようにナッブートを握ったりと臨機応変に防御がなされる。

図 074 立位での肩部、肘部、腋窩、腰部へ攻撃、防御 2

図 075 立位での腰部、大腿部、膝、つま先への攻撃、防御 1

立位での腰部、大腿部、膝、つま先への攻撃に対する防御が行われる場合、ナッブートの先端と地面との間に注意が払われる。

図 076 立位での腰部、大腿部、膝、つま先への攻撃、防御 2

地面と先端の間を攻撃側がすり抜けた場合、防御側はバーブを自由に攻撃される事を意味するため図 075、076 のように防御側はナッブートの先端を地面に突きたて、攻撃に対してバーブを閉じるの

である。

図 077 立位での顔（頬部、目、鼻、口）、胸部、
急所への攻撃、防御

正面からの正中線への攻撃を受けた場合、致命傷に至る可能性が高いため、両手で防御が行われる場合が多い。

図 078　実戦での防御（立位）

図 079 立位での肩越しからの背面への攻撃、防御

正面への攻撃から背面への連絡技も試合の流れの中では往々にしてあるため、競技者は、図 070-072 の防御姿勢から、相手の剣の動きに合わせて、背面へのケアに移動する場合もある。

図 080 立位での背面への攻撃、防御

背面部への攻撃も、頭頂部、頸部、および正中線上への攻撃は大きなダメージに至る可能性があるため注意される。特にラーシュの動作の流れの中からの背面部への攻撃が多いため、競技者は**図 081** のように、ナッブートを正中線に沿うように立てに伸ばし、後背部の防御を行うのである。

図 081 実戦での防御（後背部）

図 082 立位でのつま先への攻撃、防御

つま先の攻撃に対しては、ナッブートの先端を地面に突きつけて防御する場合と、跳躍して相手の攻撃を回避する二通りがある。

2.3.4.3 しゃがみ位での攻撃・防御

しゃがみ位における攻防も基本的には、立位の攻防と同じ基準で行われる。したがって、頭頂部、頸部、ならびに正面、後背部の正中線を中心に、攻撃・防御が展開されるのである。

図 083 しゃがみ位での正面への攻撃、防御

図 084 しゃがみ位での肩部、肘部に対する攻撃、防御

図 085 しゃがみ位での肩部、肘部、腋窩、腰部へ攻撃、防御

図 086 しゃがみ位での顔（頬部、目、鼻、口）、胸部、
急所への攻撃、防御

図 087 実戦での防御（しゃがみ位）

図 088 背面部への攻撃防御

図 089 しゃがみ位での背面部への攻撃、防御

攻撃の方法は、上段、中断、下段への攻撃を競技者自らが、当意即妙に考える事が基本であり、言語化された決まった攻撃方法は存在しないという。N氏曰く「電話や車を人が発明したように、競技者各々が考えて、技を考案して、攻撃は行なうもの。32個の基本攻撃箇所を巡る攻撃・防御を覚えたら、その後は自分で応用させて攻撃の仕方を考えていく。」との事である。

2.3.4.4 実戦での攻撃方法例

接近した状態で、相手の隙を見つけて攻撃する事は容易な事ではない。したがって、試合の中でさまざまな駆け引きが行われ、その中から勝敗を分けるような攻撃が行われるのである。以下に実践の中で筆者が確認した攻撃のスタイルを報告する。

2.3.4.4.1 上段への攻撃例 回転上段打ち

図 090 回転上段打ち(1/4)

攻撃側の選手は、中段の構えほどの高さからナッブートを上段の構えほどの高さに振りかぶる。防御側の選手は、相手の頭頂部や頸部への攻撃に備えて防御姿勢をとり、攻撃に備える。

図 091 回転上段打ち(2/4)

攻撃側の選手は、打ち付けると見せかけて、相手に対して回転を

しながら一度相手に背を向ける姿勢にすばやく移行する。この動きに虚を突かれた防御側の選手は防御姿勢を緩めてしまう場合がある。この場合、攻撃側の選手は一旦相手の選手を見切ってしまうため、自らの背面部の正中線はしっかり防御する事が要求される。

図 092 回転上段打ち(3/4)

一回転を終えた攻撃側の選手はすばやく再び、相手の防御体制を確認する。

図 093 回転上段打ち(4/4)

頭部を中心とした箇所にナッブートをすばやく移動する。

2.3.4.4.2 下肢への攻撃例 地面をたたいて、腰への攻撃

図 094 地面をたたいて、腰への攻撃(1/2)

図 095 地面をたたいて、腰への攻撃(2/2)

2.3.5 勝負の駆け引き

試合はラアサに始まり、ムサーラファの前までを第一段階、ムサーラファ以降を第二段階として考える場合、ラアサからラーシュそして試合の第一段階は、再会をもしくは、出会いをお互い喜びながら、ナッブートの競技を楽しむ感が見られる。その後、ムサーラファに移行し真剣勝負が展開去れるわけであるが、この真剣勝負の勝敗を左右する要素が第一段階の中にあると考える。競技者たちは第一段階をレクリエーション的な文脈で捉えると同時に、“様子見”として利用しているように考えられる。久しぶりに出会った競技者の対しては、先回の対戦からの上達具合やその調子を、初めて対戦する相手に対しては、どのくらいの腕前の持ち主であるのかを、この時間を使って情報収集するのである。第一段階で得られた情報をもとに攻撃や防御のプランを練り、勝負に生かしていると考えられるのである。

2.3.6 流派・スタイルについて

ナッブートの競技スタイルを考察する場合、流派の存在や地域による競技スタイルの違いを確認する必要があろう。上エジプト地方のさまざまな地域からA氏の聖者生誕祭に集まった人々に聞き取りを行ない、また競技会にて観察を行った結果、都市や地域による流派の違い、およびスタイルの独自性は確認できなかった。

したがって、ナッブートの競技は上エジプト地方という大きなひとくくりの中で、共通の認識を持ち、同じ競技スタイルで行われるものといえる。流派の存在に関しては、先行研究においても赤堀がすでにその存在を否定している（赤堀 1998: 565)。

2.3.6.1 名人達の存在

流派やスタイルの違いは確認できないが、町、村などのそれぞれの地域には、それぞれ有名な競技者（達人）が存在する。たとえばクルナ村にも 10 人名ほどの達人が在住している。聖者生誕祭の競技会では、各地域からそれぞれ達人たちが参集する。したがって競技会は、競技に参加する楽しみと同時に、各地域の達人達の戦いの場でもある。彼らは各々の個人の名誉と各地域の代表としての誇りを胸に戦うのである。したがって、達人達の対戦は競技会でのひとつの呼び物になるのである。

2.4 女性の参加

ナッブートの競技は男性だけで行われ女性は参加しない。これは

ナッブートが行われるイスラームの文化文脈に照らし合わせて考えればその理解は決して難しいものではないだろう。

しかしながら、その競技を観覧する事は、禁じられていないようである。たとえば、聖者生誕祭の折に人垣に入って観覧する事は容認されている。しかしながらその数は多くない。筆者の参与観察においても極稀に成人の女性の姿を、人垣の中に観察する事ができた（図 096）。

図 096 女性の見物者

2.5 ナッブートの実施状況

2.5.1 2006 年 A 氏の聖者生誕祭におけるナッブートの実施状況

2006 年の生誕祭の初日にあたる 9 月 15 日は、夕刻に例年競技会が行なわれる広場の一角で競技が実施されなかった。馬の競演会場北側の駐車場にて、小規模な競技が行われるのみであった。ちなみにこの場所には競技会の中心人物の N 氏の姿は見られなかった。ここでの競技は実に小規模なものであって、楽団による伴奏は確認できたが参加者、見物人を合わせても 20～30 人ほどの規模のものであった（図 097）。

図 097 ナッブート実修風景 1

ここでの競技も通常の競技と同じく 19 時頃に解散となった。後にN氏に事の仔細を聞いてみると、生誕祭の初日は、N氏本人の体調が非常に悪く、ちょうど夕刻の時間帯に病院に診察に行っていたとの事である。親方である彼が不在であれば、当然競技会は開けないとの事で、通常の場所での競技会は行わなかったとの事であった。ちなみにその旨は競技参加者達は了解してくれていたとの事である。また当然の事ながら、馬の競演会場の北側で行われた競技については、N氏は報告を受け知っていたとの事である。(図 098)。

図 098 ナッブート実修風景 2

初日は、夜半を迎えるとN氏宅のザーウィヤを中心としたスペースで、お茶等が振舞われ、場を盛り上げるために楽団が演奏を行われた。ナッブートの競技は彼の新しく作製した競技スペースにて行

われた。この日は初日という事もあって、クルナ村を中心とした近隣に在住の人間のみが参集し、競技自体は規模の小さなものであり、長いすで仕切られた競技スペースが作られているものの、あまり多くの競技は行われず、むしろ社交の場としての雰囲気を楽しむような傾向が強かったように思われる。

生誕祭二日目は、夕刻より、広場東側の例年の競技スペースにてナッブートの競技会が行われた。昨日広場の北側にて行なわれたものよりも多くの参加者、見学者が人垣を創り競技を行った。二日目はもちろん親方であるN氏も登場している。この夕刻に行われたナッブートには 100 名～200 名ほどの人間が参集していた。

この日は夜半の部も多くの人が集まり、N氏が 21 時頃に開始を告げる事によって競技が始まった。この日も夕刻の競技後多くの人間がN氏宅のザーウィヤに参集し、各々食事をとって、お茶を飲み、タバコを燻らせながら、旧交を温めていた。またザーウィヤの前の空間（道辻）では、21 時の競技会前に集まった人々によってナッブートが楽しまれていた。二日目の夜半の部は、夕刻の部と同様に、多くの人々が参集し約 100 名～150 名ほどの人間が集まった。楽団の演奏をバックにナッブートの競技、および舞が行なわれ、それは深夜にまで及んだ。ナッブートの競技会は長時間に渡って行われるので、多くの人の入れ替わりが見られる。参加者はみな自分の都合のよい時間に競技に訪れ、試合を楽しみ、そして帰っていくのである。

最終日にあたる三日目も、夕刻に広場にて競技会が行われた。この日は生誕祭のクライマックスに当たる日でもあり、競技が始まる前からナッブートの始まりを待つ人々さえおり、この日は 400 人以上の人々が参加者、見物人として集まった。競技者を囲む人垣も徐々に大きくなり、18 時頃にはすでに 4 重 5 重にも膨れ上がっていった。

図 099 人垣

この日は、上エジプトの中でも比較的遠いエリアであるエスナや、エドフ、アスワン、ソハーグ等上エジプトの各地から多くの人々が集まった。また最終日には各地域の名士たちもナッブートの競技会を訪れ、競技を見物し、参加していた。この日もやはり夕刻の部はやはり 19 時頃に一旦解散となった（図 099-101）。

図 100　競技会での再会風景

図 101 楽団の演奏風景 1

その後競技者達の多くにはＮ氏宅へ移動の後にＮ氏宅のザーウィヤにて夕食が振舞われた。夕食のメニューはモロヘイヤのスープ、そら豆のトマト煮、牛肉、米、パンなどとなっており、非常に豪華なもてなしであった。夕食に集まった人々は、次々にザーウィヤの奥の食事スペースに誘われ、食事を取る。その後ザーウィヤ内、もしくは屋外に設置された長いすに座り、茶を振舞われ、水タバコを吸いながら歓談するのである（図 102-104）。

図 102 食事風景 1

図 103 ザーウィヤ内

図 104 ザーウィヤ外歓談風景

最終日のナッブート競技会の夜半の部は、21 時頃より始められた。この日は会場いっぱいの人間である。夕刻の部で競技見物していただけの人々はここには現れずに、本当の競技者のみが集まっているようであった。それでも 300 人を越えるであろう人々が参集した。この日の競技会は、初日・二日目と比べ、やはりレベルが高く、さまざまな土地から集まった達人たちによって熱戦が繰り広げられた。その日の事件は突如起こった。一人の競技者が興奮し、競技スペース内に割って入り、彼を止めようとする人間、また煽る人間と場内は騒然とし、伴奏も止まり、競技会場全体を巻き込んだ混乱状態に陥ってしまった。N 氏を中心とする主催者側の必死のとりなしもなかなか功を奏せずに、混乱は続いた。20 分ほど過ぎ少々混乱に収ま

りが見え始めた頃、N氏は楽団に伴奏の再開を指示、自らそれに合わせてリズムをとり、ダンスを始め、ナッブートを再開しようとした。しかしながら、その行為は先ほどの興奮した男性によって制止されてしまった。また会場は元の混乱に戻ってしまったのである。結局興奮した男性は競技スペースから隔離される事になり、事態の収拾は図られ競技会が再開される事となった。しかし、一旦冷めてしまった空気は一向に戻る気配が無くなり、競技会の途中で帰る人間達も多くなってしまった。結局この日は、午前0時頃前に、N氏が登場し、簡単にナッブートを行い終結を宣言をし、競技会は一応の終結をみることになってしまった。

競技会に訪れていた人々は、遠くの地域から来た人々は車に分乗し、またオートバイで、近隣の人々は徒歩や自転車で家路についた。人々の大半が帰路についた後、本日クルナ村に宿泊する人々や、この村の人々は会場に残り、楽団の伴奏にあわせてダンスなどを楽しんだが、その後ナッブートの競技が本格的に行なわれる事はなかった。

図 105 ナッブート競技会風景 1

2.5.2 上エジプト地方の聖者生誕祭におけるナッブート比較例(1) アブ・アル＝ハッジャージの聖者生誕祭

アブ・アル＝ハッジャージの聖者生誕祭は毎年シャーバーン月の13～15日までの3日間L市の東岸にあるモスクを中心とした地域で行なわれる。この生誕祭においても、夕刻の部、夜半の部に分かれてナッブートが行われる。

初日は 2006 年 9 月 4 日 17 時頃～19 時頃まで、競技会が彼のモスク前で行なわれた（図 106）。

図 106 ナッブート競技会風景 2

モスク前に楽団が現れ伴奏のための演奏が始まり、その演奏につられるかのように人々が参集し、やはり人垣が円を作るように競技スペースを創出され競技が行なわれた。この生誕祭の特に夕刻の部に関していえば、子供の見学する姿を多く見られた事が特筆に値するであろう。彼ら子供たちは大人達の勝負に参加する事はできない。競技の途中で参加を試みた少年がいたが、優しく排除されていた。参加はできないが、子供達は興味深げに競技の一挙手一投足を見学する。そして、その後彼らは競技スペースの周辺に落ちている木の棒を拾い、競技会の音楽に合わせて、子供同士でナッブートを行い楽しんでいたのである。また大人に伴われ、子供がナッブートを見学しに来る姿も多く見られた（図 107）。

ところで、この会場で伴奏を担当したのは平素アスワンを拠点に活動している 4 人構成の楽団であった。ムズマールバラディと呼ばれる管楽器を担当する I 氏 60 歳をリーダーに、管楽器 3 人、太鼓 1 名の 4 名で演奏を行っている。彼らは毎年この生誕祭に呼ばれているとの事である。祭りの期間中は知人の家を間借りして、当該地に滞在しているとの事である。この楽団は毎年およそ 8 箇所の生誕祭に参加しており、この祭りの後も同市で行なわれる別の聖者生誕祭に参加するという事である。

本生誕祭で行なわれるナッブートの競技会は、初日の夕刻の部のみモスクの前で競技が行われ、その後は市街地に場所を移して競技

が行われる。市街地では例年L市の中心部に位置するEホテル付近の道路上、およびEホテルから西に 300mほどの所に位置するモスクの前の2箇所で競技が行なわれている。ところが、本年は町全体が大工事中であったためEホテル付近での競技は不可能であった。そのため、もう一箇所の競技スペースのみで競技が行われた。初日の夜半の部は21時頃から始まり、翌日26時頃まで競技が行なわれ、また2日目は17時頃から19時頃、および21時頃から26時頃まで同場所にて競技が行われた（図 108）。

図 107 ナッブート競技会風景 3

初日の夜半の部においてはおおよそ300名以上の人間が人垣を作り、競技を見守りその中で 30 名前後の人間が競技者として競技に参加していた[43]。

図 108 ナッブート競技会風景 4

本競技会では 2 日目の夕刻の部において、試合に熱くなった競技者が対戦相手の身体を強く打ち込むというアクシデントが発生した。この際打ち込まれた対戦相手だけでなく、彼の友人や観客達をも巻き込む大混乱に発展した。主催者を中心とする人々によって現状復帰が試みられるも、結局競技場全体の混乱は収まらず、親方によって、19 時を待たずしてその場は解散となる事態が発生した。

この会場は車の往来の激しい場所で行われる競技会である。競技はいつも親方の号令によって終了が告げられる。その時も、親方の号令によって、伴奏が止められ散会された。音楽の終了によって競技会の作り上げていた競技空間は一瞬にして消滅する。それまで、その場は何よりもナッブート競技にその優先権が与えられ維持されていたが、競技スペースを保証するかのように並んでいた長いすや、それに座りまた取り囲むよう見ていた観客達は、競技が終了するのとともに、道路をふさぐ単なる障害物に帰していた。それまで競技会空間によって引き起こされた渋滞を快く受け入れ、むしろ生誕祭を祝福するため、その横を遠慮気味に往来していた車のドライバーたちは、競技会の終了の途端に、クラクションをけたたましく鳴らしながら、彼らを邪魔者を見るかのように横目で見ながら、競技空間であった道路を通り抜けて行くのである。

2.5.3 上エジプト地方の聖者生誕祭におけるナッブート比較例(2)

シェイク・ターヤの聖者生誕祭

聖者シェイク・ターヤは 500 年ほど前にクルナ村に来村し、この

村に住み着き、この地でなくなった人物といわれる。インフォーマントの語りでは彼はアラビア半島からエジプトに来た人物で、預言者ムハンマドの子ハッサンがその祖に当たる人物と言い伝えられる。

彼はイスラームの教えを説くために人生を捧げた人間との事である。彼は聖者の必要条件である優れた人格者であり、誰からも愛される存在であったと語り継がれる。彼の聖者生誕祭は毎年シャーバーン月 19 日、20 日に行われる。2006 年の生誕祭は 9 月 12 日、13 日にかけて行われた。彼の生誕祭においても生誕祭の構成要素として見られる行進や、馬の競演、ナッブートの競技会、ズィクル等が行なわれた。本生誕祭においてもやはり、ナッブートは夕刻の部と夜半の部に分けて競技が行われる。初日の 17 時半頃から 18 時半頃まで夕刻に一時間ほどモスクの前でナッブートの競技会が行われた（図 109-112）。

図 109 楽団の演奏風景 2

図 110 モスク前広場

図 111 ナッブート実修風景 3

図 112 ナッブート風景 4

この聖者生誕祭はその祭り自体も非常に小さな規模のものであるが、ここで行われる競技会も規模の小さなものといえる。競技会を創出する人垣も男性 20 名足らずで作られるものであった。しかもその中で実際に競技に参加していたのは 10 名弱であった。この生誕祭、競技会に参加していたのは、このモスクの付近在住の人々に限られる。この競技会の特徴を挙げるならば、競技会を見学する子供の数が多かった点である（図 113）。

図 113 子供のナッブート風景

この競技会を見学していた子供達は競技参加者よりも多く、30 名以上はいたと思われる。競技会を見学していた子供達の多くは、周辺に落ちている棒を手に持ち、競技会で演奏される音楽に合わせてナッブートの真似事を行っていた。また競技スペースは休憩時間に

は子供達に解放され、子供が真剣にナッブートの手順を確認するかのように行なっていた事が印象的であった。2度の休憩を挟んで3回の競技が行われた後、競技は終了。参加者はN氏の家に移動。ザーウィヤにて食事が振舞われた。食事にはモロヘイヤのスープ、ソラマメのトマトスープ、ご飯、牛肉、パンというメニューであった。食事の後、ザーウィヤでお茶が振舞われ、また道辻に出された長いすで、しばし参加者たちは歓談するのである（図 114）。

図 114 食事風景 2

初日はその後楽団による音楽の演奏があり終了し、ナッブートの競技は行われなかった。競技会は行われなかったが、一部の人々は道辻でナッブートを楽しんでいた。

二日目には夕刻 17 時半頃に行進が始まり、馬を先頭に楽団が広場に現れた。行進は廟の中に入りそこで終了した（この祭りにおいては、なぜ二日目に行進が行われたのかについては不明である）。その後行進に参加した馬は競演会場に移動し、マルマーハが開始され、ナッブートの競技会もそれに呼応するようなタイミングで開始された。本生誕祭の馬の競演には、約 300m の直線コースを設定され、ザーンと呼ばれる 3m ほどの棒を片手に騎手は早駆けや、ダンス、二頭での息を合わせての走行などが行われた。騎手は 10 歳程度の子供から大人まで年齢の大きな幅が見られた。この競演に参加する人々は、その競演に際してナッブートの競技者と同様、伴奏を担当する楽団に感謝の意味をこめたチップを渡す。

二日目の夕刻の部のナッブート競技会には、初日よりも多く約 50 名ほどが人垣を造り、そのうち 15 名程度の人々が競技へ参加して

いた（図 115）。

図 115 ナッブート実修風景 5

親方のN氏が多くの人が参加できるように配慮しながら競技は進行した。この生誕祭の競技会もやはり、19時頃に一旦解散となった。夕食、休憩のためにN氏の家に移動。夕食後ザーウィヤ前では楽団が演奏し、お茶が振舞われ、シーシャが現れ、紙タバコも登場し、30脚ほど並べられた4人掛けの長いすがいっぱいとなり、参加者たちはナッブート片手に、上機嫌でダンスを行っていた。腰を振りながらナッブートを片手に踊る者、2人で息を合わせて即興でダンスを行うものとさまざまに参加者はその場を楽しんでいた。

この日の夜半の部は始まりが遅く 23 時を過ぎる頃から時折ナッブートの競技も行われるようになっていった。それまでも時折競技らしきものが行われていたが、真剣な競技ではなく全くの余興に近いものであった。25時を過ぎた頃、宴は最高潮に達した。真剣な競技が始められた頃事件は起きたのであった。宵の口から口論をしていた青年達が口論の挙句、喧嘩に発展し、ナッブートで相手を殴打し、頭部に怪我を負わせ、手を骨折させてしまったのである。宴の場は激しく揺れ、長いすに座り、思い思いに語らい、踊っていた人々に緊張感が走り、その場にいた人々は加害者の若者を中心に大きな渦になっていった。彼の暴挙に、参加者一同は極度の興奮状態に陥り、幾人かはナッブートで彼に制裁を与えようとし、その人々を数人の人物が押さえつけ、なだめるといったような光景が展開し、その場は大混乱となった。事態を収集させるために、加害者の若者は近くの家の中に隔離された。彼がその場から消えた後も、その場の

興奮状態は一向に収まらずに、みな思い思いに発言をし彼の処遇についての意見交換が行なわれた。興奮状態のN氏に代わり、前の親方である彼の父親が現れ、しばし皆の話を聞き、彼の判断の下でその日の宴は終了となった。25時半頃の事であった。

2.6 子供のナッブート教育

ナッブートの競技は学校など公の教育機関や、特定の場所での教育の一環として取り入れられる事はない。しかしながら、一方で平素村の中で、特にナッブートに熟達した人間が若者に手ほどきをする事は、定期的ではないが見受けられる[44)]。

クルナ村では男の子は 5～6 歳ぐらいになると聖者生誕祭においてナッブートの見学を始め、また 8 歳頃には子供同士でナッブートを遊びの一部として始め、大人との練習も始める。そして 14 歳を過ぎた頃初めて競技者として聖者生誕祭のナッブートへの参加が認められる。ちなみにインフォーマントのN氏も競技会に 14 歳から参加している。彼は父から手ほどきを受けて非常に上手く、競技会では参加当初から有名な少年であった。ナッブートへの参加は年齢だけでなく、体格・技術的な熟達度などが要求される。それに見合っていなければ、年が足りていても参加は認められない（**図 116**）。

図 116 子供の見学

先ほども述べたが、ナッブートの教育は定期的に行なわれるものでも、学校のような制度が確立した教育システムを持つものでもない。いつでも、自由に行なわれるものである。

たとえば、N氏の場合、友達や知り合いが自宅に来た時に子供達にナッブートの手ほどきを行う。場所は自宅の外の道辻や空き地、

また最近作った自宅裏のナッブート専用の空間である。手ほどきは、子供同士で試合を行わせてアドバイスを行う形式、またN氏と 15 分一本で練習試合を行いアドバイスをおこなうものがある。練習には必ず休憩を挟む。休憩は単なる休みではなく、他の子供の練習を見るという事である。他の子供の練習を見る事によって、自らの競技のイメージトレーニングを行なわせるのである。N氏の場合1回の練習に平均 10 人～20 人ぐらいの子供が参加する（図 117-118）。

図 117 親子の見学

多い時には週に2～3回ほど練習が行なわれる場合もある。ナッブートの習熟度は、実修者の飲み込みの速さによって当然状況は異なり、1ヶ月で体得してしまう子供もいれば、1年、2年たってもなかなか上達しない子供もいるとの事である。N氏の言葉を借りれば、ナッブートの上達には“知性”が必要である。また、ナッブートの上達には良いコーチの存在が必ず必要との事である。したがって、子供が練習する場合、一人では練習させない。必ずうまい大人が手ほどきを行なう環境を創るのである。クルナ村を始め上エジプトでのナッブートの技の伝承の基本には父から息子にという図式が存在する[45]。

図 118 子供の遊び

2.7 練習会

成人の実修者達は、定期的にまとまった形で練習等を行うという事は無いようである。多くの場合は、気が向いた時や、ナッブートを行いたい時に知人と楽しむ形式で行われる。この場合練習というよりも知人同士で楽しむ事が優先のような感じさえする。

しかしながらやはりシャーバーン月になり、聖者生誕祭が近づくと個々人によるナッブートの機会は頻繁になる。

2.8 ナッブートの入手方法　－ナッブートの種類－

L 市東岸には、ナッブートを専門に扱う店がある。店主の A 氏はオゴース在住で現在 32 歳の人物である。彼は L 市まで毎日オゴースから車で通勤している。彼の店は 9 時～15 時まで開店している。イスラームの慣例にしたがって金曜日は休業である（図 119）。

図 119 競技用ナッブート

彼の店で扱われるナッブートは多岐にわたる。ナッブートと一口に言っても、それはいわゆる「杖」全般をさす言葉であり、競技用のナッブートを求める人ばかりが集まる店ではない。つまり実際には杖を扱う店で、競技用のナッブートを扱っているという事になる。ちなみに彼の店では 14 種類の杖を販売していた[46]。ナッブートとして利用される木材の種類に関しては本来の目的が杖であるため、適当な木を杖に適した長さに加工した場合、それら全てはナッブートと呼ばれる事になる。しかしながらエジプトではシューバ、エーナブ、サント、カラザーンなど数種類の木材が材料として利用される場合が多いのである。ちなみに競技用のナッブートに用いられる材は、カラザーン、シューバ、サントであり、特に、聖者生誕祭の折にはカラザーンが用いられる。カラザーンは日本で言うところの竹科の植物であり、軽くて扱いやすく片手で扱える点、またしなやかで耐久性に優れた点がその使用理由として語られる。一方で、シューバやサントは硬質の木材で、非常に重く、競技に使うには危険である。ちなみに全ての種類を含めて一日平均 6 ～10 本くらいのナッブートが販売される。ナッブートの所持数については個人差があり、クルナ村の場合は一人 1～6 本ぐらいである。ちなみに競技用ナッブートは一本 20～25 ポンドぐらいで売られている。競技用ナ

ッブートの特性は、他のものに比べてしなやかで耐久性に優れている事である。ちなみにこの町にナッブートを扱う店はこの店のみである。

店で販売される商品の買出しは彼自身が行なう。この店で売られる商品の多くは、上エジプト地方では手に入らないため、下エジプト地方のカイロやカイロ近郊まで列車で赴き、商品を手に入れてくる。商品として並ぶ多くの木材はエジプトで生産されたものではなく、東南アジア[47]からの輸入材との事である。そのため、輸入材が航路で運ばれ、流通の中心であるカイロ近辺までの買出しが必要となるのである。彼はカイロなどで長い木材をそのまま入手し、地元に持ち帰り、カットや装飾などの加工を行ない販売するのである。

平素の生活で使うナッブートには、その仕上げとして鋲を打ち込み、柄の部分にグリップとして動物の皮をはめ込む。鋲には3種類の色がある。ひとつ50pで販売されており、その場で購入したナッブートに取り付けてくれる。一本に何個つけても構わないため、装飾として多くの鋲を取り付ける人も少なくない（図 120）。

なお競技用に用いられるナッブートに鋲は取り付けない。実修者N氏の言葉では、鋲は装飾であり、試合用のものには必要ないとの事である。あわせて、筆者の参与観察からの考察では金属製の鋲は競技に用いられた場合、ナッブートの殺傷性を増すものと考えられ、使用しないと考えられる。

図 120 3色の鋲

図 121 装飾されたナッブート

柄の部分に取り付けられる動物の皮はグリップの役目を果たす。柄に使用される皮はギルベと呼ばれるもので、牛の尻尾の皮である。A 氏は肉屋にて牛の尾の皮を手にいれる。取り付けは尾の皮をナッブートの柄の部分に差し込む形で取り付ける。差し込んだ後余分な部分はナイフで切り取る。装着には接着剤などは使わず、乾燥における皮の収縮を利用してナッブートに密着させるのである。ちなみに皮はこの店では一個 5 ポンドで販売、装着してくれる。したがって購入者の要求に合わせてナッブート本体の長さの調節、皮の追加、ならびに鋲を打つところまでをオーダーメイドで行なっている。彼らの身にまとうガラベーヤの色、そしてシャーシ（頭に巻く布）の巻き方が彼らのオリジナルファッションであるように、ナッブートのデコレーションも彼らの自己主張の一部といえる（図 121-124）。

図 122 ナッブート加工風景 1

図 123 ナッブート加工風景 2

図 124 ナッブート加工風景 3

店主曰く、ナッブート自体はエジプト全土に見られるが、やはりナッブートの競技は上エジプトの特有のものであるとの事である。

2.9 文化変容したナッブート　―下エジプトのナッブート―

下エジプト地方の都市部の聖者生誕祭においても多くはないが上エジプトと同じスタイルのナッブートが確認できるそうである。たとえばベニ・スエフの聖者生誕祭や、カイロの聖者生誕祭（サイーダ・ザイナブやフセイン）[48] でもナッブートの競技が見られるという証言がある。

しかし同じようにナッブートを使って行われる競技であるが、下エジプトのスタイルは、上エジプトのそれと大きく異なるとも言われる。下エジプトでは、ナッブートの競技は真剣な打ち合いによって展開されるものであり、またカラザーンなどの軽くて扱いやすい材を利用せず、硬質で、重い木材であるシューバが利用される。上エジプトの競技実修者は、下エジプトの人々が実際に打ち込む形式で競技を行う理由として、下エジプトの、特にカイロなどの都会の競技会の場合は、自分の全く知らない、人間関係のない人間と対戦する点を挙げる。つまり、その競技会で対戦相手に怪我をさせてしまっても、その後の生活に全く問題は無い。なぜならスポーツの中の出来事だからと了解されるからである。対戦相手が死に至る場合も考えられるが、なにか問題が発生しそうになった場合は逃げてしまえば、その後誰もわからないのである。したがって下エジプトでナッブートが行われる場合は、怪我などは日常茶飯事で、死に至る

場合もあるという。

20 年程前クルナ村のN氏が大学時代カイロで過ごしていた時の事であるが、彼は下エジプトのナッブートをカイロで体験した。彼の実力を知らない幾人かが彼をナッブートに誘った。もちろんシューバで行われる真剣勝負である。彼らは容赦なくN氏に攻撃してきた。彼らはN氏の実力をまったく知らなかったのである。彼らのうち幾人かは肋骨を折り、また幾人かは顔を殴打され顔の骨、および歯を折ってしまった。

したがってカイロにおけるナッブートの競技は、いわゆる“ストリートファイト”に近いものと言えるであろう。そこでは、競技をおこなうもの同士の人間関係が存在せず、競技の場であった者同士の命を駆けた腕比べとして存在しているのである。

上エジプトのナッブート実修者達の対戦相手のほとんどが、自らの人間関係（家族、親戚、知り合い、友人）の中に位置される人々である。したがって上エジプトにおいてナッブートの競技は非常に濃い人間関係性の中で展開されるという前提があって行われるものである。したがって、下エジプトのようなスタイルは考えられないし、現在の上エジプトではありえないといえよう。

N氏は上エジプトのナッブートを評して次のようなたとえ話をしてくれた。「たとえばクルナ村では老人と対戦する場合、その老人が自分よりも上手くないとわかれば手加減する。ゆっくりと手加減してナッブートをやってあげるのである。もし間違って相手のナッブートが自分にあたったとしても老人の攻撃ならば問題ないから」

彼のたとえ話では、上エジプトのナッブートの競技会も実際の勝ち負けは重要なポイントではあるのだが、それ以前に競技会全体を大きな上エジプトの文化文脈で考え、参加者それぞれが適宜その場の状況の中で最良の身の処し方を考え、行動している様が見てとれるのである。伝統的スポーツの特徴としてブランチャードは、競争よりもパフォーマンスを重要視する事をあげ、むしろエキシビジョンに近い存在である事という（ブランチャード 1995:1-19）。ブランチャードの指摘からすれば、このN氏の話の中には、上エジプトのナッブートには伝統的なスポーツの特徴が見て取れるのである。

インフォーマントの指摘では、元来上エジプトの文化であったナッブートが下エジプトへ流入しその姿の変化を遂げていったとの事である。たとえば、上エジプト人たちが出稼ぎの労働者として、ま

た学業等を修めるためにカイロなど下エジプトの大都市に移住した折に、ナッブートの競技を下エジプトに紹介し、定着させたという。しかし大都市という、上エジプトとは異なる文化文脈の中でナッブートが受容され、異なった形で理解、定着していったと思われる。大都市の希薄な人間関係においては、社会の中で「スポーツを通した社交の場」としてのナッブート競技会の持つ機能は必要とされず、この競技が元来持つ暴力性がクローズアップされ、スリリングなストリートファイトへの文化変容を遂げたといえよう。

同様の変容は近代イングランドのストリート・フットボール[49]でも確認できる。イングランドのストリート・フットボールもその中に暴力性を内包し、商店や公共施設の破壊、死傷者の発生など、さまざまな問題を抱えていた。しかしながらそれが維持できていたのは、地域コミュニティ内での「セルフ・コントロール」が存在していたからである。しかしながら、時代が変わり、産業革命以降の鉄道等の交通網の発達や、都市部における労働者の必要性から多くの人間が、新たにさまざまな地域の中に入る事になり、地域の中の人間関係を大きく変化させた。また鉄道網等の充実は、祭りの日だけ現れフットボールに参加する人間達の存在を可能とし、地域に全く関係ない人間、もしくは関係性が希薄な参加者の急増を後押ししたのである。このような状態では、コミュニティ内で維持されてきた緊密な人間関係によって成り立つ「セルフ・コントロール」は失われる（稲垣 1991: 110-111）。そして、この競技の中だけに発生する刹那的な人間関係は、その後の日常に更新されないために、人々からさらなる暴力性を導き出し、暴動化をも誘発するようになったのである。社会の近代化による伝統スポーツの「セルフ・コントロール」の消失に関しては、瀬戸も岡山県岡山市西大寺観音院における会陽の宝木争奪戦の変容で述べている(Seto 2006:1-8)。ひとつのコミュニティの中で行われていたスポーツがその枠を失い、それによってそのスポーツを支えていたバックグラウンドを失い変質してゆく。本エジプトの事例もエジプトという国が近代化を迎えて、カイロなど都市部への人口の移動がおこり、それによってバックグラウンドを失った上エジプトの文化が、都市部の人間に紹介され、都会という文脈の中で翻訳的適応の後、都市部に生活する人間の解釈の下、実践されてゆく様が非常に明瞭に見て取れる。

2.10　非日常の世界としてのナッブート

上エジプトにおけるナッブートの競技会は、共通の文化文脈の下に成り立ち、行われているからこそ、その競技会を日常と切り離した非日常として扱い、そこで起きた問題などを日常の世界に持ち込まないようにする工夫が見られる。

2005 年の話であるがクルナ村で行われたナッブートの競技会に、ある村から来た男が参加し、クルナ村の若者の頭を打ちつけ怪我をさせた。その場では大きな騒ぎにならなかったようであるが、その後インフォーマントのＮ氏はその若者の村に出向き、その村で行われる聖者生誕祭のナッブートの競技会に参加している。競技では加害者の若者と対戦し、クルナ村の若者がやられたのと全く同じように、その若者の頭を打ち付けてきたそうである。彼はこの村のナッブートを代表する存在であるがゆえに、クルナ村を代表して加害者村に出向き、リベンジを行なってきたのである。

またクルナ村の若者が隣村のＢ村での聖者生誕祭のナッブートに参加し、そこの有力者を打ち付けてしまった事があった。競技の行われた数日後、Ｂ村から多くの人々がクルナ村を訪れた。彼らは有力者を怪我させた若者を非難し、リベンジに来たのである。その時Ｎ氏は彼らに「ナッブートの競技中に起きた事なので今回の一件は問題ない。一緒にナッブートをやればいい。」と言ったそうである。その後Ｂ村から来た人間達は、有力者を打ちつけてしまった若者と共にナッブートの競技を行い、和解し、打ち解けて帰村したとの事である。

この二つの事例は、一見すると、Ｎ氏の自分勝手な解釈と行動に見えなくもない。しかし実は一貫したコンセンサスに支えられたものであると考える。それは、“ナッブートの中で起きた事は日常に持ち込まない。そして、もし問題があるならば、それはナッブート競技の中で解決するべきである”というものであろう。

最初の事例では、ナッブートの中で起きた傷害事件をＮ氏が村の代表として出向き、競技の中でリベンジを行う事で解決を図っている。２例目も、またナッブートの競技の中で起きた出来事を、日常社会の枠の中に持ち込ませずに、またナッブートの競技の中に戻して、解決を図っているのである。

最初の事例で復讐に赴いき、成功したＮ氏に「あなたへのリベンジは怖くないのか」と質問を行った。彼は笑いながら「そんな事考

える必要はないよね？だって、これはナッブートの中の話だよ」と言った。

A 氏の競技会においても、同様の解決方法が見られた。エドフの参加者がケナーの参加者と試合でケナーの参加者を怪我させてしまったのである。ケナーの男は治療のため病院に行かざるを得なかった。その後怪我をしたケナーの参加者の従兄弟が、その怪我をさせてしまったエドフの参加者と対戦し、リベンジしたのである。その試合後エドフの参加者も病院に行ったそうである。

2.11　ナッブート離れ －暴力性とのその現状－

ナッブートの競技会は非常に熱心な参加者たちに支えられ、継続してきているが、実は一方でその実修者は毎年のように減少してきているとのことである。以下にその理由について検証する。

2.11.1 生活スタイルの変化

－西岸の人々の多くがナッブートを行なわない理由－

L 市の西岸に生活する多くの人間が農業を生業としている。しかし、先述したように当該地域は世界有数の遺跡群の中に位置する観光地である。そのため近年は多くの人間がホテル、旅行業、みやげ物店などといった観光業に従事するようになってきたのである。

彼らは早朝に東岸に渡り、働き始め、それは深夜にまで至る。インフォーマントの言葉を借りれば、ナッブートを習得するには個人の十分な時間が必要である。またナッブートは複数人で多くの時間を共有し、のんびりした時間の中で、育まれその技術は醸成されていくものである。たとえば農業従事者は毎日多くの仕事を行わねばならないが、自宅の近くの農地での作業であり、また同じ生業の近所の人々と時間を合わせて休憩をとる事は比較的容易であり、ナッブートの伝統はこのようなライフスタイルの中で醸成されてきた。またインフォーマントのN氏のような学校の教員は、毎日午後の早い時間に仕事を終える事ができ、その後は自由な時間を多く持つ事ができる。彼らのようにまとまった時間を捻出できないとナッブートの習熟は難しいとの事である。そうなると生業と副業を兼ねて毎日忙しく生活を送る現在のこの地域の人々にはナッブートを実修する事は難しい事となる。

2.11.2 若者達の意見

若者達のナッブート離れも顕著である。西岸に在住の若者達の多くはナッブートに対して否定的な意見を持つ、もしくはやはり時間

的な制約が大きくナッブートの競技に参加をしない傾向にある。

たとえば教師をしているＳ氏は「なんでそんな事をしなければならないのか。過去を見ていてもしょうがない。若い人達はコンピュータや新しいさまざまなものをやらねばならない。第一ナッブートの競技に興味がない。」という。また、みやげ物店で働くＤ氏は「サッカーなどのスポーツとは違って面白くない。」とこれも否定的な見解を示す。

一方、ナッブートに肯定的な意見を持つ若者も存在する。Ｅ氏は「ナッブートの競技はやりたいのだけれど、早朝東岸に渡り、6 時から働き出して、19 時過ぎまで仕事が続く。毎日疲れてしまって、ナッブートをやっている時間もない。」という。またＦ氏は「競技を行なう事には興味が無い。危険だから。サッカーなどをやるのは好きだが、ナッブートも見ているだけなら楽しい。」などがその意見の代表的なものとして挙げられるであろう。

Ｆ氏は続けて「ナッブートは危険なものである。喧嘩の時に武器になり、人々は怪我をしてしまう。だから若者はみな持ちたがらないし、聖者生誕祭の時だけやるようになった。…元来ナッブートは野犬（非常に危険）を追い払ったりする時に使われた。そして以前は村に悪い人達が多くいて、自衛のためにこれが必要だった…しかし、現在は警察がしっかりしているからその必要はない。」と述べている。

上記のようにナッブートに否定的な意見、またナッブートに興味があっても、日常の生活の中での時間的な制約によって、そして旧来ナッブートに付与されていた自衛のための必要性の低下などさまざまな要素によってナッブートが敬遠されるようになってきているのである。

このような若者たちの意見、それに伴うナッブート離れの現状を踏まえてＮ氏は「若者達はコンピュータなどに興味を持ち、また観光業に従事するようになってきており時間もなくなってきている。ナッブートは恐竜のようなものかもしれない…10 年か 20 年かしたら…いずれ滅びる」と指摘している。

2.11.3 ナッブートの持つ暴力性

実修地域には若者だけでなく、ナッブートを否定的な考えを持つ人間も存在する。それは自衛等のために携行されるナッブートは、同時に他人を傷つける武器になりうる危険性を持つからである。上

エジプトの人々の地域的な特徴として、時に起こる集団的な抗争を前述したが、この地縁的・血縁的な集団抗争の折には多くの武器が登場し、ナッブートもこれらのひとつであった（Blackman 1927:129-134）事はすでに先述している。

先行研究の項でもすでに述べたが、Blackmanによれば、20世紀前半の村同士の抗争解決手段としてナッブートが登場する。ナッブートは、村落間の抗争が発生した場合、また個々人の抗争解決の手段として用いられ、その場合人々に大きな怪我を負わせる場合があったと記録されている（Blackman 1927:129-134）。その殺傷性の半面、当時ナッブートは自衛の道具として役割も十二分に発揮し、必要な道具であったと思われる。20世紀前半のこの地域は現在に比べ非常に危険性を孕んだ地域だった。Blackman は、しばしば武装した護衛を引き連れ、また本人も回転式拳銃を携行することさえあった。外国人の、しかも若い女性である以上、彼女の行動で一概には言えないが、当時この地域の治安が良好な状態ではなく、個々人に自衛の意識が必要とされていたのは事実であろう。自衛用の武器として、当時はその存在価値を維持していたナッブートであったが、現在のように警察機構などによって社会の安全が確保されるに至り、また街灯などが村の至るところに設置されるなど社会資本の整備が整ってきた事は、個々人による自衛の必要性の軽減を意味し、自衛の道具としてのナッブートの必要性を失わせてきたといえるのである（Blackman 1927:129-134）。自衛機能の消失によって、ナッブートは武器としての危険性のみクローズアップされるようになっていった。そのような流れの中ナッブートは徐々に、安全を確保してくれる道具から、人を傷つける危険で野蛮な道具に変化していったのではなかろうか。

参与観察においてもナッブートの競技会において競技に熱くなった競技者が対戦者に強く打ち込む場面が幾度か確認された。そういった場合には競技会場ごと巻き込んだ大揉めに発展する事が必至である。たとえば 2006 年に参与観察した 3 つの生誕祭のいずれでも喧嘩が発生し、そのきっかけはナッブートであり、またその解決の手段として用いられようとしたのもナッブートであった（図 125）。また競技会ではないが、筆者が街にナッブートを購入しに行った折、ナッブートの販売店のすぐ近くで喧嘩が発生し、興奮した男性が、やおらナッブート販売店に並ぶナッブートを掴み相手を強く打ちつ

け、怪我をさせるといった出来事も発生している。

図 125 揉め事

彼が喧嘩に用いたのはカラザーン材のナッブートであったが、もしこれがシューバ材のものであったら事態は深刻なものであったと思われる。生誕祭の夜間に行われる競技会の折には、ビールなどのアルコールが登場する場合があるという。もちろん競技者たちはムスリムであり、平素アルコールは飲まないが、祝祭という「ハレ」の文脈の中で日常からの逸脱が許され、アルコールを摂取する人間がいる場合があるのである。日常の生活の中であるならばこれは強く否定される行為であろうが、祝祭の中の競技会においては黙認される場合が多いとの事である。しかし平素アルコールを口にしないものが飲酒をし、また祝祭の中高揚した気分になるならば、当然喧嘩等が起こりやすい状況になるのは容易に想像でき、また問題が発生した場合自制が効かなくなるのも理解しやすい。そのような状況が起きているとするならば、ナッブートが否定されるひとつの要素になっているのかもしれない。

競技会においてカラザーン材のナッブートを使用するのにも、ナッブートの持つ危険性が関係している。聖者生誕祭の競技においてもシューバ材のナッブートを使用して行っていた事もあったそうである。しかしシューバ材の競技では、問題が起こった時の事態が深刻であり、最悪の場合は死に至る事もある。過去いくつかの問題が発生したため、A 氏の生誕祭ではカラザーンで試合が行われるようになっていったそうである。おおよそ 30～40 年ぐらい前からはシューバ材ではなく、カラザーン材のナッブートが主流として用いら

れるようになったそうである。

カラザーン材のナッブートは、軽く、しなやかで扱いやすく簡単に試合ができて、なにしろ安全に競技が行えるのである。

N氏は、以前にシューバ材のナッブートが村落間の抗争に用いられていた事を述べている。もし近隣の村と村の間で抗争が発生し、大規模な戦闘が発生した場合、人々はまずシューバ材のナッブートを持ってこれに参戦したそうである。また、彼は国をまたいで国境付近の抗争にもナッブートが用いられていたと述べる。彼の述べている内容はまさにBlackmanの指摘と同様のものであり注目される。先述したように2006年の参与観察においても、自制の効かなくなった競技者がナッブートを武器として用いるケースが見られ、また喧嘩の場に武器としてナッブートが用いられるケースも確認できた。2006年の事例は全てカラザーン材のナッブートが用いられていたため大事には至らなかったが、硬質の材であるシューバを用いて喧嘩や抗争が繰り広げられれば、死傷者が出てもおかしくなかったと思われる。

第 3 章

ナッブートの持つ機能

3.1 ナッブートの文化的機能

3.1.1 イーミックな技の伝承のあり方

ナッブートの習得を通して、上エジプト人のひとつの身体所作、身体技法が受け継がれているとはいえないだろうか。日本人が明治期に西洋の学校教育の体育・軍隊において展開した体育・教練・スポーツが、古来からの日本人の姿勢をも含む身体技法を変容させた事への指摘は寒川が（寒川 2005：1-13)、またイタリアのカルチョストーリコが、1940年代からイタリア国民の紐帯として政治的に利用され、伝統スポーツがいわゆる“国民化”政策のひとつになった事は山田が論じているが（山田 2006)、ナッブートを身体技法と考えた場合、身体の“国民化”ではないが、身体の“上エジプト化”を実現するひとつの文化コードとして存在しているともいえると考える。そこではまた同時に身体文化の共有化を通して人間関係の維持強化も図られるのである。

たとえばクルナ村の男の子は 5～6 歳ぐらいになると聖者生誕祭においてナッブートの見学を始め、子供同士でナッブートを遊びの一部として行い、8歳頃から大人と一緒に練習を始める。そして 14～15 歳頃初めて聖者生誕祭のナッブート競技会への参加が認められる。つまり、まずナッブートを実修する大人達の所作の観察、そして子供同士の遊び中で自らの身体知としての技の体得を始め、大人との練習において、実践的な技を習得し、最後に成人の競技会の中で実践的な技術の洗練をしていくのである。子供達はこの観察→体得→実践→洗練というプロセスを追いながらナッブートを自分のものにしてゆくのである。上エジプトにおいては、ナッブートの技はひとつの身体知・身体技法として聖者生誕祭の競技会や、大人との練習などを通して子供達に受け継がれ、上エジプト地域の独特の身体文化として定着しているのである。

ナッブートの技法はプログラム化・カリキュラムなど言語化された教育メソッドに沿って学習・習得されるものではない。大人との練習などで技術移転はなされるが、その大部分に関しては、実修者自らが考えながら自得するスタイルがとられ、“まねぶ”形で身体技法の習得がなされるのである。ナッブートの技の伝承過程はまさにこの概念に当てはまるものといえるであろう。ナッブートは、学校など公の教育機関、ならびにその他教育の一環として取り入れられ、指導される事はない。定期的ではなく、しかもカリキュラムなどに

沿った近代的なスタイルではないが、村の中でナッブートに熟達した大人たちによって子供に手ほどきがなされ、また競技会という実践の場を通してナッブートは受け継がれているのである。

ナッブート教育はいつでも、どこでも自由に行なわれるものである。その自由な環境の中で、カリキュラムなどに沿った方法ではなく、ナッブートは学ばれていくのである。それはちょうど緩やかに社会の仕組みを実体験を通して子供達が学んでいくのと同じである。

そこには実修者を一度に同じ進度で学ばせるような意図は全く存在せず、実修者が各々の個人のペースで学んでゆけばよいと考えられているように思われる。緩やかな伝承方法は、画一化された方法から導き出される均質化された結果の達成とは程遠い位置に存在するため、そこで導き出される結果は、実修者側の理解や、モチベーションに大きなウェイトが置かれているのである。

実修者の理解やモチベーションの違いによって個々人の体得状況は大きく異なってくることは必然であり、１ヶ月程で大まかな技法を体得してしまう子供もいれば、１年、２年経ってもなかなか上達しない子供も出てくるのである。

ナッブートの習得は非常に緩やかな流れの中で行われ、個人の興味やモチベーションに合わせた形で行われるのである。

3.2 ナッブートの社会的機能

3.2.1 コミュニティ間のネットワーク強化

聖者生誕祭のナッブートの競技には、祝祭の行われる地区、地域だけでなく、上エジプトのほとんどの地域から多くの参加者が訪れる。周辺地域からの参加者は、祭りの折に実施地域の血縁者や知り合いを訪ね、寄宿する。当然彼らは競技会のみを目的に当該地域へ来るわけではなく、聖者生誕祭に訪れ、聖者廟の参詣を目的にするのは言うまでもない。しかしながら、一方で参加者にとって聖者生誕祭の中でも、特にナッブートの競技会が重要なウェイトを持ち、それを心待ちに実施地域を訪れる場合も少なくないのである。

参加者への聞き取り調査においては、聖者への参詣はもちろんであるが、ナッブートに参加する事も不可欠な要素であると言う声も非常に多く聞く事ができた。なぜなら、聖者生誕祭におけるナッブート競技会が、人々とって直接的な出会い、再会の場を提供しているからであろう（図 126）。

図 126 再会

ナッブートという伝統的なスポーツが特に上エジプト全域の共通の文化コードとして存在するものであるがゆえに、その文化コードを媒体にして、上エジプト地域のコミュニティ間のネットワークを維持、強化する機会が提供されていると考えられるのである。ナッブートの競技会に参加する事によって、参加者個々人は、コミュニティの内・外での自らのアイデンティティの確認、強化、再生産を行う事ができるのである。寒川はムラ（近代化以前の「伝統的・共同体的小規模社会」）では、成員によって行われる遊びやスポーツに社会統合機能が存在する事を述べているが、ナッブートはまさにこれにあたるであろう（寒川 1994:67-70）。

ナッブートの習得は前述したようにこの地域においては、特段時間が設けられて、技や所作が伝承されるわけではない。子ども達は、ナッブートの競技会に際して大人たちの所作を観察し、覚える。他日、子供達同士でナッブートを行い、技の真似事を通して確認・習得を行う事ができるのである。14 歳を過ぎる頃、漸くナッブートの競技会に参加が許されるが、そこではまず、競技を取り巻く輪に参加し、徐々に状況を把握、そして実際に競技に参加して技の鍛錬を行なうのである。ジーン・レイヴは新参者が実践的共同体（Community of practice）の一部に加わっていくプロセスについて、「正統的周辺参加」（legitimate peripheral participation）と名づけた参加の形態を明らかにしている。レイヴによれば、新規参入者は、まず一定期間、実践コミュニティの周辺に「参加」する事によってそこで行なわれる実践の全体像をつかむ事を要請される。近

代の学校教育から差異化される実践的なコミュニティの中での学習の基本的過程の一例と言えるこのプロセスは、ナッブートの習得過程を明らかにする場合に大いに注目される(レイヴ 1993 76-77 田辺 2002 15)。

新規参入者である若者はナッブートの所作を基本的には自得する形をとる。しかしながら、実際は「正統的周辺参加」(legitimate peripheral participation)を果たしながら、緩やかな意味でのコミュニティの中での教育システムを利用し学んでいるのである。しかもそれは成人になり、輪に加わる以前、つまり子供として、大人の輪に加わる以前から、実は周辺参加をしているとも言え、いうならば、“非正統的周辺参加”を行なっているとも言えるのであろう。

また一定の年齢になり正統的周辺参加を許された若者達は、同時に古参者の集まりであるコミュニティ側からは、新参者として注目される存在ともなる。それによって、徐々に当該地域のコミュニティの成員として認められるようになるのである。つまりコミュニティ側からも「アイデンティ化」(identification)がなされ、成員としての認知・容認がなされていくプロセスが存在するのである。実際参与観察においても多くの子供が競技会の人垣に、子供同士、もしくは親や祖父などとともに参加し、ナッブートを見学する。競技会の華麗な技や勝負の数々に触発された子供たちは、周辺で見つけた棒をナッブートに見立て、競技会の音楽に合わせて子供同士で、“ナッブートごっこ”を行なうのである。小さな子供たちはあくまで“非正統的周辺参加”であるが、正統的周辺参加を行う以前から、同じ空間に身をおく事を許され、その同一の空間で多くのものを吸収するのである。ナッブートの競技会においては、“非正統的参加”、および正統的参加を経て、実修者達は、ナッブートの競技に関する多くを学んでいくのである。

その中で、彼らの技は修練され、また内在的なナッブートへの参加意欲は充足されると同時に、新たにかき立てられるのである。

3.2.2 内在化されながら周辺的存在としてあり続けるナッブート

ナッブートの競技会は聖者生誕祭の構成要素であるが、実はその運営に関しては独立した形がとられているともいえる。これは馬の競演、コンサートの開催などにも言えることなのだが、これらの行事はA氏の家族によって直接的に指示、手配がなされるものではない。祭り本体を取り仕切る聖者A氏の親族にとって重要な問題、役

割は、A氏の廟を参詣し、A氏の家を訪問する人々を手厚くもてなす事といえる。これが、聖者生誕祭の本質であり、突き詰めればこの部分が聖者生誕祭といえるであろう。したがって極言すれば祭をその本質的な目的から考えた場合、ナッブートの競技会などの要素はあってもなくても良い存在なのかもしれないともいえる。人々はA氏の廟に参詣し、現世利益を願い、帰路に着く。これが聖者生誕祭の本質的なものであろう。しかし、これを踏まえて尚重要な存在として存在するのがナッブートといえるであろう。

ナッブートの競技会や、馬の競演やコンサートといった祭りの周辺的な構成要素に関しては、クルナ村の人間達などによって自治的に運営されているといえる。たとえば先述したがナッブートの競技会に関して言えばA氏の一族の人間ではなく、血縁関係はないN氏が、また馬の競演を取り仕切る人間も然りである。祭りを取り仕切るB氏はこれらがどのように運営がなされているかいちいち口を挟まない。しかし、ナッブートや馬の競演、コンサートなどは本聖者生誕祭の構成要素としてなくてはならないものとして存在しているのである。つまり、本祭りは中央集権的に一元的な構成がなされているものではなく、当該地域の人々が聖者への尊敬を表す一つの形として、各々主体的に祭りの構成要素を運営したその結実といえるのである。

ナッブートの競技会の中心人物のN氏の語りでは「A氏はクルナの全ての人の父親である。だから、みんなこの村の人間は兄弟であり、みんなでこの祭りを助けるのである。」ということである。したがって、祭りの構成要素も、B氏だけが考え、お金を負担し、実践するのではなく、たとえばナッブートの競技会に関してはN氏が取り仕切る。他の構成要素に関しては他の人が取り仕切るのである。祭りというひとつのイベントを考察するに際には、すぐに中央集権的な運営主体とその組織の力の及ぶ範囲に限定してその全貌を理解しようとする傾向があるように感じる。しかしこの認識自体がすでに近代的な発想を基礎とした一元的な見方に過ぎないと考えられ、本研究の考察には不十分といえるのである。

N氏はナッブートの競技会に欠かせない楽団を招聘し、彼らに食事を用意し、謝礼を払う。毎年N氏はB氏にナッブートの競技会の実施について報告は行なうが、2006年に関して言えば、実施についての報告すらしていないとの事である。

運営組織というミクロの視野で考察をした場合は、ナッブートや馬の競演などの多くの行事が、祭りの中心からは離れた周辺の存在となるかもしれない。しかし、A 氏への奉納という巨視的な視野でそれをくくるならば、そこにはひとつの目的意識を元に存在し、有機的な複合体として存在しているのである。したがって、ナッブートや馬の競演、コンサート、出店、遊戯施設などすべては、一方で祭りの周辺的な存在として位置づけられるが、A 氏への奉納というひとつの目的意識で結ばれた祭りに内在化された存在なのである。

3.2.3 地域アイデンティティの中心としての聖者
―聖者を中心とした個々のアイデンティティの創出―

西尾は、その論文の中で聖者の果たす「複数集団の境界としての機能、および介在者としての存在」に着目している。聖者は民衆と神との単なる紐帯ではなく、民衆の所属、構成する集団とその外界を結ぶ介在者としても現れ、集団内に対しては集団統一のシンボルとして､外に対しては境界線としての役割を果たすと考えている(西尾 2001:487-536)。つまり、聖者は集団への帰属意識、自己のアイデンティティの確認を促す存在と言えるだろう。統合象徴的な存在としての聖者が存在し、この存在に対する信仰が構成員間に共有され、社会的統合の強化に貢献する可能性に関しては古林も言及している（古林 1977 :15-36)。

西尾の提示したものは南シナイの事例であり、古林の事例は 18、9 世紀のものではあるが、聖者信仰によってもたらされる聖者を紐帯にした集団意識の創出、また構成員間の共有意識の再確認を促す事は地域、時間を問わずに共通すると言えるのではなかろうか。A 氏の聖者生誕祭には、当該地域だけではなく、ケナーからアスワンまでの上エジプト地方のさまざまな町や地域から人々が訪れる。祭の実修地域にとどまらず、一人の聖者を中心とした上エジプト全体という、より広範なアイデンティティの創出、確認がなされるのである。

3.2.4 非日常の空間を利用したナッブートの正当化システムの構築とナッブートを中心とした広範なアイデンティティの創出

祝祭の場が、当該地域の構成員の集団への帰属意識の創出、再確認が行なわれ、またそれによって人間関係の再生産がなされる場となっている事は、すでに他の儀礼研究でも明らかであり、聖者生誕祭も当然、その例外ではないであろう。

日常の生活の中でナッブートは、生活用具として、自衛のための道具として存在するものである。またナッブートの競技自体もイスラームとは関係性のあるものとはいえない。併せて、ナッブートはその武器としての殺傷性から否定すらされる存在であり、徐々に姿を消しつつあるものともいえるのである。このように宗教的な役割とは無縁の、そして社会的に否定される存在である伝統的スポーツが、しかしながら、祭りという宗教的な重要な場に登場し、ある一定の役割を果たしている事は非常に興味深い。

筆者の聞き取り調査からもわかるようにナッブートの競技自体は上エジプトの人々にとって非常に、魅力的な存在と言え、ナッブート競技への欲求は高い。しかしながら一方で、先述した通り、その暴力的な一面から否定される存在でもある。この状況を打破するという事を考えた場合、聖者生誕祭は非常に有効な場となっていると思われる。つまり、聖者生誕祭という祝祭の、いわば非日常（ハレ）を利用する事によって、日常の文脈では受け入れ難い危険性を孕む競技を行なう事が容易になっているのである。彼らはその際に、ナッブートの位置づけを、「聖者のための奉納」としている。A氏の聖者生誕祭においては上エジプト出身のA氏がナッブートの競技会を望んでいるという文脈で語られる。これによりナッブートの競技は実修者達の楽しみという文脈から離れ、祭りの中での正当な理由付けを手に入れる事になるのである。これによって、ナッブートはいわば“錦の御旗”を手に入れる事となるのである。したがって、ナッブートは祭りの中だからこそ、「認められ、また受け継がれる事ができる」と考えられる。そこでは、祭りが、いわゆるナッブートという文化を守るためのひとつの「保護区」のような存在として機能しているのである。

先述したようにナッブートの競技会それ自身には、世俗的な意味合いしか存在しない。また併せて否定さえされている存在である。しかしながら、祭りという空間を利用し、また正当化の拠り所を聖者の言説とする事によって、ナッブートの持つ否定的な部分を肯定化さえし、競技を行なう事が可能となるのである。また、併せて考えると、ナッブートに本来宗教的な意味合いがないからこそ、人々の宗教的な文脈から離れた場を創出する事が可能になり、人間同士の直接的な交渉の場を提供する事が可能になり、それによって人間関係の再生産、再確認の場として機能し、さらに新たな直接的な人

間関係構築の場を提供しているともいえるのである。

3.3 聖者生誕祭を支える要素としてのナッブート

3.3.1 祝祭前後の集団

聖者生誕祭は言うまでもなく、イスラームの聖者を祝って行なわれる祭りである。その目的は聖者を介して神に自分の願いを行うものであり、その原理によりこの祭りは、支えられている。

しかしその一方で、宗教的な意味合いの薄いナッブートというスポーツの競技の存在がこの祭礼の構成要素として存在し、実は参加者たちに少なからぬモチベーションを与え、祭りを成り立たせている事は注目に値するであろう。そもそもイスラームの教義から考えた場合、遊戯施設や飲食物の出店、また華美な装飾などな肯定されるものではなく、否定されるべきものであり、前述したように聖者生誕祭の存在すら否定される場合さえある。

だが、聖者の名の下にこの世俗的な構成要素が、人々の娯楽の場として、大いに機能し、日常の生活に潤いを与えている事も事実であろう。ナッブートも平素はその危険性などから、競技を行う事さえもままならない状況とも言える。しかし、先述したように、祝祭の、しかも聖者への奉納的な役割を付与する事で、一転、ナッブートの競技に正当性が与えられる事になる。これによりナッブートは単なるスポーツの競技会という範疇を超えた位置に昇華されながら、日常の欲求を果たす場として機能し、またそれを楽しみにする競技者たちの再会・交流の場を与え、聖者生誕祭を影で支える大きな構成要素となっているのである。

3.3.2 周辺地域の有力者との親交の場

橋本が述べるように祝宴はホスト側が用意する一体感を演出するひとつの儀礼である（橋本 1999:86）。祝宴に際しての本質は、ホストとゲストがいかなるものを象徴的に交換し、その関係性を強化・構築・再構築するのか、に行き着く。ナッブートの饗宴に関しては、次の 2 点から考えた場合、ホストがゲストに行うもてなしは、当該社会において重要な社会的な機能を持つ行為と考えられる。以下に詳細を記す。

3.3.2.1 (1)ホスト ⇔ ゲスト間の可視的互酬性の発生

橋本も述べているように、ゲストの訪問とは、その結果として大きな単位では地域と地域との連帯感の強化が、小さな単位では個人間の親密製性の深化が語られる（橋本 1999:87）。彼は観光の場面

における「異邦人」的なゲストと、地元民の関係性を論じているが、訪問・接待の儀礼には身分・地位・状態の変化を特徴付ける「通過儀礼」としての特徴が指摘される。互酬性の原理から考えた時にも、ホストは次回のゲストになりうるわけであり、その機能は疑いようがないであろう。

ナッブートの競技会を行う場合、当該地域のライースは他のナッブート実修地域の中心人物へ開催の連絡を入れる（また招待を特段行わない場合も、訪れる人々は大切なゲストとして迎えられる）。それぞれの地域の中心人物は各々の地域の人々へ競技会開催の旨が伝達され、希望者が開催地へ移動し競技会に参加する。

それらの来訪者に対してライースを中心とした人々は、競技会の運営はもちろんの事として、お茶や食事などを振る舞い、また宿のない人間に対しては宿舎まで提供する。これらは全て無料である。他の実修地域の聖者生誕祭が開催される場合には同様の形で、歓待を受ける事になる。したがってナッブートの競技会はこれが開催される事により、「訪問者への接待」という形の贈与と交換が発生することになり、地域間、また個人間の関係性の再確認、再生産が行われているのである。親方であるN氏は「ゲストに親切にする事は非常に重要である。なぜならば、それによってA氏の聖者生誕祭に関わる人々（＝クルナ村の人々）は非常にいい人々で、非常にすばらしいと思ってもらえるから。」とも語る。彼らにとって、聖者生誕祭のナッブートの競技会は自分たちの村の株を上げる絶好のチャンスといえる。また同時にそこでの失態は上エジプト中に自らの悪いイメージをはびこらせてしまう機会にも成り得るのである。彼はこの競技会の持つ意味を十分に理解し、その重要性を最大限生かせるように、常に気を配っているのである。

3.3.2.2 (2)ホスト

⇔

聖者から神へという不可視的互酬性の発生

また、ホストは来訪者を向かい入れ、厚遇する事は単なるもてなしにとどまらない。来訪者の聖者廟への参詣を助ける事は延いては神への奉仕になると考えられるであろう。大稔が中世の事例をもとに互酬論的交換モデルによってイスラーム的宗教行為を類型化で論じたように、参詣に訪れる人々は、自らの祈願を神へ聖者という存在を媒体にして願う事はすでに述べたが、その考え方はこの場合も

当てはまるのである（大稔 1993:32-34）。一見、招きいれた側の一方的な出資・および贈与に見える饗応であるが、食事、お茶、タバコ等のもてなしは、それ自身がすでにすべて神への信仰の証、信仰の一形態と捉える事ができる。具体的な事物の交換ではないが、贈与者の信仰・精神レベルで神への信仰の証しが明示され、それによって神からの祈願成就・報奨が与えられるという「交換」が発生しているのである。そもそもイスラームにおいては、現世における信仰心に基づく善行の多寡が、最後の審判に大きく影響すると考えられており、聖者、延いては神への贈与行為は、喜捨や寄進にあたりこれらの行為はすでに互酬を前提に行なわれているものと言えるのである。

3.3.2.3 (1)(2)のまとめ

上記のように、一見無償の贈与行為はすでに、可視的互酬性、不可視的互酬性の２つの側面から、ホスト側から期待された重要な人間関係の、そして信仰の両レベルでの見返り（報奨）が発生し、常に予定調和的に、(1)の場合はホスト側とゲスト側、(2)の場合はホスト側と聖者、延いては神に各々の希望がもたらされ、それが充足されるシステムが完成しているのである。

3.4 観光化変容　ルールの提案と国際スポーツ化への道
－ナッブートを巡る伝統と変容－

本来、聖者生誕祭などの祝祭の場でしか行なわれないナッブートを巡る新しい動きも確認される。クルナ村を始め、この地域を訪れる観光客を対象にナッブートの競技会が催された事があるのである[50]。クルナ村は前述したようにエジプト国内でも有数の観光地であり、その他にもナッブートの実修地域は上エジプト地方の観光地に当たる場所が含まれる。そのような場所で観光客へのパフォーマンスとして、ナッブートをいわゆる“伝統芸能”的存在として演じ、紹介し、楽しんでもらうのがその目的である。

この競技会の実施に際して、ナッブートの競技方法にいくつかの変更点が加えられた。たとえば、攻撃に際してポイント制が導入され、試合中にナッブートの運ばれる箇所・回数によってポイントが加算され､勝負を決するシステムが導入されたのである｡なぜなら、本来ナッブートは高度に共有された暗黙の了解を下に上エジプト地方の人々によって行われるものであり、当該地域の文化文脈に属さない人々を対象として行なわれるものではないため、明快なルール

の設定が必要だったからである。

したがって、観光化にあたり、観光客が見て楽しめるように、競技ルールを明文化・簡略化し、理解できる形への変更が必要だったのである[51]。

3.4.1 ポイント制の導入

攻撃ポイントは、体の部位によって配点が異なり、頭部や顔側部といった致命傷を与えられる部位に関しては、45ポイント、その他の体の部位は8ポイントが与えられる。トータルポイントを多く獲得した方が勝者となる仕組みへと変更されたのである。

3.4.2 試合時間の導入

試合時間は各競技会によって少々の幅があるが、過去の競技会では 10、12、15 分の勝負が設定された。試合は一本先制ではなく、時間制で行なわれる。

3.4.3 トーナメント制の導入

競技会にはトーナメント形式が採用され 20～30 人規模のものから、60～100 人といった大きな規模の大会までさまざまであった。競技会は一日のみで開催され5時間ほどで行われる。

3.4.4 審判制の導入

またこの競技会では審判制が採用されて競技者の得点を計算し、勝者を決定するのである。

3.4.5 競技会場の明確化

競技は、会場直径 10m ほどに設定された円の中に限定して行なわれる。

3.4.6 諸ルールの導入

競技に際して、競技者は必ず靴を脱ぎ、また時計をはずさねばならない。

3.4.7 順位確定と表彰の導入

主催者は上エジプトの各幾人かの各地域の有名な人間を呼んで試合を行う。1位から3位まで表彰の対象となる。表彰に際しては表彰状と賞金、そして副賞が与えられる。賞金・副賞に関しては、大会毎に異なっている。

1980～90 年代に、時折この種の競技会が行われていたそうであるが、ルクソール事件[52]が発生し、以後観光客の減少が発端で最近では行われなくなったとの事である。

実修者はこの種の競技会を評して、「サッカーで言うところのちょ

うど、ヨーロッパチャンピオンズリーグのようなものだ。アーセナル、バルセロナ…といった強いチーム（人物）が競い合う場である」と述べる。インフォーマントのN氏はこの種の大会において、過去3回優勝実績がある。

また余談ではあるが、過去にエジプト政府の要望で、クルナ村のN氏の親戚とアシュートのハッサン・バーブ氏がロシア・モスクワに招待されナッブートを披露した事があるとの話であるが、詳細については不明である。

伝統的なナッブートの競技は高度に共有化された暗黙知的なルールを駆使し行なわれる。したがって、上記のように観光客のような第3者の参加、もしくは理解の必要性がある場合、明解で明確なルールの設定が肝要となるのである。このプロセスは、まさに伝統的スポーツが近代スポーツへそして国際スポーツへとスポーツが変容を遂げる場合と同じプロセスであろう。閉じられた伝統的文脈の中から、「観光」という外界の刺激を受け、開かれた客観的で、誰にでも共有される文化事象としてのスポーツ（近代・国際スポーツ）にナッブートが変容する事を意味する。これは伝統的なスポーツが、近代・国際化を経て、熊野建が言うところの「観光資源としてスポーツ」に変容している事を意味するのである。（熊野 2004:29）。上エジプト地方のしかも限られた実修者達という“閉じられた世界”における決まり事が、他の文化に属する人々にでも、参加可能な明らかな基準を提示し、競技の概要を明瞭にする事は、同時に誰にでも観戦可能なスポーツの発生をも意味する。つまり、観戦可能なスペクテータースポーツの成立をも意味するのである。

表 1　伝統的競技形態と観光化によって変容した形態との比較

ナップートの競技ルール		
	伝統的競技形態	観光化による変容
勝敗	一本先取	ポイントの合計
試合時間	決まっていない	競技会によって規定あり
競技方法	自由に何度でも参加できる	トーナメント制
審判	なし	あり
競技会場	人垣によって作られる空間	試合場あり
賞品等	なし	あり

国際スポーツ化の過程は元来保持されていた伝統的なナップートのスタイルだけでなく、文化文脈から切り離される事を意味し、それによってその存在価値さえも大きく変化させる事になるのである。しかしながら、一方で、他の文化に属する人間達に、ナップートという上エジプトの文化に触れる機会を提供する事をも意味し、上エジプトの文化を観光客という媒体を通して外部に伝えるという事も叶うのは事実である。

人類学を観光における文脈から考察する以前は、外からの影響による文化の変容は、消滅の語りとして、否定的に見られる向きが大半であった。しかしながら「創られた伝統」でホブスボウムも述べるように、これら観光化に伴う変容過程は、文化の創造的な改変、再構築の過程とも考えられるであろう（ホブスボウム 1992:9-28）。土着の文化が観光という外圧によって破壊される犠牲者として消え去るものではなく、むしろ文化とはそのような状況を踏まえて新しく発生するものである事は太田好信も指摘している（太田 1998:55-94）。太田は西欧諸国のエキゾシズムに訴える観光形態が当該地域の人々に抑圧的である事を認めつつも、観光という構造への抵抗、およびその構造の利用が当該地域の文化に新たな創造的改変をもたらす契機ともなる事を主張しているのである。近代スポーツとはイギリスを発祥とするスポーツを指し、近代社会の枠組みの

中で世界共通のルールのもと行なわれるスポーツを指す事は周知の事実であろう。近代的な西欧文化のアジア・アフリカ諸国への流入、その考え方・イデオロギーの伝播は、過去に伝統文化の駆逐・消失の語りで表現されてきた。しかしながら、伝統社会が改変され、新たな装いを手に入れる過程ともいえ、またそれは非西欧社会の近代化は西欧社会からの文化伝播に始まる自国文化の作り変えの過程とも捉えられるのである。たとえばインドネシア・バリ島の文化はよく例で示されるところであるが、1930年代にドイツ人画家ウォルター・シュピース等がそれまでのバリ文化を基に、いわゆるバリの楽園化を演出し、バリ文化の代名詞である「ケチャ」を始め、さまざま文化を創造したのは有名な話である(杉山 2005 :92-93,山下 1996:104-112)。また世界システムの中で文化を考える場合、資本主義社会に同化的に持続する姿とともに、それに対抗しながら新たな文化が創造されていく過程も春日直樹によって紹介されている（春日 1995:100-118）閉じられた伝統的な社会に近代社会の文化が流入し、元来の姿を変容させていく過程はもはや負の文脈で語られるものではなくなってきている。西欧地域の文化の非西欧地域への進出は、当該地域の固有の伝統文化に、いわば“再創造”のきっかけを与える事を意味するのである。その文脈から考察を試みた場合、伝統スポーツ「ナッブート」の国際化の流れは、ナッブート競技の全体から考えれば、その本流に及ぼす影響を及ぼすようなものではない非常に小さな現象である。しかしながら、伝統的スポーツの担い手たちが近代・国際スポーツの文脈で伝統的スポーツを捉え、変容させた過程は注目に値するであろう。実修者達の思考のバックグラウンドが、西欧的な世界システムの流れの中位置するようになり、スポーツを見る眼もたとえば、サッカーのように近代・国際スポーツの文脈に大きく飲み込まれていく中、今後伝統的な競技スタイルのナッブートのあり方に、変化を及ぼす可能性は否定できずに、今回に観光化に見られる変容は、その序章かも知れない。

第 4 章

文化文脈の中でのナッブート
－イーミックな捉え方として－

4.1 実修者の言説

―ナッブートの語られる、位置する文化文脈－

参与観察による実修者達の言説を総合すると、過去から現在に及ぶナッブートに対するイメージが浮き彫りになった。

4.1.1 村々におけるナッブートの捉え方の違い

ナッブートの競技に関する認識は、上エジプト地方で共通のものといえる。しかし、ナッブートに関する捉え方、イメージはその村々によって多少異なっている。たとえば、L市の中のラガルタ村やダバイヤ村においては、男性にとって、ナッブートは非常に重要な意味を持つ。これらの村においてはナッブートを携行しない事自体が非常に大きな問題とさえなるのである。これらの村でのナッブートの携行は男性にとって必須の事項であり、不携帯は男性としての存在の放棄をも意味し、馬鹿にされるとの事である。なぜなら、これらの村では、ナッブートが成人男性のひとつの重要な象徴となっているのである。インフォーマントC氏の体験では、彼がダバイヤ村に出かけた時の事、友達の家を訪問し歓談の後、その友人と外出した。家を出てから少し経って、その友人は「忘れた！」と言って大慌てで自宅に帰ったそうである。その友人はナッブートを忘れたのである。C氏が「何でナッブートが必要なのか？」と聞くと、彼は当たり前のように「だって私は男だから。」と言ったそうである。ダバイヤ村や、ラガルタ村では、また教壇に立つ教師にナッブートがつき物であるそうである。ここでは教師の権威の象徴としても機能しているのである。

興味深い事にラガルタ村はナッブートの競技が非常に盛んで、強い人間を多く輩出する場所であるのに対し、ダバイヤ村ではあまり競技が盛んに行われない。ダバイヤでは男性のプレゼンテーション、そしてデコレーションのためのみに重要なものとしてナッブートが存在しているのである。

また一方で、クルナ村ではこれらの状況とは全く異なる文脈でナッブートが扱われる。たとえば現在クルナ村では、あまりナッブートを携行して外出しなくなってきている。もし東岸の観光客の多い市街地においてナッブートを携行していた場合「なんか問題でもあったのか？」といわれるとの事さえあるのである。確かに筆者もナッブートを持って歩いていると数人の人間に、冗談交じりに「何かあったのか？」と言われたほどである。

クルナ村は、世界有数の観光地であり、観光客を非常に大切にしている。したがって彼らはその観光地としてのイメージを気にし、ナッブートによるネガティブな問題（喧嘩や揉め事など）に非常に敏感になっているのである。このように村々によってナッブートの捉え方に違いも見受けられ、如何にナッブートが上エジプト地方の文化文脈と密接に関係しているのか。また重要な位置を占めているのかという事がわかり、非常に興味深いのである。

4.1.2 言い伝えにみるナッブートの社会的な地位

クルナ村に伝わる物語にナッブートの果たした社会的な位置を垣間見る事ができる。40年以上も前の話である。クルナ村にはナッブートの名手として有名なムハンマド･マンスールという人物がいた。彼の腕は並大抵のものではなく、皆が認めるものであった。当時この村のオムダ[53]であった人物は彼の強さを認めつつも、彼の強さに強いジェラシーを感じていたのである。そのようなジェラシーが募った時の事。オムダはムハンマド氏を密告する事になる。ムハンマド氏が起こした喧嘩を警察に知らせたのである。彼は警察に捕まる事になり、数年間牢獄に入る事となってしまった。その数年後、このオムダ主催でナッブートの競技会がこの村で開催される事になった。アスワン、ソハーグなど上エジプトの各地域から多くの人々を招待し、競技が行われた。その競技会においては、寸止めではなく、対戦相手の体への打ち込みが許可されていた。そのため参加者は、頭部を保護するためのヘルメットを装着して競技を行っていたほどである。

当時はソハーグがナッブートの最強の地域とされ、ソハーグからの参加者にはその他の地域の人間たちは全く歯が立たなかった。この村で主催した競技会にも関わらず、この村の人間達も全く歯が立たず、惨敗をきしていた。この状況を、オムダを始めこの村の人達はひどく恥ずかしく感じた。オムダは、ここで対策を講じたのである。自らが快く思わずに、以前密告まで行い、相手を貶めた事のあるムハンマド氏のところへ出向き、詫びを入れ競技会への参加を懇願したのである。またこの時にはオムダだけではなく、この村の人々もムハンマド氏の所を訪れ、この村の人間の競技会での惨敗を話し、ムハンマド氏の力が必要な事を熱弁し、競技会への参加を懇願したのである。

ムハンマド氏は過去の蟠りを思い出し、暫く考えた。しかし最終

的には彼らの懇願を受け入れ競技会への参加を決意したのである。

彼は後日行われた競技会に参加した。当時最強と謳われたソハーグの参加者と次々に対戦し、彼は全て打ち負かしてしまったのである。その折の武勇伝として、ムハンマド氏はソハーグの競技者のヘルメットを全て打ち壊し、その威力はすさまじく、ヘルメットだけではなく、彼らの頭部にもダメージを与えたとさえいわれる。

その結果にこの村のオムダをはじめ村の人々はムハンマド氏に非常に感謝し、大いに喜び、その後恥じる事なく、胸を張って生きていけると感じたそうである。

この話から、ナッブートが如何に当時のこの村、延いては上エジプトの人間達にとって重要な存在であったのかが理解できるのではなかろうか。オムダや村の人々の語りからすれば、ナッブートで負ける事が非常に「恥ずかしい」ものであった事が理解できる。またそれは、同時にナッブートの競技会での勝利、そしてそこでの名誉の挽回が、当時の実力者であったオムダにとって、そして村全体にとって非常に重要な問題であったのかを意味する。

そのような背景があるからこそ、当時村の中で絶対的な力を持っていたオムダが、敵対関係にある人物に、頭を下げ、自分のそして村の名誉の回復への助力を懇願するといういわば屈辱的な行動までを起こさせる。そして、またムハンマド氏も自分を投獄した人間の願いでありながら、村全体の名誉回復のためにその願いを受け入れるといった事が発生するのである。この話は、過去における上エジプト地方のナッブートの存在意義を理解する上で非常に重要な語りといえるのではなかろうか。

4.1.3 紳士的な振る舞いの前提の存在

ナッブートの競技会にはその成立の前提条件として参加者のモラルが必要とされている。先述したように、この競技は上エジプトの人々の、個々人そしてコミュニティ間の関係性の強化という重要な役回りが期待された存在である。一方で、ひとたび競技者が一線を越えると手のつけられない暴動と化してしまう事も十分理解されている。そのためこの競技に関しては、当事者による「セルフ・コントロール」が競技を成り立たせる上で非常に重要なポイントとなっているのである。そこでは、まず参加者一人一人に対する礼儀正しさが要求される。たとえば、2006年のA氏の聖者生誕祭の競技会で混乱が起きた時、N氏の従弟に当たる一人の男性が声を荒げて参加

者たちに語りかけた。彼は「こんな混乱が起きるのではこれをナッブートとはいえない。ここには礼儀正しさが存在しない。みんな本来礼儀正しいはずだ。礼儀知らずはここからは出て行け！」といったのである。彼は競技の成り立つ前提にある参加者個々人たちの「紳士的な振る舞い」「礼節」の重要性を主張し、その再確認を促し、それが無ければこの競技が成り立たない事を述べていたのである。

4.1.4 状況に応じて緩やかに変更される予定

2006 年のＡ氏の生誕祭においては初日の夕刻のナッブートの競技会が行われなかったが、Ｎ氏本人の体調が不調であり、競技会が行えなかったとの事である。１年に１度の競技会ではあるが、その時々の状況に応じて柔軟に対応され、皆それを受け入れる。近代・国際スポーツの競技会にはみられない光景といえる。

4.1.5 人間関係の中でのナッブート

上エジプトの人間達にとってナッブートは純粋な競技である以前に、非常に濃い人間関係の確認、再生産の場を提供するといった重要な役割を果たす事がその隠れた目的にある事は先述した通りである。たとえばＮ氏が下エジプトのプレイスタイルを評した時に、上エジプトのナッブート実修者達の、濃い人々の関係性の中で展開するナッブートと異なり、希薄な人間関係から生ずる暴力的な一面を痛烈に批判している事からもよくわかる。また合わせてＮ氏はクルナ村の老人と対戦する場合の例を挙げ、老人などと対戦する場合の配慮を例に、競技会という場が上エジプトという大きな文化文脈の中に存在し、競技が成り立っている事を一番重要な項目と捉え、競技のバックグラウンドにある人間関係の維持、強化が何より重要な事項である事を強調するのである。

下エジプトのストリートファイト的な競技と同様に、上エジプトのナッブートの競技会においても、もちろん勝敗は重要なポイントではある。しかしそれ以上に、ナッブートの競技会を上エジプトの文化と位置づけ、その事を強く意識している点が重要であると思われる。もちろん文化とは常に流動的で動的なものであり、上エジプトの文化が下エジプトへ流入し、下エジプトに入ったナッブートが下エジプトの文化文脈において理解され、受け入れられる事はなんら不思議な事ではないし、極自然な事であろう。

しかしながら、一方でそれによって上エジプトの実修者にとって、自らの文化としてナッブートを意識し、それと自分たちを強く結び

つける点は非常に興味深い。

またナッブートの持つ「非日常性」は注目される。たとえばN氏の語ったナッブートの競技会におけるリベンジのあり方を考えると、上エジプトの人間達がナッブートの競技会をひとつの「非日常」の世界に位置づけ、日常と切り離した文脈の中で語っている点が理解できる。N氏の語りにおいてはナッブートの競技中の問題は、競技の中で理解されるのである。非日常の世界の出来事は、その中で処理されるべきであり、そうでなくてはならないのである。なぜなら、ナッブートのように常に競技中の怪我が起こりうる競技は、競技を行なう事自体が、加害者と被害者を生む可能性を大いに包含している。しかもその実修者はさまざまな地域から参集している人々であり、もし彼らが各実修地域の名人達ならば、彼らは各地域の名誉さえも背負いながらの参加という事になり、そのような大きなものを背負った人間同士が日常の文脈の中で試合を行い、もしトラブルが発生しようものならば、それは単なる個人的な問題にとどまるわけもなく、まさに地域間の大きな抗争になりかねないのである。

したがって、上エジプトの人々はナッブートを非日常の文脈の中に収めてその中で大いに力を競い合うのである。もちろん真剣勝負が展開されるからこそ問題は発生してしまう。頻繁に怪我人が出て、競技会ではトラブルが発生するのがある意味当たり前なのである。しかし、トラブルが頻発しながらも、競技をコントロールし、遺恨を日常の世界に持ち込まずに、長年に渡って競技会機能し、継続されてきているのは、それが、非日常の文脈の中に位置されているからなのである。

第 5 章

結 論

5.1 伝統的スポーツ、国際スポーツとしてのナッブート

ナッブート実修者達はナッブートをどのようなものとして感じ、捉え・考えているのだろうか。実修者たちへの聞き取り調査から、彼らはこの伝統的スポーツを上エジプトの重要な伝統文化として捉えている。そして一方で新たにナッブートを近代・国際スポーツの文脈から捉えるといった二通りの立場が確認できた。

5.1.1 伝統的スポーツとしての文脈

実修者達は、ナッブートを自分達の文化と認識し、上エジプトという「閉じられた」空間に存在する伝統的な文化である事を認識し意識している。ナッブートは上エジプトの伝統として、当該地域の文化文脈の中で語られる。したがって、一旦上エジプトの文脈から離れる形でナッブートが行われると、彼らは途端にそのあり方に敏感になり、注意深く自文化と比較を試みるのである。本論で紹介した下エジプトのナッブートは好例であろう。下エジプトに流入したナッブートが翻訳的適応を経て、都市部という人間関係が希薄な環境において一種のストリートファイトとなり、そこに定着した。上エジプトの人々は、見た目こそ上エジプトの競技と似たものであるこの競技を、あくまで上エジプトで実修されているスポーツ文化とは似て非なるもの、換言すれば“亜種”的な存在としてとらえ、それを否定さえするのである。上エジプトの人々は、彼らの濃厚な人間関係の中で醸成される文化としてのナッブートとは、異なる文脈の存在として下エジプトのナッブートを位置づけるのである。

5.1.2 近代・国際的スポーツとしての文脈

上エジプトのナッブートは伝統的に暗黙の共通理解が堅持され、競技が綿々と受け継がれている競技である。しかしながら、もちろん完全に“静”の状態の文化など存在しない事はすでに自明の理であり、歴史の流れの中で変化・変容の過程を免れた「伝統」などというものが存在しないのである。観光化変容の項でも述べたが、伝統的スポーツであるナッブートに、新たに客観的に判断基準であるルール等の導入する事によって、近代・国際スポーツの変容が試みられている事実が存在する。「観光化」の影響による競技形態の変容においては、ゲストという他文化の人々との競技共通理解を求められる事がその前提となる。競技共有化のプロセスにおいては、暗黙の共通理解であるはずの“伝統的な競技の理解”を客観的な判断基準とするために明文化が図られねばならない。その際には、当然ナ

ッブートの当該地域の文化文脈からの離脱が図られ、明確なルールを基準に持つスポーツの形態が創出されるようになるのである。そしてそれは、ナッブートの近代・国際スポーツへの変容を意味するのである。

観光化した競技会では、攻撃のポイント制が、また審判制が導入されたように競技に一定の基準を与えられた。それによって勝敗の決定に客観的視点がもたらされるのである。また明確なルールの出現は、競技者のみならず観客との一定の基準を共有をも意味し、文化文脈の異なる人々とも共有された認識の下、競技を行われる事を意味するのである[54]。また客観的ルールの出現は、常にそのルールの基準の改定を促す事をも意味する。たとえばナッブートの競技に関して言えば、観光用の競技における競技時間が、競技会を重ねる事に改変されている事は興味深い。競技者の競技の行ないやすさ、また観客達の競技観戦に最も適した時間を模索しながら競技が運営され、スペクテータースポーツとしての形を形成していくのである。

また伝統的スポーツが地域の文化文脈に属した人々による意思決定機関によって運営されているのに対して、観光化されたナッブートは旅行会社などの当該地域の伝統的文化文脈と密接に結びつかない人間達が企画・運営に携わっているは興味深い。彼らは主催者側の人間でありながら、その感覚は当該地域の文化に属さないという意味で、観客と同じと言う事になる。したがって当該文化の外に位置する彼らが運営の中心で活動を行うという事によってますます当該地域の文化文脈から離れた形で“観光化ナッブート”が形成・確立していく事になるであろう。

また観光化の文脈の中で開催される競技会に招待される参加者は、各地域のいわゆる達人と呼ばれる競技スキルの高い人々に限定される。そこでは観客を意識した高レベルでのパフォーマンスが期待されているのである。競技の専門化や高度化はスペクテータースポーツの文脈から考察した場合、非常に重要なものであろう。国際スポーツが広がりを見せると同時に、トップアスリートが出現し、彼らのパフォーマンスはスペクテーターを魅了する力を持つのである。

元来伝統的なナッブートの競技会も単なる競技を行なう場としてだけでなく、各地域の名人達の試合を観戦する楽しみの場でもあった。したがってナッブートは伝統的なスポーツの枠組みの中にある時点からスペクテータースポーツとしての要素は包含していたとい

える。各地域にはそれぞれ有名な、凄腕の競技者が存在し、彼らの対戦は聖者生誕祭におけるナッブートでの重要な呼び物であったのである。しかしながら、この場合は当然の事ではあるがスペクテータースポーツ・ナッブートは、その実修者の間に限られた形でのみ成り立つ世界であった。

ナッブートの観光化は、実修者という“閉じられた”世界だけで無く、異なった文化文脈に属した人々に対してスペクテータースポーツとしての可能性を提示したのである。そこでは実修者でない人間達にも競技者の競技暦や腕前が紹介され、事前に名勝負の情報が共有されるのである。そして、たとえばポイント制が導入され、時間性が導入され、また審判制が導入されるといったように、競技に一定の客観的な基準を与えられる事によって、勝敗の決定が、合理化、数量化などの記録化を通して、異なった文化文脈に属する人々にも競技の楽しみをを共有する可能性が示されたのである。

5.1.3 近代・国際スポーツの文脈から捉えられる伝統的スポーツナッブート

ナッブートは上エジプトの社会の中において、伝統的な身体文化として存在し、その競技会は単なるスポーツの一イベントとしてではなく、地域コミュニティ中、そしてコミュニティ間において、個人の、また集団のアイデンティティの創出、維持、強化、再生産を行う場、またそのツールとして非常に重要な役割を担っているのである。ナッブートは、上エジプトという“閉じられた”空間において欠かせない「文化」として存在しているのである。したがってナッブートは本来の“閉じられた”文化文脈の中だからこそ、その姿を保持され、他の文化との差異化をもって自己のアイデンティティを維持できるのである。

そのため、たとえば下エジプトに流入したナッブートが文化変容を遂げて、実修されるような事例の場合、上エジプト人達はそれに対し敏感に反応し、即座に自文化との差別化を行い、またそれらに対してある種の拒否反応さえを示すのである。そしてそのように差異化を鮮明にし、自らの文化としてのナッブートの姿を浮き彫りにする事によって、自らのアイデンティティの保持、強化を図っていくのである。したがってそういった場合、その差異性が大きければ大きいほど、差別化や拒否反応が強くなされると言えるであろう。

ところで、ナッブートの実修者達は一方では伝統スポーツと認識

し、閉じられた空間での伝承・保持を行っているが、実はその一方でこの伝統スポーツを近代・国際スポーツを見るのと同じ視点でも捉え始めているとはいえないだろうか。観光化変容の中で顕在化された実修者達の視点とは、実は伝統的な競技を行う実修者達が平素潜在的に保持しつつある感覚なのかもしれないと考えるのである。

平素の生活で実修者達が触れるスポーツとは、教育機関で学び、また TV などを通して手に入れる多くの情報であり、それらの大半はサッカーを代表とする近代・国際スポーツとなる。彼らはエジプト国内のしかも地方都市に住みながら、常に世界基準のスポーツ文化に触れているのである。つまり自宅にいながら文化伝播の真っ只中に位置し、スポーツに対する世界基準の新たな概念を日々形成・更新し、また無意識のうちに更新されているのである。

これによって彼らは無意識のうちにスポーツを近代・国際スポーツの枠組みで捉えるようになる。多くの実修者達は、内なる変化に気づかぬままに伝統スポーツのナッブートを実修する事となる。したがって、そのあり方に違和感を覚えるようになり、または自分の価値観に合うようにその姿を改変していこうとする事が起きても特に不思議な事ではないのであろう。

したがって、たとえば当該地域の若者を例に考えるならば、すでに近代・国際スポーツを基準としてスポーツを捉える彼らにとっては、ナッブートは多くあるスポーツの、ひとつの選択肢でしかないのかもしれない。当然彼らは純粋に自分の興味から、スポーツを比べ、スペクテータースポーツとして、また競技としてサッカーなどには興味を覚えて積極的に参加や観戦するが、伝統的であり、わかりづらく、また危険性を包含しさえするナッブートの面白さを理解できずにナッブートから離れていってしまうのかもしれない。

彼らにインタビューをした際、またそれよりも年配の参加者に話しを聞いた場合、彼らは、頻繁にサッカーにたとえて、ナッブートを表現する。もちろん彼らは聞き手である筆者に配慮してわかりやすい説明を心がけてくれたのであろうが、その背景には、サッカーなどの近代・国際スポーツと同じ文脈でナッブートを捉えだしているという事も言えるのではなかろうか。その意味では閉じられた空間の中で、伝統的な存在としての保持されてきたナッブートはその姿を変容していく運命にあるのかもしれない。むしろ運命などというよりもどのような文化要素も常に変容を遂げる事が当然とするな

らば、この変化は歴史上ずっと継続して起こりうる、また起こってきた必然としての状況といえるであろう。この考えに照らし合わせれば、観光化という外部からの力によって、ナッブートは伝統文脈から切り離された新しいスタイルを手に入れる事になったが、この変容を受け入れるのは考えるよりも容易なものだったのかもしれない。

近代・国際化の文脈による思考の変化に伴って、人々のナッブートへの姿勢は徐々に変化を遂げているのかもしれないし、若者が参加しなくなってきている事など、時代の変遷に応じてのその競技形態、競技を取り巻く環境は変容を遂げてきているのかもしれない。しかしながらその一方で、上エジプト人共有の暗黙の共通認識としてナッブートが当該地域の重要な一文化として認識され、受け継がれているのは事実であり、それは当該地域の“閉じられた”人間関係によって守られ、維持され続けているである。

5.2 二重のアイデンティティと上エジプト人化の構築システム

近代・国際的スポーツの影響を徐々に受けながらも、伝統的スポーツナッブートは聖者生誕祭の構成要素の中でも、宗教的な文脈から遠い、いわば土着の地域文化の一つである。しかしながら、その存在は生誕祭の中において大きなのものとなり、この祭りにとって欠けがいの無い存在といえるであろう。実修者達は、意図的かそうでないかは別として、「聖者への奉納」という付加価値をナッブートの競技会に与える事によって、聖者生誕祭の文脈の中でのナッブートに「正当性」を付与する事に成功している。

宗教的な正当性を付与され、祭りの中でのある意味正当な位置づけを手に入れ、一方で宗教的な文脈にその身を置く事によって、その立場を保証されながら、もう一方で、元来の宗教の文脈とその関係ない存在であるがゆえにナッブートに発揮できる機能もあるのである。ナッブートの競技会は先述したように、本来宗教的な性格があるものとはいえない。したがって、奉納のような形で祭りに組み込まれるのであるが、実際の実修者達は、奉納を意識する一方で、この競技に宗教的性格を感じていない、むしろ純粋なスポーツの場として考えているのである。したがって、聖者や神とのつながりを求めるための聖者生誕祭のコンテクストとは違った、純粋な人間関係による場の創出を実現できるのである。もちろん、当然の事として、神がいるから、そして聖者がいたからこのような場が実現する

というロジックは存在するであろうし、そのとおりであろう。

しかし上エジプトの人々はこの競技会に宗教的な正当性を与え、競技の「保護区」として利用しているとも考えられるのである。そして、ある意味意図的に創られた保護区ならば、競技者達の意識下では、この競技会は純粋なスポーツの集まりであり、宗教的なコンテクストよりも、ずっと俗世的な、世俗的人間関係のつながりによって維持され、それによって守られる機会なのである。そこでは、当該地域の人々がナッブートを介して、上エジプト地域の人々の関係性を確認、強化し、再生産を行う場といえ、上エジプトとしてのアイデンティティの確立の場であり、いわば“上エジプト化”の場といえるのではなかろうか。

当該地域でナッブートを実修する人々はムスリムであり、当然彼らはイスラームのアイデンティティによりカテゴライズされる人々である。しかしながら、一方で、「上エジプト人」という地域アイデンティティが、宗教的なアイデンティティとは別の層で存在し、その地域アイデンティティを、聖者生誕祭の中におけるナッブートの競技会が強化し、再生産していると考えられるのである。

したがって、上記のように考えるならば、本研究で考察を試みた聖者聖誕祭とは、聖者を中心としたイスラームの宗教的、アイデンティティの再生産の場であるとともに、ナッブートというスポーツを介した、上エジプトという地域的なアイデンティティの強化、再生産を行う場として機能していると考えられる。したがって、この祭は上エジプト人が持つ二つのアイデンティティを再生産、強化する場といえるのである。

＜謝辞＞

本論文の作成に当たり、吉村作治氏（早稲田大学ユネスコ世界遺産研究所客員教授）、近藤二郎氏（早稲田大学文学学術院教授）、長谷川奏氏（早稲田大学エジプト学研究所客員助教授）、菊地敬夫氏（早稲田大学理工学学術院客員講師）、田里千代氏（天理大学体育学部助教授）には草稿の段階からさまざまな助言をいただきました。また倉持梨恵子氏（早稲田大学スポーツ科学学術院助手）、緑川泰史氏（早稲田大学スポーツ科学学術院助手）には、医学的な見地に関して、今泉一哉氏（早稲田大学大学院人間科学研究科）には図版作成に関して、橋口敬子氏（国立音楽大学音楽学部卒）には音楽の知識に関して、また小坂美保氏（早稲田大学スポーツ科学学術院助手）、中嶋哲也氏（早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程）、国宝真美氏（早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士課程）には、論文の推敲の段階において、きめ細やかで大きな助力をいただきました。また本論文作成に当たり暖かく見守ってくださった早稲田大学スポーツ人類学研究室の仲間達に感謝申し上げます。ならびに本稿作成までの道程を支えてくれた家族に感謝します。

参 考 文 献

＜和文参考文献＞
赤堀雅幸
1998 「エジプト」『民族遊戯大事典』大修館書店 562-566
1996 「聖者が砂漠にやってくる－知識と恩寵と聖者の来性について－」『オリエント』 日本オリエント学会 38/2 103-120
赤堀雅幸 東長靖ほか
2005 『イスラームの神秘主義と聖者信仰』イスラーム地域研究叢書⑦東京大学出版会
アーヴィング・ゴッフマン 石黒毅訳
1974 『行為と演技—日常生活における自己呈示—』誠信書房
アレン・グットマン著 谷川稔 石井昌幸他訳
1997 『スポーツと帝国』昭和堂
イアン・ショー＆ポール・ニコルソン内田杉彦訳
1997 「オストラコン」『大英博物館古代エジプト大百科原書房 97-98
稲垣正浩
1991 「ヨーロッパ中世のスポーツ」『図説スポーツ史』寒川恒夫編 朝倉書店
今松泰
1996 「ハジ・ベクタシの「聖者」像の形成・変遷と定着について—オスマン朝期の叙述史料を通じて」『イスラム世界』47 1-17
菟原 卓
2002 「ファーティマ朝」『イスラーム辞典』山内昌之他 岩波書店 826-827
エドワード・ホール著 日高敏隆、佐藤信行共訳
1970 『かくれた次元』みすず書房
エリック・ホブスボウム テレンス・レンジャー編前川景治 梶原景昭 他訳
1992 『創られた伝統』紀伊国屋書店
太田好信
1998 『トランスポジションの思想』世界思想社
大塚和夫

2002a 「聖者」『イスラーム辞典』岩波書店 905
2002b 『いまを生きる人類学グローバル化の逆説とイスラーム世界』中央公論新社
2000 『近代・イスラームの人類学』東京大学出版会
1992 「ムスリムの聖者信仰とその批判をめぐって アラブの事例を中心に」『東洋学術研究』東洋哲学研究所 31/2:92-108

大稔哲也
1993 「史料としてのエジプト『参詣の書』ー12-15 世紀の参詣慣行と参詣者の意識ー『史学雑誌』史學會 102/10:1-49

大林太良 他
1998 『民族遊戯大事典』 大修館書店

春日直樹
1995 「世界システムの中の文化」『現代人類学を学ぶ人のために』米山俊直編世界思想社

片倉もとこ編
2002 『イスラーム世界事典』 明石書店

川本正知
2002 「ズィクル」『岩波書店』521-522

グフタフ・E・V・グルーネバウム著 嶋本隆光監訳
2002 『イスラームの祭り』法政大学出版局

私市正年
2002 「バラカ」『岩波書店』783
1996 『イスラム聖者 奇跡・予言・癒しの世界』講談社現代新書

熊野建
2004 「スポーツと観光」『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店 29-36

ケンドール・ブランチャード
1995 「21 世紀の伝統スポーツ、国際関係、および世界秩序について」『21 世紀の伝統スポーツ』1-19

小杉泰
2004 『ISLAM』ネコ・パブリッシング
2002 「アズハル」『イスラーム辞典』岩波書店 17

古林清一
1986 「近代エジプトにおけるサラフィーヤ運動とスーフィズム」『史林』史学研究会 69/1:86-110
1977 「18.9世紀エジプト社会と民衆宗教」『イスラム世界』日本イスラム協会 12:15-36
1975 「エジプトにおけるスーフィー教団と聖者崇拝」『史林』史学研究会 58/2:61-92
小林秀樹
1992 『集住のなわばり学』彰国社
佐藤健太郎
2002 「ヒジュラ暦」『イスラーム辞典』岩波書店 809
佐藤次高
1986 『講座イスラム3 イスラム・社会のシステム』筑摩書房
清水芳見
1992 『アラブ・ムスリムの日常生活』講談社現代新書
ジーン・レイヴ エティエンヌ・ウェンガー著 佐伯 胖著
1993 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書
杉山千鶴
2005 「終わらない創造・バリ島のケチャ Kecak Dance」『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店 92-95
瀬戸邦弘
2006 フィールドノート
2005 フィールドノート
2004 フィールドノート
2000a 「古代エジプト新王国時代におけるいわゆる棒競技（single-stick combat）について」『エジプト学研究』第8号 早稲田大学エジプト学会 103-110
2000b 「古代エジプト新王国時代におけるスポーツと王権について－王の行うスポーツの持つ王権維持機能について－」『スポーツ人類学研究』日本スポーツ人類学会 2: 29-53
寒川恒夫
2005 『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店

1994 「ムラと遊び」『スポーツ文化論』杏林書林 67-70
1991 『図説 スポーツ史』朝倉書店
高津 勝
2006 「スポーツのグローバルな過程—過去・現在・未来—」越境するスポーツ グローバリゼーションとローカリティ』高津勝・尾崎正峰編 創文企画 7-44
店田廣文
1999 『エジプトの都市社会』早稲田大学出版部
田辺繁治
2002 『日常実践のエスノグラフィ』世界思想社
東長 靖
2002 「スーフィズム」『イスラーム辞典』岩波書店 536-538
橋本和也
1999 『観光人類学の戦略』世界思想社
ブランチャード,K. チェスカ.A. 大林太良監訳 寒川恒夫訳
1988 『スポーツ人類学入門』大修館書店
西尾哲夫
2006 『アラブ・イスラム社会の異人論』世界思想社
2001 「中東イスラム世界における『聖者』発生の社会的・認識的メカニズム—エジプト・南シナイ地域の事例研究」『国立民族学博物館研究報告』25/4: 487-536
中村光男
2002 「バラカ」『イスラーム世界事典』明石書店 312
ヘロドトス
1972 『歴史』上 松平千秋訳 岩波書店 201-202
保坂修司
2002 「ウラマー」『イスラーム世界事典』明石書店 148
堀川 徹
2002 「タリーカ」『イスラーム辞典』岩波書店 616-617
森 伸生
2002 「ラマダーン」『イスラーム辞典』岩波書店 1045
山口昌男
1988 『仕掛けとしての文化』講談社学術文庫
山口直彦
2006 『エジプト近現代史 ムハンマド・アリ朝成立から現在

までの 200 年』明石書店
山内昌之ほか
2002 『イスラーム辞典』岩波書店
山下晋司
1996 「「楽園」の創造—バリにおける伝統と観光の再構築—」『観光人類学』新曜社 104-112
山田季生
2006 「民族スポーツと政治～創られた伝統カルチョ・ストーリコ～」早稲田大学大学院人間科学研究科修士論文

＜外国語参考文献＞
Aẖmad Amīn
1953 *Al-'Ādāt wa'l-Taqālīd wa'l-Ta'ābīr al-Miṯriyya*, al-Qāhira.
Ayrout, Henry, Nabib
1963 *The Egyptian Peasant,* Boston: Beacon.
Blackman,Winifred S
1927 *The Fellahin of Upper Egypt*, Cairo.
Edward William, Lane
1836 *Manners and Customs of the Modern Egyptians*, Cairo.
Ernst, C.W
1997 *The Shambhala Guide to Sufism,* Boston & London：Shambhala.
Maguire, Joe
1990 'More than a Sporting Touchdown: The Making of American Football in England.1982–1990', Sociology of Sport Journal 7: 213–37.
Hopkins, Nicholas
2004 *Upper Egypt identity and Change*, Cairo.
2003 *Upper Egypt Life along the Nile,* Gylling.
J.Vandier d'Abbadie
1940 "Deux nouveaux ostraca figures" , *ASAE* 40,: 467-488.
Kunihiro, Seto

2006 “Tradition and Change Seen in Traditional Japanese Sports Ball Game “Eyou”International Journal of Sport and Health Science 4:1-8, http://www.soc.nii.ac.jp/jspe3/index.htm.

Rohi Baalbaki

2001 *Al-Mawird: A modern Arabic-English Dictionary,* Beirut: Dar El-Elm LilMalayayin, 14th ed.

Wagner, Eric A

1990 ‘Sport in Asia and Africa: Americanization or Mundialization?’, Sociology of. Sport Journal 7: 399-402.

文末註

1) ナッブート、アッサーヤの他に、シューバという呼び名でも呼ばれる場合がある。シューバという呼称は木の名称によるものであり、その他の木材を用いる場合が多い現在の競技の名称に用いるには適当でないと判断される。アッサーヤという名称の方が広範に一般的に用いられるという説もあるが、地域や時代によってその名称には必ずしも統一性があるわけではなく、本論文においては、先行研究等でも用いられるナッブートという名称を用いる事にする。

2) 新王国時代第 20 王朝の王。現在でもマディーナト・ハブーに、彼の葬祭殿は往時の姿を残しており、観光名所となっている。

3) 新王国時代第 18 王朝の王。古代エジプトを代表する王で、彼の王宮、記念神殿、墓などがこの地域に点在している。

4) 単数形はオストラコン。考古学の用語で絵や文字が書かれた石片や土器片を指す。私的なメモ、スケッチ、書簡などとして用いられたものと考えられる（ショー 1997:97-98）。

5) 聖者信仰を「聖者崇拝（欧米の場合は saint worship）」と呼ぶ研究者もいるが、民間信仰の一部構成要素として聖者をめぐる諸現象を考察することをその目的とするため、本論文においては聖者崇拝ではなく、聖者信仰の用語を用いる事とする。

6) アラビア語で「誕生の場所・時」を意味する。一般的に「生誕祭」と訳されるが、誕生日ではなく、命日をさす場合もある。（大塚　2002a: 905）

7) 2004～2006 年の 3 年間に渡り、当該地域を複数回に渡り訪れ、参与観察を行った。

8) 1914～1922 年までイギリスの保護国であったが、それ以前から大きな影響を受けていた。

9) 山口の著書より引用。2004 年 1 月時点エジプト中央動員統計局、計画局等による算出。

10) キリスト教徒だけの人口比を考えた場合、総数の約半分が上エジプトに居住している。1986 年の国勢調査では上エジプト地方の都市部で 16.5%が、農村部で 9.2%がキリスト教徒であった。上エジプト全体では 11%がキリスト教徒という事になる。

11) 古代においても上下エジプトに国を分ける概念は存在し、その場合は現在のベニ・スエフ周辺で上下エジプトの境界が存在した。

12) エジプト人のほとんどが小学校には通うが、中・高等学校を終了しないものはいまだに多い。一方でエジプトの大学教育の質はアラブ世界で非常に評価されており、カイロ大学、アズハル大学、アインシャムス大学など、カイロには名門大学が集まる（小杉 2004:128）。

13) ルクソール、クルナ、ラガルダ、ダバイヤ、トードなど 11 の市と村で構成されている。

14)クルナ村の情報に関しては Luxor supreme council public relation manager のムハンマド・アッバース氏にご協力いただいた。

15) 聖者に相当する語は多様で、ピール（師）、サフィー（親しき友）、シャリーフもしくはサイード（預言者ムハンマドの子孫）などが用いられる。（大塚 2002b: 905）

16) ムスリムの間でいわゆる聖者に対する概念は必ずしも明確なものではなく、また、キリスト教で用いられる、列聖された者としての「聖者」との違いがある事など、いまだ議論の余地を残

している事に留意せねばならない。（赤堀 2005:23-40）

17) 「祝福」を意味するアラビア語。神が預言者や聖者たちに与えた「特別の祝福」としての超人的な能力をさし、自らに宿るバラカを人々に伝え救済する事ができる。このような神秘的な力は保有者の生存中ばかりでなく、死後においても継続すると信じられている(私市 2002: 783)。

18) イスラーム初期においては知識人の総称であったが、次第にイスラーム法学者、神学者、伝承学者など宗教知識人に限定されていった。現代においては宗教系の大学や学部を卒業後、学校やモスクのほか司法などの分野で活躍する人たちを呼ぶ（保坂 2002:148）。

19) アラビア語で「革新」の意味。預言者ムハンマドの時代に先例のない信仰、習慣をさす。正しい信仰からの逸脱であって拒否されるべきものという考えもあるが、一方で時代、状況に応じて認められるべきものという考え方もある（片倉 2002: 320）。

20) この他にも、未来の予見、透視能力、探知能力、死者の言葉の聴聞なども聖者の能力である（大稔 1993:32）。

21) アラビア語のタサウウフ（tasawwuf）と同義とも考えられる。イスラームにおいて内面を重視する思想・運動をさす。そもそもこの語は 18 世紀に使用されるようになったものであり、本来的にイスラームの信仰とは無関係だった。（東長 2002: 536-538　Ernst 1997:9）

22) 禁欲主義がこれにあたると言われる場合もあるが、簡単には関連付けられない。

23) 名祖の精神的所産を継承し、共通の系譜を持つ事によって一体性を有するスーフィーの流派、スーフィーの教団を指す。（堀川 2002:616-617）

24) シーア派の一分派であるイスマイリール派が建てた王朝。北アフリカとエジプトを主要支配地域にしていた。(菟原 2002: 826-827)

25) 彼の誕生日は不明で 3 月 12 日は彼の死亡した日であるが、誕生日が不明なために便宜上、死亡した日と同日にされている（グルーネバウム 2002:89-111）。

26) ムスリムの修行法のひとつで、日本の念仏や唱名のように神の名や信仰告白を唱える修行法。ズィクルは集団行われ、皆で体を動かし、息を整え、徐々に陶酔の域に達するものであり、聖者生誕祭用な祝祭の折に行われる（川本 2002:521-522）。

27) 観光のついでがなければ聖者廟にはなかなか人々が参詣しないヨルダンの例を清水が提示しているが、聖者生誕祭に観光の文脈:を見て取る場合、彼の指摘は非常に興味深い（清水 1992:151-152）。

28) 聖者の職業に関しては、カリフの子孫や支配者層から、油売り、肉屋、バナナ売り、床屋、大工など身分や貴賤、職業的な差別などはなく、さまざまな職業を包含している。また女性や、障害者、狂人なども聖者として信仰を集めている（大稔 1993:25）。

29)ヒジュラ暦の第 9 番目の月。イスラームでは神聖な月であり、一ヶ月間の断食、斎戒が課せられる月（森 2002:1045）。

30) ヒジュラ暦の場合一年が 354 ないし 355 日となるため、太陽暦と毎年 10～12 日のずれが生じる（佐藤 2002: 809）。

31) 夢の世界もまた聖者の自在な空間であった（大稔 1993:32）。

32) 2006 年の A 氏の聖者生誕祭の前に、コンサートを主催者の身内に不幸があり、コンサートは自粛された。

33） 行政に出店に際して店の規模に応じてお金を収める必要はあるようである。

34) 実修者の言説では上エジプト地域でも、特にソハーグ、エドフなどの地域がナッブートの競技の盛んな場所として有名であり、エドフは現在最も盛んな場所として名高い。

35) ケナーやアスワンではシューバ材のナッブートで競技が行われているとの事である。

36） 筆者の調査においても 2006 年のA氏の聖者生誕祭においてシューバを用いた試合を一試合確認できた。

37) カイロにあるモスク、ウラマー組織、大学、中・高など総合的学術・教育機構。970 年に新都カイロの中心としてモスクが建築され、978 年から教育が開始された。アズハル大学は世界最古の大学といわれ、イスラーム学、イスラーム法、アラビア語、医・工・理学部がある総合大学として、イスラーム世界からの多くの留学生を受け入れている（小杉 2002:17)。

38) 近隣の村々からの参加者は車を利用してクルナ村まで来村し、その日のうちに帰村する。また遠隔地からの参加者の中にはクルナ村の親戚・知人宅を頼って来るものも少なくない。

39）N氏は毎年いくつかのの聖者生誕祭に出向くが、現在は平素の忙しさから大きな祭に限られたもののみとなっている。それらはナッブートの行われるものだけでない。上エジプトではケナー、ルクソール、ソハーグ、オゴースなどの各聖者生誕祭へ、下エジプトではベニ・スエフ、カイロなどに訪れるそうである。

40) 元来ボクシングが円形の人垣の中で行なわれ、そのため現在の競技エリアをリング（輪）と呼ぶ事に類似している。

41) サラームの後ラーシュが割愛され、試合が行なわれる場合もある。

42) 一度解散される理由については、「夕刻のみが A 氏への奉納であり、その後は遊びである。」という意見や、「遊戯施設などいろいろなものを見るための時間をとるため」、「お土産等を購入する時間をとるため」、また、「遠方の町から来る人々の帰りの列車の時刻などへの配慮」…などさまざまな話があるが、どれも説得力に欠ける。

43)本競技会においては、弱冠 6 歳の子供が参加していた事は注目される。しかしながら彼は、彼の祖父や知人とのみ試合を行っていた事、またその参加に関して冷ややかな眼が向けられていた事などから考えても、特例と考えて良いだろう。

44) エドフなどのナッブートが盛んな地域では、頻繁に子供の練習が行われているとの事である。

45）参加者の語りではナッブート実修者の父がナッブートを引退する時に子供に自らのナッブートを譲るとの話もある。

46) さまざまな材質の木材や、同じ木材でも太さなどの違うものなどさまざまなナッブートを販売している。ちなみに一本 20 ポンド～70 ポンドほどである。

47）マレーシアや、シンガポールなどの国からの輸入材との事であるが、ナッブートの使用だけのために輸入されたものかは不明である。

48）これらの廟生誕祭は人手が多く、近辺での競技が難しく、少し離れた場所で競技が行なわ

れるとの事である。しかしながら、離れた場所で行われる事などを含めて考えると、生誕祭の文脈の中でナッブートが行なわれているのかという基本的なところから確認する必要があろう。

49) イングランドで行われるボールゲーム。町中をフィールドに
ひとつのボールを巡り攻防が繰り広げられる。近代的な価値観にそぐわないと言う事で多くの事例が禁止されすでに姿を消しているが、数例がいまだに継承され、行われている。

50) このような試みは、過去にルクソール、アスワンなど上エジプトの町でで行われた事があった。

51) この観光化ナッブートのルールに関してはナッブートに精通した人物が参画し決定したとのことであるが、詳細については不明である。

52) 1997 年にルクソールにおいてイスラーム原理主義過激派のテロリスト集団が外国人観光客に対し行った無差別殺傷テロを指す。この事件で日本人 10 名を含む外国人観光客 61 名とエジプト人警察官 2 名の合わせて 63 名が死亡、85 名が負傷した。

53) 現在はオムダの制度がなくなり、名前だけ残って、いわゆる顔役的な位置づけになっているが、当時のオムダの権力は絶大であり、村の中で彼は大統領のような存在であったそうである。

54) スポーツが当該地域の文化文脈から離れ、他の文化へ流入し影響を与える過程を評して、たとえばイギリスへのアメリカのスポーツ文化の流入に関して Maguire は「アメリカナイゼーション」という言葉を使用し、また Wagner はそのような現象においては、国内外でのスポーツ活動の差異が縮小し、類似点が増大する事に注目し、スポーツ文化の「世界化」と言葉が用いている。特に Wagner はスポーツ文化が長期的には均質化に向かう傾向にある事を指摘しており、本事例の考察にも有益な見解である(高津 2006:7-44,Maguire 1990:213-237,Wagner 1990:399-402)。